

# 大智度論和訳(1)

中諭  
吉訪  
田野  
栄道  
人誠興

## 凡例

- テキストは『大正新脩大藏經』第二十五卷所収本を用いた。(印發「高麗大藏經」(新文豊公司刊)によつて※を付して訂したものもある。
- 上段には原文を掲げ、下段には訳文を記した。
- 上段の原文は、訳者の見解によつて段落をつけ、それぞれの頭初に「帰敬偈」の如く呼称を付した。
- 訳文において、原文の意味を補う必要がある時は( )を用い、語句の意味を補う時は、その語句の下に〔 〕を用いた。
- 訳文において、経・論などを引用した時、および問答などを「 」を用いた。

大智度論和訳(1) (中祖・諭訪・大野・吉田)

どには「 」を用いた。

- 重要と思われる語句にはサンスクリット語を付記したが、この作業にはラモット氏の仏訳(Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna(MAHĀPRAJÑĀPĀRAMITĀŚĀSTRA) par ÉTIENNE LAMOTTE) 1949 よりも平川彰、平井俊英、吉津宜英、袴谷憲昭、高橋壯共著『俱舎論索引』(第一部)、大藏出版、一九七七を参照した。
- 註は語句の意味を記すのみ、原文に用いられた語句の出典を明らかにするところとした。

大智度共摩訶比丘僧釋論第六

經 共摩訶比丘僧 論 共名一處一時一心一戒一見  
一道一解脫。是名爲共。摩訶秦言大。或多或少  
勝。云何大。一切衆中最上故。一切障礙斷故。  
天王等大人恭敬故。是名爲大。云何多數至五千  
故名多。云何勝。一切九十六種道論議能破。故  
名勝。云何名比丘。比丘名乞士。清淨活命故名  
爲乞士。如經中說。舍利弗入城乞食。得已。向  
壁坐食。是時有梵志女名淨目。來見舍利弗。問  
舍利弗言。沙門汝食耶。答言食。淨目言。汝沙  
門下口食耶。答言不。仰口食耶。不。方口食  
耶。不。四維口食耶。不。淨目言。食法有四  
種。我問汝。汝言不。我不解。汝當說。舍利弗  
言。有出家人合藥種穀殖樹等不淨活命者。是名  
下口食。有出家人觀視星宿日月風雨雷電霹靂不  
淨活命者。是名仰口食。有出家人曲媚豪勢通使  
四方巧言多求不淨活命者。是名方口食。有出家  
人學種種呪術ト筮吉凶如是等種種不淨活命者。  
是名四維口食。婦。我不墮是四不淨食中。我用  
清淨乞食活命。是時淨目聞說清淨法食。歡喜信

大智度共摩訶比丘僧釈論第六

經 摩訶比丘僧(Mahābhiksū-saṅgha) と共に、論「共(sārdham)」と  
は、一處(deśa)・一齒(kāla)・一心(citta)・一戒(śīla)・一見(drṣṭi)  
一道(mārga)・一解脫(vimokṣa) を名づける。是を名づけて「共」とい  
う。

「摩訶(mahat)」とは、秦において大といい、或は多とか、或いは勝と  
いう。どうして大なのか。一切衆の中で最上であるからであり、「一切の障  
礙(avaraṇa)」を断じているからであり、天王などの大人が恭敬うから、是  
を名づけて大という。どうして多なのか。数が五千に至るので多と名づけ  
るのである。どうして勝なのか。一切の九十六種の外道の論議(upadeśa)  
を能く破るので、勝と名づけるのである。どうして「比丘(bhikṣu)」と  
名づけるのか。比丘を乞士と名づける。清淨なる活命(pariśuddhājīva)  
をするので、名づけて乞士というのである。『經』の中に説かれるところ  
である。

舍利弗(Sāriputra) は城に入つて乞食し、得已いて壁に向つて坐つて食  
べていた。是の時、梵志の女があり、淨目(Sucimukhi)と名づいた。(この  
の女が)やつて来て、舍利弗を見て、舍利弗に問うて言つた。「沙門よ、  
汝は食べているのか」と。答えて言つた。「食べている」と。淨目は言つ  
た。「汝、沙門よ、(食べているのは)下口食(adhomukho bhunjasī)で  
あるのか」と。答えて言つた。「そうではない。婦**あなだ**よ」。何「仰口食

解。舍利弗因爲說法得須陀洹道。如是清淨乞食活命故名乞士。

(ūrdhvamudho bhuñjasi) であるのか。」「そうではない。」「方口食 (diñmukho bhuñjasi) であるのか。」「そうではない。」「四維口食 (vidisāmukho bhuñjasi) であるのか。」「そうではない。」淨目は言つた。「食法に四種がある。我は汝に問う。汝は否 <sup>(3)</sup> という。我は(理)解しない。汝は(その理由を)説くべきである」と。舍利弗は言つた。「出家 (parivrajita) の人で、藥を(謂)合し、穀(類)を種え、樹を植えるなどの不淨なる活命の者 (asuddhājīva) <sup>(4)</sup> があり、是を下口食と名づける。出家人で、星宿・日月・風雨・雷電・霹靂 <sup>(5)</sup> を観視ところの不淨なる活命の者があり、是を仰口食と名づける。出家人で、豪勢な人に曲媚て、四方に通使じ、言を巧みにし、多くを求める不淨なる活命の者があり、是を方口食と名づける。出家人で、種々の呪術・ト筮・吉凶を学ぶ。これら種々の不淨なる活命の者があり、是を四維口食と名づける。姉よ、我は是の四不淨食の中に墮ちていない。我は清淨の乞食によつて活命している。」と。是の時、淨目は清淨の法食 (parisuddha dharmika āhāra) を説くのを聞いて歓喜び信解つた。舍利弗は、そのため法を説き、須陀洹道 (śrota āpanna) を得させた。」のように清淨な乞食活命しているから乞士 <sup>(6)</sup> なのである。

復次比名破。丘名煩惱。能破煩惱故名比丘。復次出家人名比丘。譬如胡漢羌虜各有名字。復次

受戒時自言。我某甲比丘盡形壽持戒。故名比丘。復次比名怖。丘名能能。怖魔王及魔王反人民。當出家剃頭著染衣受戒。是時魔怖。何以故怖。魔王言是人必得入涅槃。如佛說。有人能剃頭著染衣一心受戒。是人漸漸斷結離苦入涅槃云何名僧伽。僧伽秦言衆。多比丘一處和合是名僧伽。譬如大樹叢聚是名爲林。一一樹不名爲林。除一一樹亦無林。如一一比丘不名爲僧。除一一比丘亦無僧。諸比丘和合故僧名生。是僧四種。有羞僧。無羞僧。啞羊僧。實僧。云何名有羞僧。持戒不破。身口清淨。能別好醜。未得道。是名有羞僧。云何名無羞僧破戒。身口不塌。無淨不作。是名無羞惡。云何名啞羊僧。雖不破戒。鈍根無慧。不別好醜。不知輕重。不知有罪無罪。若有僧事。二人共諍。不能斷決。默殺無言。譬如白羊乃至人殺不能作聲。是名啞羊僧。云何名實僧。若人若無學人。住四果中行。四向道是名實僧。是中二種僧可共。百一羯磨說戒受歲種種得作。是中實聲聞僧六千五百。菩薩僧二種。有羞僧實僧。以是實僧。以是實僧故餘

復た次に、出家の人に「比丘」と名づけるのは、胡・漢・羌・虜の(国<sup>(5)</sup>)おののに名字があるのと同じである。

復た次に受戒(upasam̄pad)する時、自から「我れ某甲比丘、形壽の尽きるまで、戒を持たん」と言う。だから「比丘」と名づけるのである。

復た次に、「比」を怖(bhi)といふ、「丘」を能(kṣam)という。能く魔王(māra)および魔の人民(māra-kāyika)を怖れ、出家して頭を剃り、染衣(kāsāya)を著けて、戒を受けようとするのだ。是の時、魔は怖れた。どうして怖れるか。魔王は言つた、「是の人は必らず涅槃に入ることができる」と。仏の説くように、人有つて能く頭を剃り、染衣を著け、一心に戒を受けるならば、是の人は漸漸に結(使)bandhana)を断じ、苦を離れて涅槃に入るであろう。

どうして「僧伽」(saṅgha)と名づけるのか。「僧伽」は秦において衆という。多くの比丘が一処に和合しているので、是を「僧伽」と名づけるのである。譬如、大樹の叢聚(あつま)りを名づけて林といい、一一の樹を林とはいわず、一一の樹が除ければ、また林でないようなものである。」のよう、一一の比丘を僧(伽)とはいわず、一一の比丘が除ければ、また僧ではない。諸の比丘が和合しているので、僧(伽)の名が生ずるのである。この僧には四種ある。有羞僧(hrimat-bhikṣu)・無羞僧(āhrikiya-bh.)・啞羊僧(edamūka-bh.)・実僧(bhūta-bh.)である。どうして有羞僧と名づけるのか。持戒して破らないで、身(kāya)と口(vāc)が清浄であつ

皆得名僧。以是故名比丘僧

て、能く好よき（と）醜みにくきを別けるけれども、未だ道を得ていない。是を有羞僧と名づける。どうして無羞僧というのか。破戒して、身と口が不淨であつて、（すべての）惡を作れないとがない。是を無羞僧と名づける。どうして毘羊僧といふのか。破戒はしないけれども、鈍根（mṛdvindriya）であつて、（智）慧（prajñā）なく、好（と）醜を別けず、（罪の）輕重を知らず、有罪（āpatti）と無罪（anāpatti）を知らない。若し僧（伽）の事もんだいがあつて、二人ともに諍つても、断決することができるないで、默然として言の無いことは、譬えれば白羊が結局人が殺そとするとときにも、声を作だすことができないようなものである。是を毘羊僧と名づける。どうして実僧じんそうといふのが。若しくは学人（Śaikṣa）、若しくは無学人（Aśaikṣa）で、四果（phala）の中に住し、四向道（pratipannakamārga）を行じている。是を実僧といふ。是の（四つの）中の一種の僧は共ともにすることができる。百一羯磨<sup>(8)</sup>・説戒・受歲<sup>(9)</sup>などのことをすることができる。是の中に実の声聞（の僧）<sup>(10)</sup>は六千五百（人）あり、菩薩の僧は二種あり、有羞僧と実僧とである。是の実僧をもつて、余「の三つ」を皆な「僧」と名づけることができる。これによつて、「比丘」と名づけるのである。

### 經大數五千分

論云何名大數。少過少減。是名

爲大數。云何分。多衆邊取一分。是名分。是諸比丘千萬衆中取一分。五千人以是故名五千分

### 經大數五千分

論云何名大數。少過少減。是名

論どうして「大數」というのか。少に過おくても、少に減すくなくても、これを「大數」というのである。どうして「分」というのか。多衆の邊から一

80b 分を取つて、これを「分」という。この諸の比丘千萬衆の中の一分为取つて五千人とするのである。こうしたうわけで、「五千分」というのである。

經皆是阿羅漢 論問曰。云何名阿羅漢。阿羅名賊。漢名破。一切煩惱賊破是名阿羅漢。復次阿羅漢一切漏盡故。應得一切世間諸天人供養。復次阿名不。羅漢名生。後世中更不生。是名阿羅漢

經皆な是れ阿羅漢 (Arhat) なり。  
論問うていう。「<sup>(12)</sup>アラハトて阿羅漢と云うのか」と。「阿羅 (ara)<sup>(13)</sup>」を賊 (ari)といい、「漢 (hat)<sup>(14)</sup>」を破 (han) という。一切の煩惱 (kleśa) の賊を破るので、是を「阿羅漢」といつたのである。

復た次に、「阿羅漢」は一切の漏 (āśrava) を除して云ふので、一切世間や諸天人の供養 (pūjā) を受けねばならないがである。

復た次に、<sup>(15)</sup>「阿 (a)」を不とし、「羅漢 (rahat)<sup>(16)</sup>」を生 (ruh) という。後世の中にもはや生やしないとがな。これを「阿羅漢」といふのである。

經諸漏已盡 論三界中三種漏已盡無餘。故言漏盡也

經無復煩惱 論一切結使流受扼縛蓋見纏等斷除故。名無煩惱也

經諸漏 (āśrava)、<sup>(17)</sup>「」と云ふ。  
論三界の中の三種の漏〔欲・有・無明漏〕は「」に尽きて余す」とがな。だから「漏尽」といふのである。

經復た煩惱 (kleśa) 無し。

論一切の結使の流 (saṃyojana)・受取 (upadāna)・縛 (bandhana)・蓋 (nivarana)・見 (drṣṭi)・纏 (paravasthāna) などを断除してあるので、「煩惱無し」と名づけられるのである。

經心得好解脫慧得好解脫 論問曰。何以說心得

好解脫慧得好解脫答曰。外道離殺人。一處一道心得解脫。非於一切障法得解脫。以是故。阿羅漢名心得好解脫慧得好解脫。復次諸阿羅漢。二道心得解脫。見諦道思惟道。以是故名心得好解脫。學人心雖得解脫。非好解脫。何以故。有殘結使故。復次諸外道等。助道法不滿。若行一功德若行二功德求道不能得。如人但布施求清淨。如人祀天。言能脫<sup>16</sup>衰。能得常樂國中生。亦更有言八清淨道。一自覺<sup>17</sup>二聞三讀經四畏內苦五畏大衆生苦六畏天苦七得好師八大布施。但說第八名清淨道。復次有外道。但布施持戒說清淨。有但布施禪定說清淨。有但布施求智慧說清淨。如是等種種道不具足。若無功德若少功德。說清淨。是人雖一處心得解脫。不名好解脫。涅槃道不滿足故。如偈說

無功德人不能渡 生老病死之大海  
少功德人亦不渡 善行道法佛所說

是中應說須跋陀梵志經。須跋陀梵志年百二十歲。得五神通。阿那跋達多池邊住。夜夢見一切

經心、好解脫 (suvimukta) を得、慧、好解脫を得<sup>(16)</sup>。

論問うていう。「何をもって心、好解脫を得慧、好解脫を得と説くのか」と。答えていう。「外道の欲を離れた人は、一處・一道に心の解脱 (cittavimukti) を得るけれども、一切の障<sup>17</sup>法 (āvaraṇa) から解脱を得る」ことはやせなし。いううわけで、阿羅漢を『心、好解脫を得、慧、好解脱を得』というのである」と。

復た次に、諸の阿羅漢は「道に (おこり) 心の解脱を得てゐる。(すなわち) 見諦道 (satyadarśana-mārga) も思惟道 (bhāvanā-mārga) である。」<sup>17</sup>いうわけだ、「心、好解脫を得」というのである。學人の心は解脱を得るといつても、好解脫ではない。何となれば、残っている結使 (saṃyojana) があるからである。

復た次に、諸の外道などは、助道の法 (bodhipakṣa-dharma) を<sup>17</sup>満しないで、あるいは一功德 (guna) を行ひたり、あるいは二功德を行ひたりして、道を求めるけれども、(解脱を) 得る「」<sup>17</sup>ことができない。人がただ布施 (dāna) だけをして、清淨 (viśuddhi) を求めるようなものである。人の天を祀<sup>17</sup>て<sup>17</sup>、「能く憂<sup>17</sup>衰 (daurmanasya) を脱し、能く常楽国 (nityasukha-kṣetra) の中に生まれる」<sup>17</sup>のだ」というようなものである。亦た更に次の「」<sup>17</sup>がある、「へ(種の) 清淨道がある。」には自覺 (svāvabodha)、<sup>17</sup>聞 (śruti)、<sup>17</sup>には讀経 (adhyāyana)、<sup>17</sup>には内苦 (ādhyātmika-duḥkha) を厭む、<sup>17</sup>五には大衆の生劫 (mahā-

人失眼裸形冥中立。日墮地破大海水竭。大風起吹須彌山破散。覺已恐怖。思惟言。何以故爾。我命欲盡。若天地主欲墮。猶豫不能自了。以有此噩夢故。先世有善知識天。從上來下語須跋陀言。汝藪恐怖。有一切智人名佛。後夜半當入無餘涅槃。是故汝夢。不爲汝身。是時須跋陀。明日到拘夷那竭國樹林中。見阿難經行。語阿難言。我聞汝師說新涅槃道。今日夜半當取滅度。我心有疑。請欲見佛決我所疑。阿難答言。世尊身極。汝若難問勞擾世尊。須跋陀如是重請至三。阿難請答如初。

sattva-d°) を畏れる、六には天苦(deva-d°) を畏れる、七には好師 (ācārya)を得る、八には大布施 (mahādāna) である。」ただ第八だけを説いて清浄道といつてゐるのである。

復た次に、有る外道は、「但だ布施・持戒のみが清浄である」と説き、有る(外道)は、「但だ布施・禪定だけが、清浄である」と説き、有る(外道)は、「但だ布施して、智慧を求めることが清浄である」と説いている。これらのような種々の道は具足していない。あるいは無功德、あるいは少功德であるのに、清浄であるとみずから説いている。是の人は、一處に心の解脱を得ていて「好解脱す」といわない。(それは) 涅槃の道を満足させることができないからである。偈に説いているところである。

「無功德の人、生老病死の大海上渡ること能わず。少功德の人もまた渡らず善く道法を行すること、仏の所説なり」と。

是の中はまさしく『須跋陀梵志經 (Subhadrabrahmacāri-sūtra)』<sup>(18)</sup> と明確に説かれている。(すなわち) 須跋陀梵志 (brahmacārin Subhadra) は、年が百二十歳であつて、五神通 (abhijñā) を得ていて、阿那跋達多 (Anavatapta)<sup>(19)</sup> 池の辺に住んでいた。夜、夢の中で一切の人が、眼を失ない、裸形でもつて冥中に立ち、日は墮む、地は破れ、大海の水は竭れ、大風が起り吹き、須彌山<sup>(20)</sup>が破散したのを見た。(夢から) 覚め乍つて恐怖れ、思惟して言うに、「どうしてこんな夢をみたのか。我的命が尽きようとして欲しているのか。若くは天地の主が墮ちようと欲てゐるのであらうか」と。猶

予して、自から了（解）かる」とができなかつた。此の悪夢を有たからで  
ある。先世に善知識 (kalyāṇamitra) の天（人）があつた。（天）上より  
來下つて、須跋陀に語つていつた。「汝は恐怖れてはいけない。一切智の  
人 (sarvajña) があり、仏という。後夜の半ばにきつと無余涅槃 (nirupa-  
dhiśeṣa-nirvāṇa) に入られる。是の故に汝の（見た）夢は、汝の身にか  
かわるものでない」と。是の時、須跋陀は、明日に拘夷那竭國 (Kuśina-  
gara) の樹林の中に到つて、阿難の経行するのを見て、阿難に語つていつ  
た。「我は聞いている。汝の師「仏世尊」は、新たに涅槃の道を説かれ、  
今日の夜半、あつと滅度 (nirodha) を取られる。我の心に疑 (kāñśā)  
があるので、請うて、仏に見えて、我が疑う所を（解）決したい」と。阿  
難は答えて言つた。「世尊の身は極わまつていて。汝が若し難問するなら  
ば、世尊を勞擾せることになる」と。須跋陀は、このように重ねて請う  
と二たびにわたつた。阿難の答えは初めのとおりであった。

佛遙聞之勅語阿難。聽須跋陀梵志來前自在難  
問。是吾末後共談。最後得道弟子。是時須跋陀  
得前見佛。問訊世尊已。於一面坐。如是念。諸  
外道輩捨恩愛財寶出家皆不得道。獨瞿曇沙門得  
道如是念竟。卽道佛言。是閻浮提地。六師輩各  
自稱言。我是一切智人。是語實不。爾時世尊以

偈答曰

我年一十九 出家學佛道  
我出家已來 已過五十歲  
攝戒禪智慧 外道無一分  
少分尙無有 何況一切智

若無八正道。是中無第一果第二第三第四果。若有八正道是有第一果第二第三第四果。須跋陀是我法中有八正道。是中有第一道果第二第三第四道果。餘外道法皆空。無道無果無沙門無婆羅門。如是我大衆中。實作師子吼。須跋陀梵志聞是法得阿羅漢道。思惟言。我不應佛後般涅槃。

如是思惟竟。在佛前結跏趺坐。自以神力身中出火燒身而取滅度。以是故。佛言無功德少功德。是助道法不滿。皆不得度。佛說一切功德具足故。能度弟子。譬如小藥師以一藥二種藥不具足故不能差重病。大藥師輩具足衆藥。能差諸病。問曰。若一切三界煩惱離故。心能解脫。何以故。佛言染愛離心。得解脫。答曰。愛能繫閉心有大力以是故說。不說餘煩惱。愛斷餘則斷。復次若人言王來知必有將從。染愛亦如是。又如

81 a

る」と。」のように念い竟つて、すなわち仏に問うて言つた。「是の闍浮提<sup>(21)</sup>(Jambudvipa) の地の六師(外道)<sup>(22)</sup>の輩はおののおのの自から称して言うに、我は是れ一切智人であると。是の語は、実であるのかどうなのですか」と。爾の時、世尊は偈をもつて答えて曰われた。

「我が年一十九にして、出家して仏道を学ぶ。我れ出家せしより已來、已に五十歳を過ぎ、淨戒・禪(定)・智慧あり。外道は一分も無く、少分すら尚お有ることなし。一切智においては尚更なり」と。

「若し八正道(āryāṣṭāṅgikamārga) が無いならば、是の中に第一果・第二・第三・第四の果(phala) はない。若し八正道が有るならば、是の中に第一果・第二・第三・第四の果がある。須跋陀よ、是の我が法の中に八正道がある。是の中に第一道果・第二・第三・第四の道果がある。余の外道の法は、皆な空しくして道がなく、果なく、沙門もなく、婆羅門もない。このように、我は大衆の中に(おいて) 実に師子吼(simhanada) を作すのである」と。須跋陀梵志は、是の法を聞いて、阿羅漢道(arhavatva)を得、思惟して言つた。「私は必ずしも仏の後に槃涅槃(parinirvāna) しない」と。」のように思惟し竟つて、仏の前に在つて、結跏趺坐し、自から神力(rddhibala) をもつて、身中から火を出し、身を焼いて滅度を取つた。」のようなわけで、仏はいわれた、「無功德・少功德は助道の法を満足させない」と。仏は一切の功德を具足していると説かれるので、能く弟子を度<sup>(23)</sup>われるのである。譬えば、小藥師(vaidya) は一種の薬(bhai-

捉巾一頭餘則盡隨。愛染亦如是。愛斷則知餘煩惱皆已斷。復次諸結使皆屬愛見。屬愛煩屬惱煩心。屬見煩惱惱覆慧。如是愛離故。屬愛結使亦離得心解脫。如是無明離故。屬見結使亦離得慧解脫。復次是五千阿羅漢。應不退法得無生智。以是故。言心得好解脫慧得好解脫。不退故。退法阿羅漢。得時解脫如。劬提迦等。雖得解脫非好解脫以退法故。

sajya)・11種の薬(だけ)をもつての、(多くの薬を)具足していないので、重病を差す<sup>(24)</sup>ことができない。大薬師<sup>(24)</sup>の輩は、衆の薬を具足しているから、能く諸病を差す<sup>(25)</sup>ことができるようなものである。

問うていう。「若し一切の三界(tridhātu)の煩惱(kleśa)を離れるので、心に解脱を得るのであれば、いかなる理由で仏は、染愛(trṣṇā)<sup>(25)</sup>が心を離れて解脱を得ると言われるのか」と。答えていう。「愛は能く心を繫<sup>(26)</sup>閉す大きな力がある。」<sup>(26)</sup>いうわけで、(愛)を説いて余の煩惱を説かないのである。愛を断するならば、余は則ち断ぜられるのである」と。

復た次に、若し人が、「王、来る」と叫<sup>(27)</sup>たなれば、必らず將(軍)と從(者)がいるのを知るようなものである。染愛もまたこれと同様である。また巾の一頭<sup>(28)</sup>を捉えたならば、余は則ち尽く随うようなものである。愛染もまたこれと同様である。愛を断するならば、則ち余の煩惱も皆な<sup>(29)</sup>に断じたことを知るであろう。

復た次に、諸の結使(samyojana)は、みな愛(trṣṇā)<sup>(26)</sup>と見(drṣṭi)に属している。愛に属する煩惱は心(citta)を覆い、見に属する煩惱は慧(prajñā)を覆う。このように愛を離れるので、愛に属する結使も、また離れて心の解脱を得る。このように無明(avidyā)を離れるので、見に属する結使も、また離れて慧の解脱を得るのである。

また次に、是の五千の阿羅漢は、不退法(aparihāra-dharma)と心じて無生智(anutpāda-jñāna)を得る。是の故に、「心好く解脱を得、慧

好く解脱を得と説う。不退(の法に)よるからである。退法 (parihāraṇa-d°) の阿羅漢<sup>(29)</sup>は、時解脱を得る。劬提迦<sup>(30)</sup> (Godhika) のいわれば、解脱を得るといつても、「好く解脱する」わけではない。退法によるからである。

経心調柔軟 論若有恭敬供養瞋恚罵詈撻打者。

心等無異。若得珍寶瓦石視之一等。若有持刀斫截手足。有持栴檀塗身者。亦等無異。復次婬欲瞋恚慢疑見。根本已斷故。是謂心雖柔軟復次是諸阿羅漢。欲染處不染。應瞋不處。應癡處不癡。守護六情以是故名心調柔軟。如偈說

人守護六情 如好馬善調

如是實智人 諸天所敬視

諸餘凡人輩不能守護六情。欲瞋慢癡疑見不斷故。不調柔如惡弊馬。以是故。諸阿羅漢名心調柔軟

経心調い柔軟なり。

論若し恭敬 (namaskāra)・供養 (pūjā) するものがあつても、若し瞋恚・罵詈・撻打ものがあつても、心は等しくて異なることはない。若し珍寶瓦石を得ても、之を見るとは一等い。若し力を持って手足を斫截した(者がいても)、あるいは栴檀 (candana) を持つて身に塗っている者があつても、亦た等しくして異なることはない。

復た次に婬欲(rāga)・瞋恚(duṣṭa)・憍慢(abhimāna)・疑見(moha)の根本は已に断じてゐるので、是を「心調い柔軟なり」と謂う。

復た次に、是の諸の阿羅漢は、欲染の処にあつても染まらない。瞋(恚)の処にあっても、応じて瞋ることはない。愚(癡)の処にあっても、応じて癡にならない。六情を守護えている。これをもつて、「心調い柔軟なり」というのである。偈に説くがごとくである。

「人の六情を守護することは、好馬の善く調うるがことし。かくの如きは実に智人にして、諸天に敬視せらる」と。

諸の余の凡人の輩は、六情を守護えることができない。(婬)欲・瞋恚(恚)・(憍)慢・(愚)癡・疑見を断じていないので、(心)調柔(軟)で

ない」とは、惡弊の馬の「」とある。これをもじりて、諸の阿羅漢を心調柔軟と名づけるのである。

### 経摩訶那伽

論摩訶言大。那名不。伽名罪。諸

阿羅漢諸煩惱斷。以是故名不罪。復次那伽或名龍或名象。是五千阿羅漢。諸無數阿羅漢中最大力。是以故言如龍如象。水行中龍力大。陸行中象力大。復次如善調象王。能破大軍直入不廻。不畏刀杖不難水火。不走不退死至不避。諸阿羅漢亦復如是。修禪定智慧故能破魔軍及諸結使賊。罵詈撃打不悔不恚。老死水火不畏不難。復次如大龍王。從大海出起於大雲遍覆虛空。放大電光明照天地。澍大洪雨潤澤萬物。諸阿羅漢亦復如是。從禪定智慧大海水中出。起慈悲雲潤及可度。現大光明種種變化。說實法相雨弟子心令生善牙。

### 経摩訶那伽 (Mahānāga)

論「摩訶 (Mahat)」とは大をいう。「那 (na)」とは不をいう。「伽 (agha)」とは罪をいう。(諸)の阿羅漢は諸の煩惱 (kleśa) を断じている。いやうわけで不罪というのである。また次に「那伽 (Nāga)」はあるいは龍といい、象ともいう。この五千の阿羅漢は、諸の無数の阿羅漢の中でもっとも大力である。いやうわけで、龍の如く象の如くであるというのである。水の中を行むときは龍の力が大であり、陸を行むときは象の力が大である。また次に、善く調 (御) した象王 (gajapati) が能く大軍 (senā) を破つてまつ直ぐに入んで(頭を)廻らせず、刀杖を畏れず、水火をも難らず、走らず退かず死に至んでも避けることのないよう、阿羅漢もまたまた同様である。禪定 (dhyāna) と智慧 (prajñā) を修めているから能く魔軍 (mārasenā) や諸の結使 (saṃyojana) へう賊を破るのである。罵詈 (mṛgī)、撃打 (wāga) たれても悔いぬくとめなく恚る (vīra) もない。耆 (jarā)、死 (marana) も水・火も畏れず難らない。また次に、大龍王が大海 (sāgarā) が心出 (現) して、大雲 (megha) を起し虚空 (akāśa) を遍覆つて、大電光 (vidyut) を放ち、天地を照明し、大洪雨 (varṣa) を澍いで萬物を潤沢すよつて、諸の阿羅漢もまたまた同様である。禪定と智慧の大海水の

中から「<sup>アムガダ</sup>田」、慈悲 (karuṇā) の心を起し、潤しを度うぐれみの心及  
ばしゃ、大光明 (aloka) の種々の変化 (parināma) を現わして実の法相  
(bhūtalakṣaṇa) を認じた弟子の心に因るべく善牙 (kuśalamūla) 「善  
根」を生じたのである。

### 經所作已辨 (kṛtakṛtya)

經所作已辨 論問曰。云何分所作。云何名已辨  
答曰。信戒捨定等諸善法得故。名爲所作智慧精  
進解脫等。諸善法得故。是名已辨。二法具足滿  
故。名所作已辨復次諸煩惱有二種。一種屬愛。  
一種屬見。屬愛煩惱斷故名所作。屬見煩惱斷故  
名已辨。復次色法善見故名所作無色法善見故名  
已辨。可見不可見有對無對等二法亦如是。復次  
不善無記法斷故名所作。善法思惟故名已辨。聞  
思慧成就故名所作。修慧成就故名已辨。種種三  
法亦如是。復次緩法頂法忍法世間第一法得故名  
所作。苦法忍等諸無漏善根得故名已辨。見諦道  
得故名所作。思惟道得故名已辨。成學道故名所  
作。無學道得故名已辨。心解脫得故名所作。慧  
解脫得故名已辨。漏盡故名所作。得共解脫故名  
已辨。一切結使除故名所作。得非時解脫故名已  
辨。

81c

論問うて云う。なにを「所作 (kṛtya)」か。なにを「口に辨  
す (kṛta)」と云うのか。答えて云ふ。信 (śraddhā)・戒 (śila)・精 (upe-  
kṣā)・定 (samādhi) など諸の善法を得て云うから所作とするのであ  
る。智慧 (prajñā)・精進 (viryā)・解脫 (vimokṣa) などの諸の善法を得  
て云うからそれを「口に辨す」のである。(八) 一一の(善)法を得て云うから  
を具足し満たしているから、「所作・口に辨す」のである。また次  
に、諸の煩惱に二種ある。一種は愛 (trṣṇā) と屬し、一種は見 (dr̥ṣṭi)  
に属している。愛に属して云う煩惱を断じて云うから所作とする、見に属  
して云う煩惱を断じて云うから口に辨す。また次に色法 (rūpidha-  
rma) を善く見るから所作とする、無色法 (arūpi-dh.) を善く見るから  
辨す。可見 (sanidarsana) と不可見 (anidarsana)、有対 (sapratigha)  
と無対 (apratigha) などの二法もまた同様である。また次に、不善 (法)  
(akuśala) と無記法 (avyākṛta) と漏盡 (cetanā) との慧を成

辨。自利益竟故名所作。利益他人故名已辨。如是等所作已辨義自在說

就して「<sup>42</sup>」から所作といふ、修 (bhāvanā) の慧を成就して「<sup>43</sup>」から所作といふ。辨や<sup>44</sup>から所作といふ。(心のせがの) 種々の「<sup>45</sup>」から所作といふが同様である。また次に、煥法 (usmagata-dharma)・頂法 (mūrdhan)・忍法 (kṣāntidh°)・世間第1法<sup>(38)</sup> (laukikāgra-dh°) を得て「<sup>46</sup>」から所作といふ、苦法忍<sup>(39)</sup> (duḥkha-dharmaksānti) 「<sup>47</sup>」の諸の無漏 (anāśrava) の善根を得て「<sup>48</sup>」から所作といふと辨すといふ。眞諦<sup>(40)</sup> (satyadarśana-mārga) を得て「<sup>49</sup>」から所作といふ、思惟道 (bhāvanā-m°) を得て「<sup>50</sup>」から所作といふと辨すといふ。學道 (saikṣa-m°) を成じて「<sup>51</sup>」から所作といふ、無學道 (aśaikṣa-m°) を得て「<sup>52</sup>」から所作といふ、慧解脱<sup>(24)</sup> (prajñā-v°) を得て「<sup>53</sup>」から所作といふと辨すといふ。漏 (āśrava) が除かれて「<sup>54</sup>」から所作といふ、共解脱<sup>(43)</sup> (ubhaya-v°) を得て「<sup>55</sup>」から所作といふと辨すといふ。一切の結使を除いて「<sup>56</sup>」から所作といふ、非時解脱 (asamaya-v°) を得て「<sup>57</sup>」から所作といふと辨すといふ。自からの利益 (svakārtha) を竟て「<sup>58</sup>」から所作といふ、他人の利益 (parārtha) を竟て「<sup>59</sup>」から所作といふと辨すといふ。このよつた「所作」と「<sup>60</sup>」から所作といふとの義を自在に説いたのである。

經棄擔能擔  
論五衆龜重常惱故名爲擔。如佛所

說。何謂擔。五衆是擔。諸阿羅漢諸擔已除。以是故言棄擔。能擔者。是佛法中二種功德擔應擔。一者自益利。二者他益利。一切諸漏盡。不

經担を棄<sup>61</sup> (apahṛtabhāra)、能く担<sup>62</sup> (bhārasaha)。

論五衆 (skandha) の龜重<sup>(45)</sup> (dusṭhūla) が常に惱をかく担<sup>(46)</sup> (bhara) といふのである。仏が説かれて「<sup>63</sup>」から所作といふである。何を担<sup>64</sup>といふのか。五衆が担なのである。諸の阿羅漢は「<sup>65</sup>」の担を除じて「<sup>66</sup>」。ハハ<sup>67</sup>わか

悔解脱等諸功德。是名自利益。信戒捨定慧等諸功德能與他人。是名利益他。是諸阿羅漢。自擔他擔能擔故名能擔。復次譬如大牛壯力能服重載。此諸阿羅漢亦如是。得無漏根力覺道能擔佛法大事擔。以是故諸阿羅漢名能擔

<sup>82 a</sup> 也「担を棄て (apahṛta-bhāra)」<sup>83</sup> のであら。「能く担う」<sup>84</sup> は、仏法の中にも一種がある。功德の担へ (他) 担へるの担とある。」<sup>85</sup> は自のを利益し、<sup>86</sup> 一は他を利益する。一切の諸の漏 (āśrava) が尽きて、不悔の解脱等の諸の功德 (guna) が具つてゐるのを自の利益かるところ。信 (śradha)・戒 (śīla)・慳 (upekṣā)・定 (samādhi)・慧 (prajñā) などの諸の功德を能く他人に与へるゝを他を利益かるところ。」<sup>87</sup> の諸の阿羅漢は自担と他担とを「能く担う (bhārasaha)」から能く担うといふのである。また、<sup>88</sup> 譬えば大牛の壯力〔強力〕が能く重載に服るようだこの阿羅漢も同様である。無漏 (anāśrava) の根 (indriya)・力 (bala)・覺道 (avabodha-mārga) を得て仏法の大事の担を担うのである。」<sup>89</sup> は、諸の阿羅漢を「能く担う」というのである。

經逮得己利 論云何名己利。云何非己利。行諸

善法是名己利。諸餘非法是名非己利。復次信戒捨定慧等諸功德。一切財寶勝故。今世後世常得樂故。能到甘露城故。以是三因緣故。名己利。如信品中偈說

經己利を逮得す。

論何を己利 (svakārtha) か。何を己利ではないところのか。諸の善法 (kuśaladharma) を行うのを己利といふ。諸の他の非法 (adharma) を己利ではなじまへ。まだいわば、信・戒・捨・定・慧などの諸の功德は一切の財宝に勝つてゐるかい、今世 (iha) へ後世 (paratra) へ世に樂 (sukha) を得ぬか、能く甘露の城 (amṛtanagara) へ福ぬか、(八) の) 三つの因縁 (nidāna) がひんむきを己利といふ。眞語子 (Sradhvāvara) の偈に説いてある。

若人得信慧 是寶最第一  
諸餘世財利 不及是法寶

復次若人今世得樂。後世得樂及涅槃常樂。是名

己利餘非己利。如偈說

世知種種無道法 與諸禽獸等無異

當求正智要道法 得脫老死入涅槃

復次八正道及沙門果。是名諸阿羅漢己利。是五千阿羅漢得道及果。一事俱得故名己利。以是故言逮得己利

若し人、信・慧を得ば、

この宝最も第一なり。

諸余の世の財利は、

この法寶に及ばず。

またつれに、若し人が今世に樂を得、後世に樂と、涅槃を得て、常に樂であることを己利といふ。そのほかは己利ではない。偈に説いてあるところである。

世の知れる種々無道の法は、

諸の禽獸と等しうして異なること無し。

當に正智、要道の法を求め、

老死を脱するを得て、涅槃に入るべし。

またつれに、八正道(*āryāṣṭāṅgikamārga*)<sup>(48)</sup>沙門<sup>(49)</sup>果(*śrāmanāṇyaphala*)とを阿羅漢の己利とする。この五千の阿羅漢は得道と果との一事を俱に得るのであるから己利といふ。以下いうわけで「己利を逮得す (anuprāpta-svakārtha)」 ふうのである。

經盡諸有結 論三種有。欲有色有無色有。云何

欲有。欲界繫業取因縁。後世能生亦是業報。是名欲有。色有無色有亦如是。是名爲有。結盡者

結有九結愛結恚結慢結癡結疑結見結取結慳結嫉

經諸の有と總いて (pariksīna-bhavasamyojana)。

論三種の有(bhava)<sup>(50)</sup>がある。欲有(kāma-bh°)と色有(rūpa-bh°)と無色有(arūpya-bh°)とである。欲界(kāmadhātu)に繫がれた業(karman)は因縁を取り、後世に能くおたる業の報(karmavipāka)を生ずる。

結。是結使盡及有。是有盡及結使。以是故名有結盡。問曰。諸阿羅漢結使應永盡。得一切煩惱離故。有不應盡。何以故。阿羅漢未滅度時。眼根等五衆十二入十八持。諸有成就故。答曰。無所妨。是果中說因。如佛語檀越施食時與五事。命色力樂瞞。食不能必與五事。有人大得飲食而死。有人得少許食而活。食爲五事因。是故佛言施食得五事。如偈說

斷食死無疑 食者死未定

以是故佛說 施食得五事

亦如人食百斤金不可食。金是食因故言食金。佛言女人爲戒垢。女人非戒垢。是戒垢因故。言女人爲戒垢。如人從高處墮未至地言此人死。雖未死知必死故。言此人死。如是諸阿羅漢結使已盡。知有必當盡故。言有結盡

82 b

これを欲有といふ。色有と無色有もまた同様である。これを有といふのである。<sup>(51)</sup> 結 (saṃyojana) が尽きてゐるは、結に九結がある。愛結 (anunaya)・恚結 (pratigha)・慢結 (māna)・癡結 (avidgā)・跋結 (vicikitsā)・見結 (dr̥ṣṭi)・取結 (parāmarśa)・輕結 (mātsarya)・嫉結 (īrṣyā) である。<sup>(52)</sup> の結使が尽きて有に及び、<sup>(53)</sup> の有が尽きて結使に及ぶ。<sup>(54)</sup> しかし、この結使が尽きて有に及び、<sup>(55)</sup> の有が尽きて結使に及ぶ。<sup>(56)</sup> しかしながら、<sup>(57)</sup> の有と結と尽くへ (parikṣṇabhasamyojana) 」というのである。問うていう。「諸の阿羅漢においては結使は永く尽きてくる。一切の煩惱を離れきつているのであるから。(しかし) 有は決して尽きていない。なぜかといえば、阿羅漢が未だ滅度していない時には、眼根 (cakṣur-indriya)などの五衆 (skandha)・十二入 (āyatana)・十八界 (dhātu) の諸の有は成就しているからである。」と。答えていう。「妨げるといひはなし。<sup>(58)</sup> 」これは果の中に因を説いていいるのである。仏の語と同じである。檀越 (dānapati) が食を施す時は五事を与えているのである。命 (āyus)・色 (vāraṇa)・力 (bala)・樂 (sukha)・瞞 (āhāra) である。食は必ずしも (常に) 五事を与えることはできない。人があつて、大いに飲食を得ながらも死に、少許の食を得て生きながらえることもある。(しかしながら) 食は五事の因となる。こういうわけで仏は食を施して五事を与えるといわれたのである。」と。偈に説いているとおりである。

食を断てば死する」と疑なし。  
食う者の死は未だ定まらず。

是を以ての故に仏は、  
食を施せば五事を与うと説きたまう。

また、人が百斤の金を食べるようなものである。金は食することはできないが、金は食の因であるから金を食べるというのである。仏がいわれた。「女人は（持）戒の垢れ（śilamāla）である」と。女人（そのもの）は持（戒）の垢れではないが、（持）戒の垢れの因であるから、女人は（持）戒の垢れであるといわれたのである。人が高い所から墜ちるようなものである。未だ地に到らないけれども、この人は死んだという。未だ死んではないけれども、必ず死ぬに違いないことを知っているから、この人は死んだという。このように、諸の阿羅漢は結使が已に尽きているから、有もまた必ず尽きるに違いないことを知っているから、「有・結尽く（parikṣin-abhavaśaṁyojana）」というのである。

經正智已得解脫 論如摩犍提梵志弟子舉其屍著

床上。輿行城市中多人處唱言。若有眼見摩犍提屍者。是人皆得清淨道。何況禮拜供養者。多有人信其言。諸比丘聞是語。白佛言。世尊。是事云何。佛說偈言

小人眼見求清淨 如是無智無實道  
諸結煩惱滿心中 云何眼見得淨道

經正智にして已に解脱を得（samyagājñāsuvimukta）。

論摩犍提梵志<sup>(53)</sup>（Mākandika）にいたつては、弟子がその屍（kunapa）を挙えで床の上に著いて、輿いで城市の中の多くの人がいる処に行って唱えていた。「若し眼で摩犍提の」を見るものがいたら、この人はみな清淨の道（viśuddhimārga）を得る。いわんや礼拝し供養するものはなおやらである」と。多くの人はこのことばを信じている。諸の比丘は、この語を聞いて仏にいたつた。「世尊よ。このことばはどういうことですか」と。

若有眼見得清淨 何用智慧功德寶  
智慧功德乃爲淨 眼見求淨無是事

以是故言正智得解脫。問曰。諸阿羅漢所作已辨。更不求進。何以故。常在佛邊。不餘處度處生答曰。一切十方衆生雖盡應供養佛。阿羅漢受恩重故。應倍供養。所以者何。是阿羅漢從佛得成受無量功德。知結使斷信心傳多。是故諸大德阿羅漢佛邊受功德樂味供養恭敬報佛恩故。在佛邊住。諸阿羅漢圍圍佛故。佛德益尊。如梵天人遶梵天王。如三十三天遶釋提桓因。如諸鬼神遶毘沙門王。如諸小王遶轉輪聖王。如病人病愈住大醫邊。如是諸阿羅漢住在佛邊。諸阿羅漢圍繞供養故。佛德益尊。

仏は偈を説いていられた。

小人、眼見もて清淨を求むるも、  
是の如き無智に実道なし。

諸結・煩惱心中に満つ、

云何が眼見ても清淨を得んや。

若し眼見ても清淨を得ることあらば、  
何ぞ智慧功德の宝を用いん。

智慧功德を乃ち淨と為す、

眼見もて淨を求むるも是の事なし。

こういうわけで、「正智にして解脱を得」というのである。

82c  
問うていう。「諸の阿羅漢は所作 (*kṛtakṛtya*) については已に弁えてい  
る。さらに（それ以上には）進むことを求めないものである。どうして常に  
仏の辺にばかりいて余所で衆生を度わないのか。」答えていう。「一切の  
十方の衆生も尽く仏を供食しなければならないのであるが、阿羅漢は恩を  
受けたことが重いのであるから、倍す供養しなければならないのである。  
そのわけは何であるか。この阿羅漢は仏に従つて無量の功德 (*apramāṇa-  
guna*) を成受けることができたからである。結使が断えて信心 (*śradh-  
acitta*) が転ず多くなっていることを知っている。だから諸の大徳の阿羅  
漢は仏の辺にいて功德の樂味 (*guṇasukharasa*) を受け、供養し恭敬して  
仏恩を報ずるから仏の辺に住しているのである。諸の阿羅漢が仏を囲繞す

るのであるから仏の徳はおもおも尊いのである。梵天の人 (brahma) (brahmākāyika-deva) が梵天王 (Brahmā) を遡るより、三十三天 (īrāyastrīnśādeva) が釈提桓因 (Śakradevendra) を遡るより、諸の鬼人 (Asura) <sup>(57)</sup> が毘舍門王 (Vaiśravāṇa) を遡るより、諸の小王が転輪聖王 (Cakravartin) を遡るより、病人が病いが愈えたのが大医 (mahāvaidya) の辺りに住むようなのである。」のようだ、諸の阿羅漢は仏の辺りにおいて住するのである。諸の阿羅漢が围绕し供養するから仏徳は必ず「尊い」のである。」<sup>58)</sup>

問曰。若諸阿羅漢。所作已辨逮得己利不須躊躇。何以故說般若波羅蜜時。共五千阿羅漢。答曰。諸阿羅漢雖所作已辨。佛欲以甚深智慧法試。如佛問舍利弗。如波羅延經阿耆陀難中偈說種種諸學人 及諸數法人

是人所行法 願爲如實說

是中云何學人。云何數法人。爾時舍利弗默然。如是三問三默。佛示義端告舍利弗。有生不。舍利弗答。世尊有生。有生者欲爲滅。有爲生法故名學人。以智慧得無生法故。名數法人。是經此中應廣說。復次若有漏若無漏諸禪定未得故欲

問うて、「諸の阿羅漢は所作を已に弁えて「己利を逮得して」とるのであれば、それに法を聽く必要はないはずである。どうして般若波羅蜜を説くとも五千の阿羅漢と俱にいるのか。」<sup>59)</sup> 答えて、「諸の阿羅漢は所作を已に弁えていても、仏は甚深 (gambhiraprajña) の智慧の法をもつて試みようとしたのである。仏が舍利弗に問われたようなものである。波羅延經 (Pārāyanā) の阿耆陀 (Ajitapañha) の問い合わせの中の偈に説いているとおりである。

種種諸の学人、及び諸の数法の人。

是の人の行ずる所の法を、願くは為に実の如く説かん。

得。已得欲令堅深。故諸阿羅漢佛邊聽法。復次現前樂故。如難陀迦經中說。以今世樂故聽法。復次諸阿羅漢在佛邊聽法心無厭足。如毘盧提迦經中說。舍利弗語毘盧提迦。我法中聽法無厭。復次如佛大師。自一心從弟子邊聽法。不應難言阿羅漢所作已辨何以聽法。譬如飽滿人得好食猶尚更食。云何飢渴人而言不應食。以是故。諸阿羅漢雖所作已辨。常在佛邊聽法。復次佛住解脫法中。諸阿羅漢亦住解脫法中。住法相應眷屬莊嚴。如栴檀譬喻經中言。有栴檀林伊蘭園之。有伊蘭林栴檀園之。有栴檀栴檀以爲叢林。有伊蘭伊蘭自相圍繞。佛諸阿羅漢亦復如是。佛住善法解脫中。諸阿羅漢亦住善法解脫中。住法相應弟屬莊嚴。佛以大衆圍繞。如須彌山王十寶山圍繞。如白香象王白香象圍繞如師子王師子衆眷繞。佛亦如是。佛爲世間無上福田。與諸子圍圍繞共住。

ハの中や、學人 (*śaikṣā*) とはどのようになんのか、數法 (*saṅkhyātadharma*) の人とはどのようなものか。そのとが、舍利弗は默然としていた。<sup>(61)</sup> 」のよう三たび問われたが三たびとも黙っていた。仏は義端を示して舍利弗に告げられた。「生 (*bhūta*) はあるのが、ないのか。」と。舍利弗は答えた。「世尊よ。生はあります。」と。生あるものは滅するにとになっている。有為 (*saṃskṛta*) にして生の法 (*bhūtadharma*) であるから学人といい、智慧をもつて無生の法 (*anutpādadharmā*) を得るのであるから数法の人というのである。」の経のハの阿耆陀難の中に広く説かれている。

またハ既に、あるハは有漏 (*sāsrava*) の、あるいは無漏 (*anāsvara*) の諸の禪定 (*samādhi*) を未だ得ていらないから得よろとし、(めだ) 己に得たのを堅く深くしようとするために諸の阿羅漢は仏の辺りにて法を聴くのである。またハ既に、現前の樂しみ (*abhimukhatāsukha*) のためにである。難陀迦經 (*Nandaka-sūtra*) <sup>(62)</sup> 中に詰へとおりである。今世の樂しみのために法を聴くのである。またハ既に、諸の阿羅漢は仏の辺りにて法を聴き、心に厭足りることがない。毘盧提迦經 (*Pilotika-sūtra*) 中に説くとおりである。舍利弗が毘盧提迦 (*Pilotika*) に詰へた。「われは法の中に法を聴いて厭わぬ」とがない。」ハ。またハ既に、仏大師 (*Mahāśāstra*) <sup>(63)</sup> みずから一心に弟子の辺りに従って法を聴くよくなものである。(それを非)難して、「阿羅漢は所作を己に弁じてゐる。むうして (やの上に)

法を聴くのが。」といつてはいけない。譬えば飽満した人では好食を得たないばかりに食べるようなものである。どうして飢渴した人に食べてはいけないと。いうのが。何ういうわけで、諸の阿羅漢は所作を弁じてゐるけれども、常に仏の辺りにあって法を聴くのである。またついでに、仏は解脱の法(vimuktidharma)の中に住しておらず、諸の阿羅漢もまた解脱の法の中を住してゐる。法に住していふのに相応した眷属(Parivāra)が莊嚴(alāñkṛta)している。これは梅檀譬喻經(Candanopama-sūtra)の中に説いていふとおりである。梅檀(candana)の林があつて伊蘭(Eranā)<sup>(63)</sup>がこれを囲み、伊蘭の林があつて梅檀がこれを囲む。梅檀があれば梅檀をもつて(梅檀の)叢林といい、伊蘭があれば伊蘭はおのずから(それを)囲繞するのである。仏も阿羅漢もまたこのようなものである。仏は善法の解脱の中に住して、阿羅漢もまた善法の解脱の中に住して、法に住してゐるものに相應した眷属が莊嚴してゐるのである。大衆(mahāsaṅgha)が仏を囲繞するのは、須弥山王(Sumerurāja) 八十種<sup>(64)</sup>(daśaratna-parvata)が囲繞するよりであり、山象(pāñdaragandhahastin)の山を山象の象が囲繞するようであるようだ、仏もまた同様である。仏は世間で無上の福田(punyakṣetra)であり、諸の弟子に囲繞されたとおもに住してゐるのである。

經唯除阿難在學地得須陀洹。論問曰。何以言唯除阿難。答曰。上所讚諸阿羅漢。阿難不在其數。何以故。以在學地未離欲故。問曰。大德阿難。第三師大衆法將。種涅槃種已無量劫。常近佛持法藏。大德利根何以至今未離欲作學人。答曰。大德阿難本願如是。我於多聞衆中最第一。亦以諸佛法阿羅漢所作已辨。不應作供給供養人。以其於佛法中能辨大事煩惱賊破。共佛在解脫床上坐故。復次長老阿難。種種諸經聽持誦利觀故。智慧多攝心少。二功德等者。可得漏盡道以是故。長老阿難是學人須陀洹。復次貪供給世給世尊故。是阿難爲佛作供給人。如是念。若我早取漏盡道。便遠道尊不得作供給人。以是故。阿難雖能得阿羅漢道自制不取。復次處時人未合故。何等處能集法。千阿羅漢未在耆闐崛山。是爲處。世尊過去時未到。長老婆耆子不在。以是故。長老阿難漏不盡。要在世尊過去。集法衆合婆耆子說法勸諫。三事合故得漏盡道。復次大德阿難。厭世法少不如餘人。是阿難世世王者種。端正無比福德無量。世尊近親常侍從佛。必有此

經唯、阿難の学地 (*śaikṣabhūmi*) に在りて、須陀洹 (*srotāpatti*) を得たるを除く。

論問うていう。「どうして阿難 (*Ānanda*) だけを除くところのか。」と。答えていう。「<sup>もと</sup>上に讀えたのは諸の阿羅漢 (*Arhat*) である。阿難はその數 (*の中*) には入らない。どうしてかと云ふと、学地 (*śaikṣabhūmi*) に在って未だ欲 (*rāga*) <sup>(76)</sup> を離れていないからである。」と。問へて云ふ。「大德阿難は第三の師 (*acārya*) <sup>(77)</sup> であり大衆の法將 (*dharma-pati*) <sup>(78)</sup> であつて、涅槃の種 (*nirvāṇabija*) を種えてがんすでに無量の劫を経てゐる。常に仏に近 (侍) して、法藏 (*dharma-piṭaka*) を持つて、大德であつて利根 (*tikṣṇendriya*) の人である。<sup>もと</sup>今に至るまでも、未だ欲を離れないで学人 (*のまな*) <sup>(79)</sup> であるのか。」と。答えていう。「大德阿難の本願 (*prāṇidhāna*) <sup>(80)</sup> のよくなものである。『われは多聞 (*bahuśruta*) であり、衆中において最も第一 (*agra*) <sup>(81)</sup> である。』と。また、諸仏の法によると、阿羅漢は所作をすでに弁えているものであるから、供給供養の人と作すべきではない。それを「阿羅漢」が仏法の中ににおいて能く大事「眼耳」を弁まえて、煩惱の賊を破つてゐるから、仏と共に、解脱の床の上「境地」に在つて(安)坐してゐるからである。また同時に、長老阿難は種々に諸經を聴いて、(受)持・(誦)誦し、利く観じてゐるが、智慧 (*prajñā*) <sup>(82)</sup> が多く摂心 (*cittasamgraha*) <sup>(83)</sup> が少ない。(智慧と摂心の) 一一の功德が等しく、の漏尽道 (*āśravakṣaya-mārga*) を得る事ができる。」

念。我佛近侍知法寶藏。漏盡道法我不畏失。以是事故不大畏失。

けで長老阿難はまかしく学人であつて須陀洹<sup>(73)</sup> (srota-āpatti) (の境位) である。またしきに、世尊に供給するふじとを貪ぼうとして、この阿難は仏のために供給の人となつてこのように念つた。『若し、我れが早く漏盡道を取つたならば、世尊から遠ざかり、供給の人（のまま）であることができない』と。しかし、うわけで、阿難は能く阿羅漢道を得る（これがやあね）と雖も、自制して取らなかつたのである。またしきに、處と時と人とが未だ合つていなかつたのである。どういう處で能く法を集めたらよいのだろうか。千の阿羅漢は未だ耆闘崛山 (Gr̥drakūṭa-parvata) にいない。これが処である。世尊の過去られるとは未だ到<sup>74</sup>いていない。長老婆耆 (Vṛiputra) はいない。こういうわけだから長老阿難は漏が尽きていない。要らず、世尊が過去られることがあつて、法を集めようとする衆が婆耆子に説法し、勸諫をせることになる。（その時）三事が合<sup>75</sup>するが（阿難が）漏盡道を得るのである。またしきに、大德阿難は世法<sup>(76)</sup> (lokadharma) を厭うことが少なくて余の人ようでない。この阿難は、世々にわたりて王者の種 (rājavarna) (族の出) であつて端正<sup>77</sup> (vanṇvat) は無比であり福德 (punya) が無量である。世尊の近親にあつて常に侍（者）として仏に従つて、必ずしのような念いをもつて違ひない。「我れは仏の近侍として法宝の藏を知つてゐる。漏盡道の法を我れは失う」とを畏れない」と。しかし、うわけで、大だ懲懃<sup>(78)</sup>でない。

問曰。大德阿難名。以何因縁。是先世因縁。是父母作字。是依因縁立名。答曰。是先世因縁亦父母作名亦依因縁立字。問曰。云何先世因縁。答曰。釋迦文佛先世作瓦師。名大光明。爾時有佛名釋迦文。弟子名舍利弗目乾連德過。佛與弟子俱到瓦師舍一宿。爾時瓦師。布施草坐燈明石蜜三事。供養佛及比丘僧。便發願言。我於當來老病死惱五惡之世作佛。如今佛名釋迦文。我佛弟子名亦如今佛弟子名。以佛願故得字阿難。復次阿難世世立願。我在釋迦文佛弟子多聞衆中。願最第一字阿難。復次阿難世世忍辱除瞋。以是因緣故。生便端正。父母以其端正見者皆歡喜故字阿難<sub>阿難者秦言歡喜</sub>是爲先世因縁字

問うていう。「大德阿難という名はどのような因縁から（付けられた）のか。これは先世（purāna）の因縁によるのか。これは父母が字を作ったからなのか。それともいれば（別の）因縁に依つて字を立てたのか」と。答えていう。「先世の因縁と、また父母が名を作ったのと、また（別の）因縁に依つて字を立てたのとである。

問うていう。「先世の因縁とを何をいうのか」と。答えていう。「釈迦文仏（Śākyamuni）は先世においても瓦師（kumbhakāra）と作つて大光明（Prabhāsa）<sub>アーラーナ</sub>と名つた。その時に仏がいて釈迦文と名し、弟子を舍利弗、目犍連、阿難と名つた。仏は弟子と俱に瓦師の舎に到つて一宿やれた。その時、瓦師は草坐（trṣṇāsana）・光明（dipa）・石蜜漿（madhumaireya）<sub>マドハムエーヤ</sub>の事を布施して、仏（Buddha）と比丘僧（bhikṣusamāṅga）を供養した。そこで願（prañidhi）を発して、『われはやがて来る老（jarā）・病（vyādhī）・死（maranā）の悩みと五惡の世にあって仏を作り、今の仏と同じよのに釈迦文と名づけ、我が弟子の名字もまた今の仮の弟子のようにしよう』と。仏の願いによつて阿難と字づけられた」とをえたのである。またついで、阿難は世々に（わたりて）願を立てて、「我れは釈迦文仏の弟子で多聞（bahusruti）の衆の中に入つて、願わくは最も第一（agra）であつて阿難と字づけられたい」と。またついで、阿難は、世々に（わたりて）忍辱（ksanti）によりて瞋（dvesa）を除いた。この因縁のために生まれてながらにして端正（sundara）である。

(阿難の)父母は、その端正よしやうなびで、見るものが皆歎喜するかい、阿難と字づけたのである。【阿難とは秦で】これを先世の因縁による字としら。

云何父母作字。昔有日種王。名師子頬。其王有四子。第一名淨飯。二名白飯。三名斛飯。四名甘露飯。一女名甘露味。淨飯王有二子佛難陀。白飯王有二子跋提提沙。斛飯王有一子提婆達多阿難。甘露飯王有一子摩訶男阿泥盧豆。甘露味女有一子名施婆羅。是中悉達陀菩薩。漸漸長大棄轉輪聖王位。夜半出家。至漚樓闍羅國中尼連禪海邊。六年苦行。是時淨飯王愛念子故。常遣使問訊欲知消息。我子得道不。若病若死。使來白王。菩薩唯有皮骨筋相連持耳。命甚微弱。若今日若明日不復久也。王聞其言甚大愁念。沒憂惱河。我子既不作轉輪王。又不得作作佛。一何衰苦無所得面死。如是憂惱荒迷憤塞。是時菩薩棄苦行處。食百味乳糜身體充滿。於尼連禪水中洗浴已。至菩提樹下坐金剛座。而自誓言要不破此結加跋坐成一切智。不得一切智終不起也。是時魔王將十八億衆到菩薩所。敢與菩薩決其得失。

83c どうして父母が字を作ったのか。昔、日種 (Sūryavānśa) 王がいた。師子頬<sup>(80)</sup> (Sīnhahānu) とこう。その王に四子があった。その第一を淨飯<sup>(81)</sup> (Śuddhodana) とこう、二を白飯 (Śuklodana) とこう、三を斛飯 (Droṇodana) とこう、四を甘露飯 (Amṛtodana) とこうした。一女があった。甘露味 (Amṛtarasa) とこうした。淨飯王に二子があった。仏と難陀 (Nānda) と하였다。白飯王に二子があった。跋提 (Bhadrika) と提沙 (Tiṣya) と하였다。斛飯王に二子があった。提婆達多 (Devadatta) と阿難 (Ānanda) と하였다。甘露飯王に二子があった。摩訶男 (Mahānāman) と阿泥盧豆 (Aniruddha) と하였다。甘露味の女<sup>(82)</sup> に一子があつた。施婆羅<sup>(83)</sup> (Dānapāla) とこうした。その中で、悉達多 (Siddhārtha) 菩薩は漸々に長大して、轉輪聖王 (Cakravartin) の位を棄てて夜中に出家して、漚樓闍羅國<sup>(83)</sup> (Uruvilvā) の中の中連禪河 (Nairājanā) の辺りに往って六年の (あこだ) 苦行 (duṣkaracaryā) した。その時、淨飯王は子を愛念しんだので常に使いを遣つて問訊ねて消息を知らうとした。「我が子は道を得たのか。もしくは病んでいるか。もしくは死んだのか」と。使者は来て王にいった。「菩薩はただ波と骨と筋だけが有つて連なつているだけである。命は甚だ微弱である。あるいは今日か、あるいは明日

菩薩智慧力故大破魔軍。魔不如而退自念。菩薩巨勝當惱其父。至淨飯王所詭言。汝子今日後夜已了。王聞此語驚怖墮床。如熱沙中魚。王時悲哭而說偈言

阿夷陀虛言 瑞應亦無驗  
得利之吉名 一切無所獲

是時菩提樹神所歡喜。持守曼陀羅華。至淨飯王所說偈言

汝子已得道 魔衆已破散  
光明如日出 普照十方土

王言。前有天來言。汝子已了。汝今來言壞魔得道。二語相違誰可信者。樹神又言。實不妄語。前來天者詭言已了。是魔懷嫉故來相惱。今日諸天龍神華香供養空中懸繪。汝子身出光遍照天地。王聞其言於一切苦惱心得解脫。王言我子雖捨轉輪王。今得法轉輪王定得大利無所失也。王心大歡喜。是時斛飯王家使來白淨飯王言。貴弟生男。王心歡喜言。今日大吉是歡喜日。語來使言。是兒當字爲阿難。是爲父母作字

か、もう久しいことではありますん」と。王はこの言を聞いて甚だ大いに愁念して憂惱の海に没んだ。「我が子は、すでに輕輪王を作らず、また仏に作ることもできないで、一にどうして袁苦て得るところもなく死のうとするのか」と。このように憂惱・荒迷・憤塞んだ。この時に、菩薩は苦行の処を棄て、百味の乳糜<sup>(84)</sup>〔乳粥〕を食べて身体は充満れた。尼連禪河<sup>(85)</sup> (Nairājanā) の水中において洗浴し已つて菩提樹 (Pippala) の下に至き、金剛座<sup>(85)</sup> (vajrasana) に坐つて自から誓つていわれた。「要らざこの結跏趺坐を破らないで一切智を成(就)しよう。一切智を得ながらならば終に起つまい」と。この時、魔王 (Māra) は十八億の衆を将つたながら誓つた。魔王は十八億の衆を將した。菩薩は智慧力 (prajñābala) によつて大いに魔軍を破つた。魔は如ばずして退き自から念つた。「菩薩には勝ち<sup>(86)</sup>」と。きつとその父を悩ましてやろう」と。淨飯王の所に至つて詭つていつた。「汝の子は今日の後夜に已に死んで了つた」と。王はこの語を聞いて驚ろき怖れて床から墮ちた。あたかも熱い沙の中の魚のようであった。王はその時哭いて偈に説いていった。

阿夷陀<sup>(86)</sup> (Ajita) は虚言せり、瑞應も亦た驗なし。

利を得るの吉名も一切獲る所無し。

「」の時、菩提樹神<sup>(87)</sup> (bodhiurksadēvatā) は大いに歎喜して天（界）の  
曼陀羅 (Māndāra) の華を持って淨飯王の所に至って偈を説いていた。

汝の子、<sup>ル</sup>道を得、

魔衆、已に破散す。

光明は日の出するが如く、

普く十方土を照せり。

王はいった。「前に天が来ていつた。『汝の子は已に死んだ』と。汝は今  
来て、『魔を破つて道を得た』という。二つの語<sup>(88)</sup>は相違している。誰が信  
じることができようか」と。樹神はまたいった。「實に妄語 (mṛṣāvāda)  
ではない。前に来た天は詭<sup>(89)</sup>つて已に（死んで）了つたといったのである。  
これは魔が嫉み (irṣyā) を懷いたから、来て相い恼ましたのである。今  
日、諸天・龍神は華と香を以つて供養し、空中に絵を懸けて、汝の子は身  
から光明を出して遍ねく天地を照らしたのである」と。王は「」の言を聞い  
て、一切の苦惱から心に解脱を得た。王はいった。「我が子は転輪聖王  
(Cakravartin) を捨てたといえども、今法転輪 (dharmačakrapravart-  
aka) の王となることを得た。定<sup>(90)</sup>と大利を得て失なうものはない」と。  
王の心は大いに歎喜した。この時、斛飯王の家から使いが来て、淨飯王に  
いった。「貴弟は男を生んだ」と。王は心に歎喜していった。「今日は大  
吉である。これは歎喜の日である」と。来使に語りかけた。「」の子はき  
つと字づけて阿難としよう」と。このために、父母は（阿難という）字を

作ったのである。

云何依因縁立名。阿難端正清淨如好明鏡。老少好醜容貌顏狀。皆於身中現。其身明淨。女人見之欲心即動。是故佛聽阿難著覆肩衣。是阿難能令他人見者心眼歡喜故名阿難。於是造論者讚言

面如淨滿月

眼若青蓮華

佛法大海水

流入阿難心

能令人心眼

見者大歡喜

諸來求見佛

通現不失宜

如是阿難雖能得阿羅漢道。以供給供養佛故自不盡漏。以此大功德故。雖非無學在無學數中雖。未離欲在離欲數中。以是故共數五千中。以實未是阿羅漢故。言唯除阿難

どうして因縁に依つて名を立てるといふのか。阿難の端正にして清淨であることは好い明鏡 (*ādarśa*) のようである。老少・好醜・容貌・顔状はみな身中より現われるが、その身は清淨である。女人がこれを見ると欲心 (*kāmacitta*) が即に動く。そのために、仏は阿難が肩衣 (*ārīsavastra*) を著覆うことを聽したやうたのである。この阿難は能く他人の見る者の心 (*citta*) と眼 (*cakṣus*) を歡喜させるから、阿難「歡喜」と名づけたのである。そこで論を造ったものは次のように讚えていた。

面・淨らなる満月の如、

眼、青き蓮華 (*utpalā*) の若し。

仏法の大海水、

阿難の心に流入し、

能く人の心眼もて、

見る者をして大いに歡喜せしむ。

諸の來りて仏を見る求むれば、

通現せしめて宣しきを失わず。

」のように、阿難は能く阿羅漢道を得てゐるけれども、仏に供給するため、自から漏を（断じ）尽さないのである。この大功德のゆえに無学ではないといえども、無学の数の中にはいるのである。未だ欲を離れていないと

いえども、欲を離れたもの (*vita-rāga*) の数の中には在るのである。こういうわけで數の五千人の中にいるのである。實（際）には未だ阿羅漢ではないから、「唯、阿難を除く」というのである。

【注】

(1) 九十六種(外道) 仏教を内道というのに対して仏教以外を  
教えを外称して外道となす。外道の分類は原始仏教以来種々  
伝えられている。六師外道(沙門果經)・外道四見・外道小  
乗四宗論・六苦行外道(涅槃經)・六十二見(梵網經)・九十  
五(六)種外道などがある。六師外道に各十五人の弟子を加  
えて九十六種外道と称する。

(2) 清淨活命 清い生活の意と推察されるが用例に乏しい。『俱  
舍論』に見えるも不淨の生活の意味で用いられる。『阿毘達  
磨俱舍論』卷十五には、「恒有害心名不律儀者。由彼一類住  
不律儀。或有不律儀名不律儀者。言屠羊者。謂為活命要期尽  
壽恒欲害羊」(T二十九・七八c)

(3) 食法有四種 四口食のことと、諸比丘の遠離すべき四種の  
食、すなわち生活法のことである。四邪命食・四不淨食とも  
いう。出家者たるものは、四邪命によつて食を求めることがな  
く、ただ乞食により清淨に自活すべきことをいい、これを正  
命食なりという。『摩訶止觀輔行伝弘決』卷第四之一(T四六  
・二五七c)などにも引用している。食の考察は原始仏教以  
来詳しく行われている。出世間(九食)、五食世間(四食)・  
四邪命食等がある。ここに見える四食は邪命食として挙げた  
ものである。

(4) 須陀洹道 四向四果の最初の預流(srota-āpanna) 果のこと

である。預流果は初果ともいわれ、見道において三界の見惑を  
断じ尽くし、正に無漏の聖道の流れに入りおわった位である。

〔5〕

胡漢羌虜 「胡漢」は中國、「羌虜」はチベットのこと。

〔6〕

我某甲比丘尽形寿持戒 『十誦律』卷第二十一(1111・一四  
八b、一五六a-b)などに、これと同様の言い方がなされ  
ている。

〔7〕

有羞僧・無羞僧・啞羊僧・実僧 『十誦律』卷第三十・瞻波  
法には、「有五種僧。一者無慚愧僧。二者啞羊僧。三者別衆  
僧。四者清淨僧。五者真實僧。無慚愧僧者。破戒諸比丘。是  
名無慚愧僧。啞羊僧者。若比丘凡夫鈍根無智慧。如諸羈羊  
聚。在一處無所知。是諸比丘不知布薩。不知不薩羯磨。不知  
戒說。不知法會。是名啞羊僧。別衆僧者。若諸比丘一界。內  
外外別作諸羯磨。清淨僧者。凡夫持戒人及凡夫勝者。是名清  
淨僧。真實僧者。學無學人。是名真實僧。是中前三種僧。能  
作非法羯磨。後二種不能作非法羯磨」(T二十三・二二a)  
と述べ、僧に無慚愧僧・啞羊僧・別衆僧・清淨僧・真實僧の  
五種を挙げている。『大智度論』の有羞僧が清淨僧に、無羞  
僧が無慚愧僧に、啞羊僧が啞羊僧に、実僧が真實僧に充當す  
る。『十誦律』の別衆僧を除いて四種僧を説くのは、『大乘大  
集地藏十輪經』卷第五有依行品(T一三・七四九c-七五一  
a)、『大方広十輪經』卷第五(T一三・七〇三a-c)、『法  
苑珠林』卷第十九違損部(T五三・四一七b)などである。

その他、『大乘理趣六婆羅蜜多經』卷第一（T八・八六九a-b）には、第一義僧・聖僧・福田僧の三種を説き、『雜阿毘曇心論』卷第十（T二八・九五三a）には、第一義僧・等僧の二種を説き、『大乘義章』卷第十（四四・六五五c六五七a）には、仮名僧・真実僧の二種、仮名僧・清淨僧・真実僧の三種、破戒雜僧・愚癡僧・清淨僧の三種などを説いている。

(8) 「百一羯磨」とは、具足戒を受ける場合や、僧殘罪のような重い罪を懺悔する場合に用いられる百一種の作法をいう。

『十誦律』卷第二十一—三十四（T一一一・一四八a—二五一a）、および『大沙門百一羯磨法』（T一一三・四八九a—四九五c）に詳しい。「説戒」とは、戒を説示することで、布蓬のことをいう。比丘が十五日ごとに、一か所に集合して戒律の条文を読み、戒を犯さなかつたかどうかを反省して懺悔する儀式をいう。『十誦律』卷第一（T一一一・四b）、卷第二十二（T二二三・一五八一—六五a）、『五分戒本』（T二二・一九八a）などに説かれる。「受歲」とは、比丘が夏安居を終えて一法臍増すことである。また安居の後の自恣をいう。

『受受歲經』（T一・五七一b）に詳しい。

(9) 受歲 比丘が夏安居を終えて法臍を一つ加えること。

(10) (11) 声聞の僧と菩薩の僧について、『大智度論』卷第三十四には、「諸仏多以声聞為僧無別菩薩僧。如弥勒菩薩文殊師利菩薩等。以釈迦文仏無別菩薩僧故。入声聞僧中次第坐。有仏

大智度論和訳（11）（中祖・諫訪・大野・吉田）

為一乘說法純以菩薩為僧。有仏聲聞菩薩雜以為僧」（T一二五・三一一c）と説かれて いる。また、『大乘本生心地觀經』卷第二には、「世出世間有三種僧。一菩薩僧。二聲聞僧。三凡夫僧。文殊師利及彌勒等是菩薩僧。如舍利弗目犍連等是聲聞僧。若有成就別解脫戒真善凡夫。乃至具足一切正見。能廣為他演說開示衆聖道法利樂衆生。名凡夫僧。雖未能得無漏戒定及慧解脫。而供養者獲無量福。如是三種名真福田僧」（T三・二九九—三〇〇a）と説く。

(12) 阿羅 宮内庁本は「阿梨」に作る。skt. ari (敵) の音写。

(13) 漢 skt. han (破す) の音写。

(14) 阿 skt. a (否定語) の音写。

(15) 羅漢 skt. ruh (生ずる、起る、生長する) の音写。

(16) 「心解脱」とは、心が煩惱の束縛から離れること。『雜阿含經』卷第十五（T二・一〇六b）・卷第三十五（T二・二五五b）、『維摩經』（T一四・五五三c）、『集異門論』卷第三（T一六・三七五c）、『俱舍論』卷第二十五（T二九・二三三c—二三四a）などに説かれる。「慧解脱」とは、智慧によつて、煩惱障だけを完全に解脱すること。『雜阿含經』卷第十五（T二・一〇六b）・卷第三十五（T一・一五五b）・卷第三十八（T一・二七六a）、『俱舍論』卷第二十五（T二九・二三三c—二三四a）などに説かれている。

(17) 見諦道と思惟道 「見諦道」は見道ともいい、四諦を觀察す

大智度論和訳 (11) (中祖・諷訪・大野・吉田)

る段階で、見所断の煩惱を断する過程をいう。小乗では預流向、大乗では初地をいう。「思惟道」とは、修道のことで、見道を修したのや、それに修習して修惑(思惑)を断するいふこと。すなわち、現象的な事物に執われて迷う心を断するいふである。『俱舍論』卷第十六一十八(T一九・一六六a・二七四a・二七九c・二八〇a・二八四a)、『俱舍論』卷第二十二一十五(T一九・一一三c・一一一a・一一八b・二九a・一三一一c)などに説かれる。

(18) 「須跋陀」とは、skt. subhadra の音訳で、須跋陀羅・須拔陀・蘇跋陀羅などと訳す。仏の最後の教誡を受けて得道した弟子の名である。「須跋陀梵志經」以下の文は、『長阿含經』卷第四の「遊行經第一」(T一・一四四b—一四五b)とほぼ同文である。

(19) 阿那跋達多池 skt. Anavadatta や、阿耨達・阿那達・阿那婆答多などと音写す。無熱惱・無熱・小与と訳す。池の名である。閻浮洲四大河の発源池である。詳しく述べは、『大毘婆沙論』卷第五(T大正藏一七・一一〇c—一一四a)、『俱舍論』卷第十一(T一九・五八a)、『俱舍論』卷第八(T一九・一一五a—一〇)などに述べられてる。

(20) 須弥山 skt. Sumeru の音写で、妙光・妙高・好光・安明と訳す。一世界の中央に高くそびえる巨大な山。詳しく述べは、『長阿含經』卷第十八・閻浮提洲品(T一・一一四b—一一

九b) に説かれてる。

(21) 閻浮提 skt. Jambu-dvipa, Jambū-dvipa やある。須弥山の南方にある大陸で、四大洲の一つである。閻浮提は南洲に当り、インドなどの十六の大國・五百の中国・十万の小国があるといい、仏が現われるのはこの洲だけとする。もとは印度の地を示していつたが、後に現実の人間世界をいうようになつた。詳しく述べは、『長阿含經』卷第十八・閻浮提洲品(T一・一一四b—一九b)、『維摩經』(T四一・五四六b)などに説かれてる。

(22) 六師(外道) 仏陀とほぼ同時代に中印度で勢力をもつていた六人の自由思想家の総称である。六師とは、(1)Pūrāṇakāssapa は無道徳論者、(2)Makkhali Gosāla は宿命論的自然論者、(3)Sañjaya-Velatthiputta は懷疑論者、(4)Ajitakesakambala は唯物論・快樂論者、(5)Pakudha-Kacchā-yana は無因論的感覺論者、(6)Niganṭha Nātaputta はジャイナ教の開祖をさす。『陀羅尼集經』卷第一(T一八・七八五)、『長阿含經』卷第十七「沙門果經第八」(T一・一〇七a—一〇九c)、『中阿含經』卷第五十七「箭矢經」(T一・七八一b—七八三b)などに詳説されてる。前註(1) 参照。

(23) (24) 小薬師・大薬師・薬師とは人々の病をいやし、苦惱を救う人をいう。

(25) 染愛 情欲が対象に染まつて、愛着するいふ。また欲望の意

にも用いられる。

(26)

愛見 二種の煩惱のことで、「愛」とは、個々の事物に把わ  
れて、それに執着し、さとりに至ることを妨げる情意的な煩  
惱をいう。「見」とは、誤った理論に把われて、間違った見  
解をもち、さとりに至ることを妨げる理知的な煩惱をいう。

(27)

不退法 不退転法ともいい、阿羅漢が四善根の忍位に至れ  
ば、再び惡道の世界に墮ちることがないという。この法に七  
種ありという。『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷第三十五(T  
二四・三八二c)に説詳する。

(28)

無生智 未来において苦果を生ずることがないと自覺する  
智。また、四諦の理を体得しあわったところに生ずる智慧を  
いう。十智の一つである。『異部宗輪論』(T四九・一五c)、  
『集異門論』卷第三(T二六・三七六a)、『大品般若經』卷

第五広乗品(T八・二五四c)などに説かれている。

(29) 退法の阿羅漢 二十七賢・六阿羅漢の一つである。いつたん  
阿羅漢果を得ても、惡縁にあって、修惑などをおこし、須陀  
洹果まで退堕することがある素質・能力の劣つた阿羅漢のこ  
とである。『俱舍論』卷第十五(T二九・一一六一a)・卷第二  
十(T二九・一〇七b)に説かれる。

(30)

時解脱 時愛心解脱の略である。不時解脱の対になる語。六  
種阿羅漢のうちの前五種をいう。すなわち退法・思法・護法  
・安住法・堪達法の阿羅漢をいう。得たさとりを常に愛護し

大智度論和訳(1) (中祖・諷訪・大野・吉田)

(31)

劬提迦 殺帝利種にして末羅(malla)族の出身である。友  
四人とともに迦毗羅城において仏陀に会い出家す。六度悟り  
六度退転して、七度目に悟った時、退転を恐れて自殺したと  
いう。(T一・二八六b)

(32)

善調象 「大寶積經、卷五十八」時王舍城有菩薩長者之子。  
名摧過處。於里巷中遙觀世尊相好奇特端嚴澄眸諸根湛寂觀  
者無厭。住奢摩多最上調伏。防護諸根如善調象。正念不亂如  
淨淵池。(T一・三三七c)

(33)

煩惱有二種 ▼註II-(9) 参照▼

(34)

色法、無色法 色法とは形あるもの・空間を専有するもの  
「質礙」の意と、変化するもの、壊れるもの「變壞」の意を  
もつもので一切の物質的存在を包含する。有部教学における  
五位の一つである。『俱舍論』卷七(T二九・一二六b以下)

(35) 可見・不可見、有対、無対 色法の分類で、可見有対色とい  
うのは、眼で見ることができ極微よりなる障害のあるもの、  
色法十一(五根・五境・法處所攝色)中の色境を指す。不可  
見無対色とは眼根でとらえることができず、極微よりなら  
ず、また他の根によつてもとらえられない対象をいう。『俱舍

大智度論和訳(二) (中祖・諫訪・大野・吉田)

論』卷一 (T二九・二c以下) に詳述。

(36) 無記法 善と惡のいずれにもかかわらないものをいう。これに有覆と無覆の二種あり、前者は異熟果を引くことはないが聖道を覆いさまたげて染汚性とされる。後者は淨無記ともい

い、聖道を覆うことなく染汚性を離れているといふ。『俱舍論』卷十三 (T二九・七〇c以下) 等に詳しい。

(37) 聞思修慧 教えを聞いて得る智慧と思惟によって得る智慧と実践によつて得る智慧の三慧をいう。実践によつて得る智慧の三慧をいう。〔阿毘達磨俱舍釈論、卷十六〕依聖言量所生決定智名聞慧。依聖教簡択道理所生決定智名思慧。依三摩提所生智名修慧。此三慧皆約因得名。因聞生名聞慧。思修慧安爾。(T二九・二六九a)

(38) 煙法 四善根位の初位。有部の教学で、四諦の理を初めて現観する見道の前段階が四善根位といわれる。煙位は暖かみが火の前ぶれであるように、煩惱を焼き亡ぼす見道の無漏慧の火に近づき、前兆として有漏の善根を生ずる位である。

頂法は四善根の第二位。つぎの忍位に進んで退墮することのない見道に至るが、もしくは退いて煙位において悪趣に堕するかの中間の位。動搖があり不安定な動善根の最上位であり、仮りに退いても善根を断つことはない位。

忍法は四諦の境地を了知する不動の善根位であつて悪趣に墮ちることはない位。

(39) 苦法忍 苦法智忍ともいう。欲界の苦諦を觀じて正しくその見惑を断する無間道の智をいう。見道八智、十六心の一。『俱舍論』第二十三 (T二二・一二一b以下) に詳説される。

(40) 見諦道 声聞預流果以上の境位。無漏聖道をはじめて見つけて聖者の位に入った階位であつて、見道十六心中の前十五心の階位。『俱舍論』第二十三 (T二二・一二二b以下) に詳説される。

(41) 思惟道 対境を思惟し分別すること。

(42) 心解脱・慧解脱 心解脱とは心が貪愛の煩惱を離れて自在を得ていることをいう。慧解脱は智慧による解脱のことで、二十七賢聖、九無字の一つであつて、無漏の智慧をもつて見・思二惑を断じて煩惱を離れてはいるが、未だ解脱の障害は残していく禪定において自在を得ていない阿羅漢の境地といふ。『阿毘達磨俱舍釈論』卷十九 (T二九・二八五a以下)

(43) 共解脱 釈論第三(卷二)注(30)

(44) 非時解脱 〔阿毘達磨俱舍釈論、卷十八〕若阿羅漢人由鈍根故。現前修三摩提觀時得成。說此為依時解脱。翻此為非時解脱。(T二九・二八一c)

(45) 魁重 心身が粗く重くて煩惱に縛られていること。「阿毘達磨法雲足論、第九」云可魁重。謂身重性。心重性。自無堪任性。心無堪任性。身剛強性。心剛強性。身不調柔性。心不調柔性。(T一六・四九七b)

(46) 担 「阿毘達磨俱舍釈論、第十六」飢渴寒熱疲憊。愛欲所生苦。是故愚人於苦對治起樂想。非於樂於苦差別亦爾。一切凡夫於中起樂想。譬如擔重易肩。是故由此道理。定知無樂。

(47) 根・力・覚道 釈論第二・注(1)

(48) 信品 不詳

(49) 沙門果 釈論第二・注(2)

(50) 有(bhava) 基本的には有情としての生存・存在のこと。それに三有(欲・有・無有愛)・七有・二十五有などの分類がある。なお、『智度論、十二』では相待有・仮名有・法有の三有を説いている(T一九・一四七c)。

(51) 結 釈論第四・注(4)

(52) 檀越 教団や僧に施物を供する信者。教団の護持者。中国・日本では檀那と混同して用いられている。

(53) 摩犍提梵志 釈論第二・注(12)

(54) 梵天・梵天王 梵天はバラモン教において宇宙原理である梵(brahman)の神格化されたものである。仏教に取りいれられて、初禪天に位置づけられて守護神として定着した。梵天王は梵界天部の梵衆天・梵輔天・大梵天の総称として用いら

れ、またその中の大梵天を指す」ともある。

(55) 三十三天 切利天とも称す。六欲天の一で、須弥山の頂上にある天部の総称。帝釈天を頭として四方の八天と合せて三十三天となる。元来、ヴェーダ神話に由来する神格で、仏教では俱舍論などで体系化されて仏教の守護神の地位を獲得した。

(56) 釈提桓因 釈論第五・注(27)

(57) 昆沙門天 多聞天・施財天とも称す。もとはヒンドゥ教の叙事詩マハーバーラタに登場する北方守護の神格で、財富の神でもあった。仏教では須弥山第四層に位する四天王の一として夜叉、羅刹を率いて北方を守護し法を広く聞くとされるところから多聞天と称する。わが国では七福神の一つにも組み入れられている。

(58) 転輪聖王 国土の統治者の呼称。インドの伝承では、世界を統治する帝王の理想像として、天より授かれた輪を四方に転じて征服することからこの称がある。仏教では仏陀の尊称として法を轉ずる法の王として經典類に説かれている。なお、釈論第二・注(3) 参照。

(59) 義端 端とは正しいこと、かたよらないとの義で、義端とは正しい道理のこと。

(60) 阿耆陀難 阿逸多所問として『雜阿含經、卷十四』に見える。本名を阿耆陀・阿逸多といい、婆羅門師、波婆羅(Bāvāri)

大智度論和訳（二）（中祖・諏訪・大野・吉田）

の上足であった。師の命により、同学十五人と仏陀を王舍城迦蘭陀竹園に訪ね、問法の後弟子となる。

若得諸法數　若復種々学　具威儀及行　為我分別說（T二  
・九五b）

なお、この偈に相当するものは『經集』（第一〇三八偈）にもある。

（61）  
學人・數法人　「雜阿含經、卷十四」舍利弗。何等為學。何等法數。時尊者舍利弗默然不答。仏言。真實舍利弗。舍利弗白仏言。真實世尊。世尊。比丘真實者。厭離欲滅盡向食集生。彼比丘。以食故生厭離欲滅向彼食滅。是真實滅覺知已。彼比丘厭離欲滅盡向。是名字人。復次真實舍利弗。舍利弗白仏言。真實世尊。世尊。若比丘真實者。厭離欲滅盡。不起諸漏。心善解脫。彼從食集生。若真實即是滅盡覺知此已。比丘於滅生厭離欲滅盡。不起諸漏。心善解脫。是數法。（T二・九五b）

（62）  
難陀迦　毗舍離の刹帝利の出身である。特に比丘尼教導に長じていたことで知られる。比丘尼教誠第一の称がある。『雜阿含第一十』（T二・七三c以下）等にてている。

（63）  
毘盧提迦　毘盧異学とも訳されている。婆羅門種の出身で、仏を訪ねて問法の後、帰路生聞梵志に会い、象跡の喻えで仏を讃嘆して梵志の帰仏の因を作った。『中阿含・梵志品象跡喻經』第五（T一・六五六a以下）にでている。

梅檀・伊蘭釈論第三・注（8）

（64）  
梅檀・伊蘭釈論第三・注（8）

（65）  
十宝山　須弥山とそれを畳む九山をいう。雪山・香山・鞞陀梨山・神仙・由乾陀山・馬耳山・尼代陀羅山・研迦羅山・計度末底山・須弥盧山の十山のこと。

（66）  
學地　有學の境位のこと。すでに四諦の理を自覚しているが、未だ煩惱を断じていないから、戒定慧の三學の學習をする位である。この箇所の阿難の學地にあることの記述は五分律にみえる。「弥沙塞部和醯五分律、卷三十」阿難常侍世尊叡多聞具持法藏。今應聽在集比丘數。迦葉言。阿難具持法藏。今應聽在集比丘數。迦葉言。阿難猶在學地。或隨愛恚癡畏不應容之。時に阿難在毘舍離恒為四衆昼夜說法。衆人來往殆若仏在。有跋耆比於彼閣上坐禪。以此鬧亂不得遊諸解脱三昧。作是念。阿難今於學地應有所作為不所作。而常在憤鬧多有所說。既入定觀見應有所作。復作是念。我今當為說厭離法使其因悟。便往阿難所為說偈言。靜處坐樹下。心趣於泥洹汝禪莫放逸。多說何所為。（T二二一・一九〇c）

（67）  
第三師　第二師を舍利弗とする記述は五分律にみえるが、第十三師を阿難とする記述は未詳。「弥沙塞部和醯五分律、第十七」時王舍城長居士沙門婆羅門咸共議言。沙門釈子舍利弗為第二師。期與尼犍第一師七日論議。（T二二一・一一四b）

（68）  
法將　仏法の大將の意で、高徳の弟子に対するのは大將の兵士に対するのと同じである。但、阿難を法將とする出典は未

詳。専ら舍利弗法將を伝えている。〔弥勒下生成仏經〕大智

舍利弗能隨仏転法輪。仏教大將。(T一四、四二三c)。ま

た、〔智度論、卷七〕仏為法王。菩薩為法將。所尊所重。(T

二五・一〇九a)「同、卷三十八」舍利弗於一切聲聞中為第

一法將。(T二一五・三三六c)。「根本說一切有部毘奈耶、卷

二十五」爾時六衆聞是語。已報言。諸具壽此未希有。何以

故。具舍利子是第二大法將。助仏輕法輪。伏一外道何足可

稱。(T二三、八一八a)

(69) 劫 劫波とも音写する。インドにおいて宇宙的視野で捉えられた時間の単位。世界が成立し存続し、破壊した後空無に帰するまでの一連の時間の称であるが、具体的には磐石劫・芥子劫の喻えで種々に説かれている。『雜阿含經、卷三四』では、四方上下一由旬の鉄城に芥子を満たして百年に一粒づつ除いても全部を尽くしても未だ一劫に満たないと。〔T二、二四二b-c〕。『大毘婆沙論、卷一三五』、『智度論、卷三八』などでは、大磐石を白氈で払って石を磨滅しても一劫は竟らないと述べる。

(70) 供給・供養 供給は僧衆のために奉仕すること。供養は三宝に香華や飲食を供え讚嘆して従うこと。

(71) 摂心 心を摂めて精神統一をすること。〔雜阿含經、第十一〕善闇閉根門。正念摂心住。飲食知節量。覺知諸心相。善男子難陀。世尊所歎。(T二、七三c)

(72) 漏尼道 無學道のこと。一切の煩惱を断じ尽したもの

稱。

(73) 須陀洹 須陀含・斯陀含とも音写。預流・入流と訳す。声聞四果中の初果の位で、見道において三界の見惑を断じて無漏の聖道の流れに入り竟った境位である。この果に向つて見惑を断じつつある見道十五心の問を須陀洹向(預流向)という。『婆沙論』や『俱舍論(賢聖品)』中に詳説される。

(74) 婆耆子 仏栗氏子・金剛子ともいう。学位にある阿難への教典の記事は阿含經典などにあり。〔中阿含經、卷八〕一時仏般涅槃後不久尊者阿難遊於金剛住金剛村中。其時尊者阿難無量百千衆前後因縁而為説法。於是尊者金剛子心作是念。此尊者阿難。故是學人未離欲耶。我寧可入如其像定。以如其像定。觀尊者阿難心。於是尊者金剛子(跋耆子)便入如其像定。以如其像定觀尊者阿難心。尊者金剛子即知尊者阿難。故是學人而未離欲。於是尊者金剛子。從三昧起向尊者阿難。而說頌曰。山林靜思惟。涅槃令入心。瞿曇禪無亂。不久息跡証。於是尊者阿難受尊者金剛子教(T一・四七四c)。また跋耆子(仏栗子)の出家求道時の記事は『大毘婆沙論、卷四六』(T二三、一二二c)などにある。

(75) 世法 世間法。世俗のことがら。世俗の法はすべて因縁生、可毀の法である。〔十誦律、第十七〕世法無常如偈所説。常者皆尽。高者亦墮。合会有離。生者有死(T二三・一二三c)

大智度論和訳 (11) (中祖・諫訪・大野・吉田)

- (76) 懸懃 「維摩詰所読經、第五」是病寧可忍不。療治不至增乎。世尊懸懃致問無量 (T十四・五四四b)。
- (77) 大光明 (王) 仏が過去世において闇浮提の王であった時の呼称。〔賢愚經、卷十〕過去久遠。無量無邊不可思議阿僧祇劫。此闇浮提。有大國王。名摩訶波羅婆修。晉言大光明 (T四、四二一b—c)
- (78) 五惡 五蓋のこと。心を覆つて善法を生じさせない五種の煩惱をいう。貪欲・瞋恚・惛眠(惛沈と睡眠)・掉悔(掉挙と惡作心がざわめいたり、後悔したりすること)・疑の五蓋をいう。『那先比丘經、卷上』(T三二、六九七a—b)にいす。
- (79) 日種王 大陽の末裔、アンギラス仙の裔をいい、釈尊を指す。ヴェーダ詩頌の作者の家系 Gautamāṅgirasa の家系に属したという伝承がプラーナ文献中にある。また甘蔗王種よりの自出ともいう。
- (80) 師子頬 迦毘羅城主淨飯王の父。『起世經』(T一・三六四a)、『起世本因經』(T一・四一九a)などに出す。
- (81) 淨飯・白飯・斛飯・甘露・悉達陀・提婆・提婆達多・阿難・摩訶男・阿泥盧豆・日露味女 いずれも師子頬王の末裔として『仏本行集經、卷十一』(T三、七〇一c以下)に系譜がでている。
- (82) 施婆羅 □婆羅・施跋羅とも音写。『智度論、第二四』(T

二五・二三九b)では、「好施如施婆羅……」とあり、『大毗婆沙論、第一〇一』では「世跋羅初生之時作是說今此頗有賤物令我隨理行布施耶。」とある。

(83) 濕樓韃羅國、尼連禪河、仏が出家してこの河岸の辺りにて苦行に専念したことで知られる。

(84) 乳糜 五味(乳・酪・生酥・熟酥・醍醐)の一。

(85) 金剛座 金剛よりなる宝座のことで釈尊成道の坐所として知られる。

(86) 阿夷陀 阿私陀とも音写。仏菩薩の成道を予言した仙人として、『本行乘經』(T三・六八三c以下)その他の仏傳經典に多出する。

(87) 菩提樹神 菩提樹の守護神。『金光明最勝王經、卷十』に仏讚歎偈の導入部にでている (T一六・四五〇b、四五五a) 曼陀羅華天妙華・適意華などとも漢訳される。インドラ神に捧げる五種の樹下の一つとして高契・芳香をもつといわれる。

(88) 空中懸繪 仏德讚歎のため天繪蓋を仏の頭上にかざすこと。もとは、インドにおいて王侯、貴人の頭上にかざして日を避ける目的で用いられたものであるが、仏の莊嚴として広く使用された。幡蓋・懸蓋とも称す。

(89) 青蓮華 睡蓮の一種をいうが、葉が長くて広く、青と白の色彩のあざやかさから、仏眼の形容として仏典に多出する。

〔維摩經、仏國品、第一〕於是長者子寶積。即於仏前以偈頌  
曰。目淨修広如青蓮（T一四・五三七a）

大智度論和訳（二）（中祖・諷訪・大野・吉田）

大智度初品中四衆義釋論第七

**經**復有五百比丘尼優婆塞優婆夷。皆見聖諦。

論問曰。何以諸比丘五千。餘三衆各五百。答曰。女人多短智慧煩惱垢重。但求喜樂愛行多故。少能斷結使得解脫證。如佛說。是因緣起法第一甚深難得。一切煩惱盡離欲得涅槃倍復難見。以是故女人不能多得不如比丘。優婆塞優婆夷有居家故。心不淨不能盡漏止可得四聖諦作學人。如偈說。

孔雀雖有色嚴身

不如鴻鴈能遠飛

白衣雖有富貴力

不如出家功德勝

以是故諸比丘尼。雖出家棄世業智慧短。是故有五百阿羅漢比丘尼。白衣二衆居家事懷故。得道亦各五百。問曰。如五千阿羅漢皆讚三衆何以不讚。答曰。大衆已讚則知餘亦讚。復次若別讚。

外道輩當呵言。何以讚比丘尼。生誹謗故。若讚白衣當言爲供養故。以是故不讚。問曰。諸餘摩

詞衍經。佛與大比丘衆俱。或八千人或六萬十萬人俱。是摩訶般若波羅蜜經諸經中第一。大如囑累品中說。餘經悉忘失其罪少少。失般若波羅蜜

84 b

**經**復た五百の比丘尼(bhiksuni)・優婆塞(upāsaka)・優婆夷(upāsikā)あり。皆、聖諦(āryasatya)を見たるものなり。

論問うていう。「<sup>(1)</sup>」諸の比丘は五千であつて、余の三衆は各、五百であるのか」と。答えていう。「女人(stri)は、多くは智慧に短しく(hrasva)<sup>(2)</sup>と煩惱(kleśa)の垢(mala)が重い。ただ喜樂(nandirāga)と愛行(<sup>(3)</sup>trsṇā-carita)を求めることが多いから、少しは能く結使(samyojana)を断つて解脱の証を得てゐるが、仏が説かれていたように、この因縁起(pratyasamutpāda)の法は第一(parama)で甚深(gambhira)であり、得るには難かしい。一切の煩惱を尽し、欲を離れて、涅槃を得るには倍に見難いことである。こういうわけで、女人は多くは(涅槃を得ることが)難かしくて、比丘には如ばない。優婆塞・優婆夷は居家に有るから、心が不淨(asuddha)であり漏(āsava)を尽すことができない。<sup>(4)</sup>止に四聖諦を得るにはまだあるが、学人(saikṣa)と作やうとはできない。偈に説いていふとおりである。

孔雀(barhin)は色にて身を嚴ると雖も、

鴻鴈(hamsa)の能く遠く飛ぶに如かず。

白衣(avadātavasana)は富貴にして力有りと雖も、

出家(pravrajita)の功德の勝れるに如かず。

ハラハラおひで、諸の比丘尼は、出家して世業(lokakarman)を棄て

一句其罪大多。以是故知般若波羅蜜經第一大。是第一經中當第一大會。何以故聲聞衆數少。止有比丘五千。比丘尼優婆塞優婆夷各五百。答

曰。以是大經甚深難解故。聲聞衆少。譬如王有真寶不示凡人。示大人信愛者。如王謀議時。與諸大臣信愛智人共論。諸餘小臣則不得入。復次是六千五百人盡得道。雖不盡解甚深般若波羅蜜。皆能信得無漏四信故。餘經聲聞衆。雖大多雜不盡得道。復次是中先讚千萬阿羅漢中。擇取最勝五千人。比丘尼優婆塞優婆夷亦爾。勝者難得故不多。

### 大智度論卷第三

たといつても、智慧に短しい。この理由から、五百の阿羅漢の比丘尼がいるのである。白衣の二衆は居家にあって事が懷がしいから道を得るもののが少ない。また、各、五百である。

問うていう。「五千の阿羅漢の如きは、みな讃えるが、三衆はどうして讃えないのか」と。答えていう。「(阿羅漢の) 大衆を讃えたならば、余(の三衆)もまた讃えたことになることが知られる。またつぎに、若し別に讃えたならば、外道(tirthika)の輩はきっと呵めて、『どうして比丘尼を讃えるのか。』といい、誹謗を生ずるからである。若し白衣を讃えるならば、『供養を為るから。』というべきである。

問うていう。「諸の余の摩訶衍經では、仏は大比丘衆と俱であつたとか、あるいは八千人と、あるいは六万、十万人と俱であつた(といわれている)。この摩訶般若波羅蜜經は諸經の中で第一であり、大なるものである。嘱累品の中に説かれているとおりである。『余の經はすべて忘失ても、その罪(apatti)は小さく、少ない。般若波羅蜜(經)の一句を失えば、その罪は大きく、多い』と。こういうわけで、般若波羅蜜經は第一にして大なることが知られる。この第一である經の中にまさしく第一の大会<sup>(6)</sup>がある。どういうわけで声聞衆の数は少なく、止に比丘が五千と比丘尼・優婆塞・優婆夷が五百いるのか」と。答えていう。「この大經は甚深であつて解し難いからである。声聞衆が少ないのは、譬えば王が真の宝をしていて、凡人には示さないで大人の信愛するものだけに示すようなものである。

（また）王が議を謀る時に、諸の大臣の信愛する智ある人と共に談じて、諸の余の小臣は（その中に）入らないようなものである。またつぎに、この六千五百人は全く道を得てている。（この人たちは）尽くは甚深である般若波羅蜜を解していないけれども、みな能く信じて無漏の四信<sup>(8)</sup>を得てているからである。余の経の声聞衆は大だ多いけれども雑であって、尽くは道を得ていない。またつぎに、この中で先ず千万の阿羅漢を讃え、（その）中からもつとも勝れた五千人を選び取ったのである。比丘尼・優婆塞・優婆夷についてもまたおなじである。勝れたものは得難いから多くないのである」と。

〔注〕

(1) 喜・樂・眼等の五根が対境と和合して生ずる感受作用である身受の一受をいう。煩惱性の印象感覺で得道の障害となるものである。〔中阿含、卷三十八、鷗鵝經〕(鷗鵝摩納)。如因草木而然火者。如是衆生所生喜樂。謂因欲惡不喜之法。不得捨樂及於止息。(T一・六六九a)

喜樂・愛行〔大毘婆沙論、卷百七十三〕五妙欲者。謂眼所識可愛。可喜可樂。如意能引欲可染着色。乃至身所識可愛。可喜。可樂。如意能引欲可染着色。……尊者覺天曰。諸欲雖非勝義妙。而是世俗妙。雖非究竟妙。是暫時妙。謂能少時引生喜樂息諸苦。(T二七・八六九c一八七〇a)

(2) 愛行 煩惱の分類の一つで、見行に対する惑業の名称。愛欲の情多きを愛行といい、有身見等の理知に走る見惑を見行といふ。〔智度論、卷廿一〕衆生有二分行。愛行見行。愛多者著樂多縛在外諸結使行。見多者著身見等行。為内結使縛。以是故愛多者觀外色不淨。見多者觀自身不淨。(T二五・二五一a)

(3) 因縁起法 因縁生法と同じ。〔中阿含經、卷二十一、說處經〕阿難。我本為汝說。因縁起及因縁起所生法。若有此則有彼。若無此則無彼。若生此則生彼。若滅此則滅彼。(T一・五六二c)

(4) 倭 類句。恐らくはつぎの偈を指すと思われる。

大智度論和訳(1) (中祖・諏訪・大野・吉田)

孔雀雖以色嚴身  
外形雖有美儀容

不如鴻鵠能高飛  
未若斷漏功德尊

今此比丘猶良馬  
能善調伏具心行

斷欲滅結離生死  
受後辺身壞魔軍

〔5〕

如囑累品中説「摩訶般若波羅蜜經囑累品、第九十」阿難。我身現在汝愛欲供養供給心常清淨。我滅度後是一切愛敬供養供給事。當愛敬供養般若波羅蜜。乃至第□第三以般若波羅蜜囑累汝。阿難汝莫忘失。莫作最後斷種人。(T八・四二三c一四二四a)

〔6〕

大会 衆僧が參集して執行される大法会のこと。般闍瑟・般闍婆沙會 pañcavārṣikamaha と称されて五年に一回行なわれる。その法会では莊嚴が設けられて衆僧や民衆への供養が広くなされるという。〔摩訶僧祇律、卷十六〕仏住舍衛城。爾時衆人勸化欲設大会。供養飯食九十六種出家人。有至優婆塞所。勸化索物者。優婆塞言。我欲作要。若使我諸師作上座者。當与汝物。……我當某月某日在阿耆河岸上。莊嚴其處施堅幢幡。行列宝樹間。敷妙座細軟快樂。設供餚餚。作斯大会。(T二二・三五三a)

(7) 信愛 ①仏典にはあまりでない語句である。仏典の本来の意味では仏説や教理を信受・信奉すること。〔大毘婆沙論、卷六〕云何煖。答若於正法毘奈耶中。有少信愛。即信名愛。故名信愛。於正法中。有信愛者。說緣道諦信。於毘奈耶中。有

大智度論和訳(二) (中祖・諫訪・大野・吉田)

信愛。説縁滅諦信。(T二七・二八a) ②世俗的には王が下臣を、また夫が妻を信じ愛わしく思うことをいい、情緒的な意味合いが濃い。この箇所はこの意味で使われている。「五分律、卷十五」王見信愛兼余夫人。正当先以情求次以理成耳。(T二三・一〇一a)

(8)

四信 菩薩瓔珞經(卷六、卷十三)・轉婆沙論(卷六)・智度論(卷三、卷十八、卷四十二)などに挙げられているが、いずれも具体的な内容は示されない。『成実論』卷六(信品、第八十九)では、「必定是信相。問曰。必定是慧相。必定名斷疑。是名慧相。答曰。未自見法。隨賢聖語信。心得清淨。是名為信。……隨仏語信。若自見法心得清淨。是名為信。先聞法後以身証。作如是念。此法真實諦不虛誑。是名為信。在四・信中。」(T三二・二八八a)と、仏・法・僧(賢聖)の信によって心清淨を得るのを四信中の三とする。また同論、卷二(T三二・二五三a)では仏・法僧と戒に対する信を掲げている。また仁王經疏(T三三・三七九a)では成実論で三宝と戒に対する信を四信とする説がみえるから、この箇所の四信が該当するとと思われる。法華經へ本論和訳(一)二七四頁、註(57)▽や大乗起信論における四信はここでは不適当。

經復有菩薩摩訶薩 論問曰。若從上數。應先菩薩次第比丘比丘尼優婆塞優婆夷。菩薩次佛故。若從下數。應先優婆夷次第優婆塞比丘尼比丘菩薩。今何以先說比丘。次三衆。後說菩薩。答曰。菩薩雖應次佛。以諸煩惱未盡故。先說阿羅漢。諸阿羅漢智慧雖少而已成熟。諸菩薩智慧雖多面煩惱未盡。是故先說阿羅漢。佛法有二種。一秘密二現示。現示中佛辟支佛阿羅漢皆是福田。以其煩惱盡無餘故。秘密中說諸菩薩得無生法忍。煩惱已斷具六神通利益衆生。以現示法故。前說阿羅漢。後說菩薩。復次菩薩以方便力。現入五道受五欲引導衆生。若在阿羅漢上。諸天世人當生疑怪。是故後說。問曰。在阿羅漢後可爾。何以乃在優婆塞優婆夷後。答曰。四衆雖漏未盡。盡在不久故。通名聲聞衆。若於四衆中間。說菩薩者則不便。如比丘尼得無量律儀故。應次比丘後在沙彌前以佛儀法不便故。在沙彌後。此諸菩薩亦如是。雖應在學人三衆上。以

經復た菩薩摩訶薩 (Bodhisattva Mahāsattva) 有り。

論問うていう。「若し、上」<sup>(1)</sup> 数に従ふば、当然、菩薩 (Bodhisattva) を先にし、比丘 (Bhikṣu)・比丘尼 (Bhikṣunī)・優婆塞 (Upāsaka)・優婆夷 (Upāsikā) の次第にすぐれである。菩薩は仏に次ぐからである。若し、下」<sup>(2)</sup> 数に従えば、当然、優婆夷を先にし、優婆塞・比丘尼・比丘・菩薩の次第にすぐれである。今、どうして先に比丘を説げ、次に三衆、後に菩薩を説げるのか」と。答えていう。「菩薩は、仏に次ぐとするのであるが、諸の煩惱 (kleśa) がまだ尽きていないので、先に阿羅漢を説げたのである。諸の阿羅漢の智慧 (prajñā) は、少ないけれども、已に成熟している。諸の菩薩の智慧は多いけれども、煩惱がまだ尽きていない。そのわけで先に阿羅漢を説げたのである。仏法に二種があるので、前記の二種がある。一つに秘密 (abhisamāndhidharma)<sup>(3)</sup> 、二つに現示 (prakāśita-d°) とである。現示中の仏・辟支佛・阿羅漢は、皆な福田 (puṇyakṣetra) である。その煩惱が尽されて余り <sup>(4)</sup> がないからである。秘密の中に説く諸の菩薩は無生法忍 (anuttarapattikadharmaksanti) を得て、煩惱が已に断たれ、六神通 (abhijñā) を具え、衆生を利益する。現示の法から、前に阿羅漢を説げ、後に菩薩を説げたのである。

復た次に、菩薩は、方便力 (upāya) よりて <sup>(5)</sup> 現に五道<sup>(6)</sup>に入り、五欲を受け、衆生を引導へのである。若し(菩薩が)阿羅漢の上に在つたならば、諸天

不便故在後說。復次有人言。菩薩功德智慧。超殊阿羅漢辟支佛。是故別說。

や世人が、当然、疑怪を生じるであらう。その理由で後に説げたである。  
問うていう。「阿羅漢の後に在つたならば、それでよい。どうして、そ  
こで優婆塞・優婆夷の後に在るのか」と。答えていう。「四衆は、漏「煩  
惱」(kṣināśrava) がまだ尽きていないが、尽きるのは間もなくだから、  
通じて声聞衆 (śrāvakasamgha) と/orのである。若し、四衆の中間で  
菩薩を説げたならば、それは不便である。比丘尼にいたつては無量の律儀  
(samvara) を得るから、比丘の後に次い、沙弥 (śrāmanera) の前に在  
るのである。仏は、儀法 (の面) で不便なので、沙弥の後に在るのであ  
る。この諸の菩薩も同様である。学人は、三衆の上に在るべきであるが、  
不便なので後に在ると説くのである。復た次に、ある人が言つている。  
「菩薩の功德 (guna) と智慧 (prajñā) は、阿羅漢や辟支仏を超えてい  
る」のような理由で別に説くのである。

問曰。聲聞經中但説四衆。此中何以別説菩薩衆。答曰。有二種道。一聲聞道。二菩提薩埵道。比丘比丘尼優婆塞優婆夷四衆。是聲聞道。菩薩摩訶薩是菩提薩埵道。以是故。聲聞法中經初。無佛在某處某處住爾所菩薩俱。但言佛某處某處住與爾所比丘俱。如說佛在波羅奈與五比丘俱。佛在伽耶國中與千比丘俱。佛在舍婆提與五

問うていう。「聲聞經<sup>(10)</sup>には、但だ四衆だけを説げている。」  
「」  
て別に菩薩衆を説げるのか」と。答えていう。「二種の道 (mārga) があ  
る。一つに声聞の道、二つに菩提薩埵の道である。比丘・比丘尼・優婆  
塞・優婆夷の四衆、これが声聞道である。菩薩摩訶薩、これが菩提薩埵の  
道である。このような理由で、声聞法の經の初めに仏が某処に在し、某処  
に住まられて、そのところに菩薩と俱にいることはない。ただ仏が某処某  
処に住し、そのところに比丘と俱にいると語る。仏が波羅奈 (Bārāṇasi)

百比丘俱。如是種種經初。不說與菩薩若干人俱。問曰。諸菩薩二種。若出家若在家。在家菩薩總說在優婆塞優婆夷中。出家菩薩總在比丘比丘尼中。今何以故別說。答曰。雖總在四衆中。應當別說何以故。是菩薩必墮四衆中。有四衆不墮菩薩中。何者是。有聲聞人辟支佛人。有求生天人。有求樂自活人。此四種人不墮菩薩中。何以故。是人不發心言我當作佛故。復次菩薩得無生法忍故。一切名字生死相斷出三界。不墮衆生數中。何以故。聲聞人得阿羅漢道滅度已。尙不墮衆生數中。何況菩薩。如波羅延優波尸難中偈說。

已滅無處更出不

若已永滅不出不

既入涅槃常住不

惟願大智說其實

佛答曰。

滅者卽是不可量

破壞因緣及名相

一切言語道已過

一時都盡如火滅

如阿羅漢。一切名字尙斷。何況菩薩能破一切諸法。知實相得法身而不斷耶。以是故。摩訶衍四衆中。別說菩薩。

に在して五比丘と俱にいると説くよななものである。『仏が伽耶國(Gayā)の中に在つて千の比丘と俱にいる』、『仏が舍婆提(Srāvasti)に在つて五百の比丘と俱にいる』と。このように種々の経の初めにおいて、『菩薩若干人と俱に』とは説いていないのである。

問うていう。「諸の菩薩に一種がある。あるいは出家(菩薩)あるいは在家(菩薩)である。在家菩薩は総めて優婆塞と優婆夷の中に在ると説き、出家菩薩は総べて比丘と比丘尼の中にある(と説いている)。今、どういう理由で別に説くのか」と。答えていう。「総べて四衆の中にあるが、まさしく別に説くべきである。どうしてかとすると、この菩薩は必ず四衆の中にあるが、四衆は菩薩の中に墮らない。どのような人がそうなのか(といえれば)、声聞人と辟支佛人、あるいは天に生ずることを求める人、あるいは自活を樂い求める人とである。この四種の人は、菩薩の中に墮らない。復た次に、菩薩は無生法忍を得るので一切の名字(nāmasamketa)や生死の相を断つて三界を出ており、衆生の数の中に墮らないのである。どうしてか(というならば)、声聞人も阿羅漢道を得て滅度し已つて、なお衆生の数の中に墮らないのである。まして菩薩はいうまでもない。波羅延優波尸難中の偈に説いている通りである。

已に滅し、処なければ更に出づるや、

若し已に永滅せれば出でざるや、

既に涅槃(nirvana)に入れば常住なるや、

惟だ願わくは大智もてその実を  
説きたまえ。

仏が答えていう。

滅は(すなわち) いお量るべからず、

因縁 (hetupratyaya) および名相 (nāmalakṣaṇa) を破壊し、  
一切の言語の道、已に過え、

一時に都べて尽くこと火の滅するが如し。

阿羅漢でさえも、一切の名字を断つてゐるのである。まして菩薩が、能く一切の諸法を破り実相 (bhūtalakṣaṇa) を知り、法身 (dharmakāya) を得て（名字を）断たない」とがあるうか。」の理由で、摩訶衍の四衆中と別に菩薩を説げてゐるのである。

問曰。何以故。大乘經初。菩薩衆聲聞衆兩說。  
聲聞經初獨說比丘衆。不說菩薩衆。答曰。欲辯  
二乘義故。佛乘及聲聞乘。聲聞乘陥小。佛乘廣  
大。聲聞乘自利自爲。佛乘益一切。復次聲聞乘  
多說衆生空。佛乘說衆生空法空。如是等種種分  
別說是二道故。摩訶衍經聲聞衆菩薩衆兩說。如  
讚摩訶衍偈中說。

得此大乘人 能與一切樂

問うていう。「どのような理由で、大乗經は初めに菩薩衆と声聞衆を両ながら説いて、声聞經は初めに独り比丘衆だけを説げ、菩薩衆を説げないのか」と。答えていう。「二乗の義を弁（別）しようとするからである。仏乗 (buddhayāna) とおよび声聞乗 (śrāvakayāna) の中で、声聞乗は陥小く、仏乗は広大い。声聞乗は自らを利し自らの為にし、仏乗は一切を（利）益する。また次に、声聞乗は、多く衆生の空なることを説き、仏乗は衆生の空なることと法の空なることを説く。」のように種々に分別してこの二道を説くのである。摩訶衍經には声聞衆と菩薩衆の両つ(18)が両説

利益以實法  
得此大乘人  
頭目以布施  
得此大乘人  
如犛牛愛尾  
得此大乘人  
若有割截身  
得此大乘人  
力行不休息  
得此大乘人  
神通聖道力  
得此大乘人  
無壞實智慧  
不可思議智  
不入二法中  
驢馬駝象乘  
大慈悲爲軸  
精進爲駛馬  
忍辱心爲鎧

令得無上道  
慈悲一切故  
捨之如草木  
護持清淨戒  
不惜身壽命  
能得無上忍  
視之如斷草  
精進無厭倦  
如抒大海者  
廣修無量定  
清淨得自在  
分別諸法相  
是中已具得  
無量悲心力  
等觀一切法  
雖同不相比  
大小亦如是  
智慧爲兩輪  
戒定以爲銜  
總持爲轡勒

いている。讃摩訶衍の偈中に説くとうりである。<sup>(19)</sup>

この大乗を得る人、能く一切の樂と

利益と実法<sup>(20)</sup>を以て、無上道を得せしむ。

この大乗を得る人、一切を慈悲するが故に、

頭目を以て布施<sup>(21)</sup>し、これを捨すこと草木の如し。

この大乗を得る人、清淨戒<sup>(22)</sup> (sila) を護持する事、

犛牛<sup>(23)</sup>の尾を愛する如く、身の寿命を惜まず、

この大乗を得る人、能く無上忍 (ksanti) を得、  
若し身を割截することあらば、

これを観ること草を断つがごとし。

この大乗を得る人、精進するに厭倦なく、  
力<sup>(24)</sup>行じて仙息せず、大海を抒む者の<sup>(25)</sup>とし。

この大乗を得る人、廣く無量の定 (samādhi) を修し、  
神通 (abhijñā) と聖道 (āryamārga) の力、清淨にして自在なるを得。

この大乗を得る人、諸の法相 (dharmalakṣaṇa) を分別して、  
実の智慧を壞すことなく、  
この中に已に具得せり。

不可思議の智と、無量の悲心力は、  
二法の中に入らず、等しく一切法を観す。

摩訶衍人乘 能度於一切

問曰。如聲聞經初但說比丘衆。摩訶衍經初。何以不。但說菩薩衆。答曰。摩訶衍廣大。諸乘諸道皆入摩訶衍。聲聞乘陥小不受摩訶衍。譬如恒河不受大海。以其陥小故。大海能受衆流。以其廣大故。摩訶衍法亦如是如偈說。

摩訶衍如海

小乘牛跡水

其喻亦如是

小故不受大

驢と馬と駝と象の乗は、  
同じと雖ども相比せられず。  
菩薩および声聞、その大小また是の如し。

大慈悲 (maitrī) もて軸と為し、智慧 (prajñā) もて両輪と為し、  
精進 (virya) もて駄馬と為し、戒 (sīla)。定 (samādhi) もて衡と為し、  
忍耐心 (ksānti) もて鎧と為し、總持 (dhyāna) もて轡勤と為す。

摩訶衍人の乗は、能く一切を度す。

問うていう。「声聞經などは、初めにただ比丘衆だけを説いている。摩訶衍經の初めには、どういう理由でただ菩薩衆だけを説かないのか」と。  
答えていう。「摩訶衍は広大 (vipula) であり、諸乗も諸道も皆な摩訶衍に入る。声聞乗は陥小く (hina) 摩訶衍を受けない。譬如ば、恒河が大海を受け（入れ）ないのは、その陥小さためである。大海が能く衆くの流れを受け（入れ）るのは、その広大さのためである。摩訶衍の法もまたこのようであり、（次の）偈に説いている通りである。

摩訶衍は海の如く、

小乗は牛の跡の水、

小なるが故に大を受けず、

その喻えも、また是の如し、

問曰。何等名菩提。何等名薩埵。答曰。菩提名

問うていった。「どのようなものを菩提 (bodhi) と名づけ、どのような

驢と馬と駝と象の乗は、  
同じと雖ども相比せられず。  
菩薩および声聞、その大小また是の如し。

大慈悲 (maitrī) もて軸と為し、智慧 (prajñā) もて両輪と為し、  
精進 (virya) もて駄馬と為し、戒 (sīla)。定 (samādhi) もて衡と為し、  
忍耐心 (ksānti) もて鎧と為し、總持 (dhyāna) もて轡勤と為す。

摩訶衍人の乗は、能く一切を度す。

問うていう。「声聞經などは、初めにただ比丘衆だけを説いている。摩訶衍經の初めには、どういう理由でただ菩薩衆だけを説かないのか」と。  
答えていう。「摩訶衍は広大 (vipula) であり、諸乗も諸道も皆な摩訶衍に入る。声聞乗は陥小く (hina) 摩訶衍を受けない。譬如ば、恒河が大海を受け（入れ）ないのは、その陥小さためである。大海が能く衆くの流れを受け（入れ）るのは、その広大さのためである。摩訶衍の法もまたこのようであり、（次の）偈に説いている通りである。

摩訶衍は海の如く、

小乗は牛の跡の水、

小なるが故に大を受けず、

その喻えも、また是の如し、

問曰。何等名菩提。何等名薩埵。答曰。菩提名

問うていった。「どのようなものを菩提 (bodhi) と名づけ、どのような

諸佛道。薩埵名或衆生或大心。是人諸佛道功德。盡欲得其心。不可斷不可破。如金剛山。是名大心。如偈說。

一切諸佛法 智慧及戒定  
能利益一切 是名爲菩提  
其心不可動 能忍成道事

不斷亦不破 是心名薩埵

復次稱讚好法名爲薩。好法體相名爲埵。菩薩心自利利他故。廣一切衆生故。知一切法實性故。行阿耨多羅三藐三菩提道故。爲一切賢聖之所稱讚故。是名菩提薩埵。所以者何。一切諸法中佛法第一。是人欲取是法故。爲賢聖所讚歎。復次如是人爲一切衆生。脫生死老死故索佛道。是名菩提薩埵。復次三種道皆是菩提。一者佛道二者聲聞道三者辟支佛道。辟支佛道聲聞道。雖得菩提。而不稱爲菩提。佛功德中菩提稱爲菩提。是名菩提薩埵。

ものを薩埵 (sattva) いづれいかるのか」と。答へて云ひた。「菩提は、すべての仏道 (buddhamārga) と名づけ、薩埵は、衆生あることは大心と名づかる。かれは人は諸の仏道の功德 (guna) を以へしてその心を得ようとする。断つゝともやめや破ることもやらない (ハシマ)、金剛山 (vajraparvata) のようであり、これを大心と名づけるのである。偈に説かれた通りである。

一切諸仏の法、智慧及び戒と定は、

能く一切を利益す。是れ名づけて菩提と為す。

その心、動すべからず、

能く成道の事を忍ぶ。

不斷せず、また破せず、

この心、薩埵と名づく。

復た次に、好い法を称讚するのを「薩 (sat)」といふ、好い法の体相 [特徴] (bhūtalakṣaṇa) を「埵 (tva)」とする。菩薩の心は、自利と利他 (の一心) があるからであり、一切の衆生を (濟) 度するからであり、一切法の実性を知るからであり、阿耨多羅三藐三菩提 (anuttarasamyak-sambodhi) を行するからであり、一切の賢聖の称讚する所であるからであり、これを「菩提薩埵」というのである。その理由は云々してかといえど、一切諸法中、仏法が第一であり、この人「菩薩」がこの法を取らうとするからであり、賢聖によつて讃嘆されるのである。

問曰。齊何來名菩提薩埵。答曰。有大誓願心不可動。精進不退。以是三事名爲菩提薩埵。復次有人言。初發心作願。我當作佛度一切衆生。從是已來名菩提薩埵。如偈說。

若初發心時 誓願當作佛  
已過諸世間 應受世供養

從初發心到第九無礙。入金剛三昧中。是中間名爲菩提薩埵。是菩提薩埵有兩種。有轉跋致菩提薩埵。是名實菩薩。以是實菩薩故。諸餘退轉菩薩皆名菩薩。譬如得四道人。是名實僧。以實僧故。諸未得道者。皆得名僧。問曰。云何知是菩

復た次に、このような人は、一切衆生のために、生(jāti)・老(jarā)・死(marana)を脱しようとして仏道を索める。このを「菩提薩埵」<sup>もと</sup>である。

復た次に、三種の道は皆な「菩提」である。一つには仏道、二つには声聞道、三つには辟支仏道である。辟支仏道と声聞道は、菩提を得ても「菩提」といわない。仏(道の)功德中の菩提を称して「菩提」とするのである。これを「菩提薩埵」というのである。

問うて。何に齊へて『菩提薩埵』といふのか。答えて。大誓願(mahāpranidhāna)があり、心は動くことなく、精進して退くことがない。この三事によつて菩提薩埵といふのである。ふ。

復た次に、ある人がいう。「初發心(prathamacittotpāda)に願を起し『私は(あつと)仏となり、一切衆生を度おう』と。これより以来、(の人を)菩提薩埵といふのである」と。偈に説く通りである。

若し初發心の時、誓願して作仏せば、  
已に諸の世間を過え、

応に世の供養(pūjā)を取くべし。

初發心より第九無碍<sup>24</sup>(āmantarya)と到り、金剛三昧(vajrasamādhi)中に入つてゐる。この中間を「菩提薩埵」といふ。この「菩提薩埵」は一種がある。轉跋致<sup>25</sup>〔退法〕(vaiavartika)と阿轉跋致<sup>26</sup>〔不退法〕(a-vaiava-

薩軀跋致阿軀跋致。答曰。般若波羅蜜阿軀跋致品中。佛自說阿軀跋致相。如是相是退轉。如是相是不退轉。復次若菩薩一法。得好修好念。是名阿軀跋致菩薩。何等一法。常一心集諸善法。如說。諸佛一心集諸善法故。得阿耨多羅三藐三菩提。復次有菩薩得一法。是阿軀跋致相。何等一法。正直精進。如佛問阿難。阿難汝說精進如是世尊。阿難汝讚精進如是善逝。阿難常行常修常念。精進乃至令人得阿耨多羅三藐三菩提。如經廣說。復次若得二法。是時是阿軀跋致相。何等二法。一切法實知空。亦念不捨一切衆生。如是人名爲阿軀跋致菩薩。復次得三法。一者若一心作願欲成佛道。如金剛不可動不可破。二者於一切衆生悲心徹骨入髓。三者得般舟三昧。能見現在諸佛。是時名阿軀跋致。復次阿毘曇中。迦施延尼子弟輩言。何名菩薩。自覺復能覺他。是名菩薩。必當作佛。是名菩薩。菩提名漏盡人智慧。是人從智慧生。智慧人所護智慧人所養故。是名菩薩。又言發阿軀跋致心。從是已後名菩薩。又言若離五法得五法。是名菩薩。何謂五

rtika) との（菩薩）である。退法 (parihāṇadharma) と不退法 (apari-hāna-dh<sup>o</sup>) との阿羅漢のようなものである。阿軀跋致菩薩埵が、実の菩薩である。この実の菩薩であるといふとの理由から諸余の退転の菩薩も皆な菩薩という。譬えば、四道を得た人のようなものである。これを実僧といふ。実僧であるといふとの理由から、諸のまだ得道していない人も、皆な僧とすることができる。問うていう。「どのようにして、菩薩の軀跋致と阿軀跋致とを知るのか」と。答えていう。「般若波羅蜜阿軀跋致品中に仏が自ら阿軀跋致の相を説かれている。このような相が退転であり、このような相が不退転である」と。

復た次に、若し菩薩一法を、好く修め、好く念ずることができれば、これを阿軀跋致菩薩という。一法とは何等なものか。常に一心に諸の善法を集めて説くように、諸仏は一心に諸の善法を集めるので阿耨多羅三藐三菩提を得るのである。

復左次に、菩薩が一法を得ることがある。これが阿軀跋致の相である。一法とは何等なものか。正直に精進することである。仏が阿難に問われた通りである。「阿難よ、汝は精進を説くか」。「これです」と。世尊は、「阿難よ、汝は精進を讃えるか」。「これです。善逝よ」。「阿難よ。常に行じ常に修し常に念じて精進し、ないし、人に阿耨多羅三藐三菩提を得せよ」と。経に広く説かれる通りである。

復た次に、若し（菩薩が）一法を得たならば、この時、これが阿軀跋致

法。離三惡道常生天上人間。離貧窮下賤常得尊貴。離非男法常得男子身。離諸形殘缺陋諸根具足。離捨喜忘常憶宿命。得是宿命智慧。常離一切惡法。遠離惡人。常求道法攝取弟子。如是名爲菩薩。又言從種三十二相業已來。是名菩薩。

の相である。何等が一法であるか。一切法は、實に空なることを知ると、また念じて一切衆生を捨てないとである。このような人が、阿鞞跋致菩薩というのである。

86c 復た次に、(菩薩は) 三法を得る。一つには、若し一心に願(prañidhāna)を作して、仏道を成(就)しようとすれば、金剛のように動かす心もできず、破ることもできない。二つとは、一切衆生に対し悲心(karuṇācitta)が、骨に徹し髓に入る。三つとは、般舟三昧(prajñāsamādhi)を得て、能く現在の諸仏を見る。この(三法を得る)時、阿鞞跋致とう。

復た次に、『阿毘曇』中に、迦旃延尼子(Kātyāyaniputra)<sup>(31)</sup>の弟子の輩がいう。「何を菩薩といふのか。自ら覺め、また他を覺めや。これを菩薩といふ。必ず仏となる。これを菩薩といふ。菩提は、灑足(ksināsrava)の人の智慧に名づける。この人(の菩提)は、智慧より生ずる。智慧の人を護るところのものであり、智慧の人の養うといふものであるので、これを菩薩といふ」と。また言つてゐる。「阿鞞跋致の心を發す。この(時)より、菩薩といふ」と。またいう。「若し、五法を得たならば、これを菩薩といふ。何を五法と體<sup>(32)</sup>のが。三惡道(durgati)を離れ、常に天上(deva)と人間(manusya)と生ずる。貧窮(dāridrya)・下賤(nicakula)を離れ、常に尊貴(uccakula)な(身)となる。非男(stri-bhava)の身を離れ、男子(pumphava)の身になる。諸の形の残欠(va-

ikalya)・(醜)陋を離れ、諸根が具足している。暫忘を離捨し、常に宿命を憶い (jātismara)、<sup>36</sup>の宿命 (pūrvanivāsa) の智慧を得る。常に一切の惡法を離れ、惡人を遠離する。常に道法を求む、弟子を攝取る。<sup>37</sup>このような人を菩薩といふ。またいう。「三十一相の業を種えてから」のかた（の人を）、菩薩といふ」と。

問曰。何時種三十一相業因縁。答曰。過三阿僧祇劫。然後種三十一相業因縁。問曰。幾時名阿僧祇。答曰。天人中能知算數者。極數不復能知。是名一阿僧祇。如一一名二。二二名四。三三名九。十十名百。十百名千。十千名萬。千萬名億。千萬億名那由他。千萬那由他名頻婆。千萬頻婆名迦他。過迦他名阿僧祇。如是數三阿僧祇。若行一阿僧祇滿行第二阿僧祇。第二阿僧祇滿行第三阿僧祇。譬如算數法。算一乃至算百百算竟還至一。如是菩薩一阿僧祇過還從一起。初阿僧祇中。心不自知我當作佛不作佛。二阿僧祇中。心雖能知我必作佛。而口不稱我當作佛。三阿僧祇中。心了了自知得作佛。口自發言無所畏

難。我於來世當作佛。釋迦文佛。從過去釋迦文佛到刺那尸棄佛爲初阿僧祇。是中菩薩永離女人身。從刺那尸棄佛至燃燈佛爲二阿僧祇。是中菩薩七枚青蓮華。供養燃燈佛。敷鹿皮衣布髮掩泥。是時燃燈佛。便授其記。汝當來世作佛名釋迦牟尼。從燃燈佛至毘婆尸佛爲第三阿僧祇。若過三阿僧祇劫。是時菩薩種三十二相業因緣。

問曰。三十二相業何處可種。答曰。欲界中。非色無色界。於欲界五道在人道中種。於四天下闍浮提中種。於男子身種非女人。佛出世時種。佛不出世不得種。緣佛身種。緣餘不得種。問曰。是三十二相業因緣。於身業口業意業何業種。答曰。意業種非身口業。何以故。是意業利故。問

のように、菩薩の一阿僧祇が過ると、還た一より起まる。初めの阿僧祇中の心は「我が當に作仏するか作仏しないかを知らない」。二の阿僧祇中では、「心は能く我が必ず作仏することを知っているが、口には「我が當に作仏となる」とは称えない」。三の阿僧祇中では、「心は了々として自ら作仏する」とができるのを知り、口で自ら畏難する (bhaya) がなく、「我が來世に當に作仏となる」と発言する。<sup>(41)</sup> 爪迦文仏は過去の爪迦文仏より刺那尸棄佛 (Ratnasikhin) に到つて初めの阿僧祇となる。<sup>(42)</sup> 中で菩薩は、永く女人の身を離れる。刺那尸棄佛より燃燈仏に至つて、二の阿僧祇となる。この中の菩薩は七枚の青蓮華 (nlotpala) を燃燈仏 (Dipamkara) に供養し、鹿皮の衣を敷き、髪を布き泥を掩う。この時、燃燈仏は、その記を授けられる。「汝は當に來世に作仏して爪迦牟尼といわれる。燃燈仏より毘婆尸佛 (Vipasyin) に至りて、第三阿僧祇となる。若し三阿僧祇劫を過るるゝ、この時、菩薩は三十二相の業因縁を種える」と。

問うていい。「三十二相の業は、どうして種えられたのが」と。答えていこう。「欲界 (kāmadhātu) の中であり、色 (界) (rūpadhātu)・無色界 (arūpadhātu) ではない。欲界の五道における人道の中に在つて種えるのである。四天下 (caturdvipaka) における闍浮提 (Jambuduipa) 中で種えたのである。男子の身に種えるのであり、女人 (の身) ではない。仏の出世の時に種えるのであり、仏が出世しない (時に) 種えることはできない

曰。意業有六識。是三十二相業。爲是意識種。是五識種。答曰。是意識非五識。何以故。五識不能分別。以是故意識種。問曰。何相初種。答曰。有人言。足安立相先種。何以故。先安立然後能種餘相。有人言。紺青眼相初種。得此眼相大慈觀衆生。此兩語雖有是語不必爾也。若相因緣和合時便是初種。何必安立足爲初。問曰。一思種。爲多思種。答曰。三十二思種三十二相。一思種一一相。一一相百福德莊嚴。問曰。幾許名一福德。答曰。有人言。有業報轉輪聖王。於四天下受福樂得自在。是名一福德。如是百福成一相。復有人言。作釋提桓因。於一天中得自在。是名一福德。復有人言。作他化自在天王。於欲界中得自在。是名一福。復有人言。除補處菩薩餘一切衆生所得福報。是名一福。復有人言。天地劫盡一切衆生共福德故。三千大千世界報立。是名一福。復有人言。是福不可量不可以譬喻知。如三千大千世界一切衆生皆盲無目。有一人能治令差。是爲一福。一切人皆被毒藥。一人能治令差。一切人應死。一人能拯之令脫。一

87 b

い。仏身に縁つて種えるのであり、余に縁つて種えることはできない」と。問うていう。「ハの三十一相の業因縁は、身業 (kāyakarman)・口業 (vākkarman)・意業 (manaskarman) のうち何の業で種えたのか」と。答えていう。「意業で種えるのであり、身 (業)・口業ではない。どうしてかといえば、この意業が利 <sup>めぐら</sup>いからである」と。問うていう。「意業には六識がある。ハの三十一相の業は、ハの意識が種となるのか、この五識が種となるのか」と。答えていう。「これは意識であつて五識ではない。どうしてかといえば五識は分別することができないからである。ハの理由から意識で種えるのである」と。問うていう。「どのような相 (lakṣaṇa) を初めて種えるのか」と。答えていう。「有る人が言う。『足の安立 (supratiṣṭhitapāda) の相を先ず種えるのである。どうしてかと言えば先ず (足を) 安立してその後で能く余の相を種えるからである』と。有る人が言う。『紺青眼 (abhinilanetra) の相を初めに種えるのである。ハの眼相が大慈 (mahāmaitra) をもつて衆生を觀ることができるのである』と。この両の語に、その語があつても、必ずしもそうではない。相が因縁和合する時、初めて種えるのである。どうして必ず足を安立する」とが初めとなろうか (そとはならない)」と。

問うていう。「一思 (cetanā) が種えるが、多思が種えるか」と。答えていう。「三十一思が三十一相を種えるのである。一一の思が一一の相を種えるのである。一一の相に百の福德が莊嚴されて (alamkṛta) いるので

切人破戒破正見。一人能教令得淨戒正見。如是等爲一福。復有人言。是福不可量不可譬喻。是菩薩入第三阿僧祇中。心思大行。種是三十二相因緣。以是故。是福無能量。唯佛能知。

ある」と。問うていう。「どれほどを一の福德といふのか」と。答えてい。う。「有る人が言う。『業報がある。転輪聖王が四天下において福樂を受け自在になる。』これを一福德といふ』と。また有る人が言ふ。『他化自在天王 (Sakradevendra) となり、欲界中において自在 (vaśitā) になる。これを一福 (徳) といふ』と。また有る人がいう。『補處の菩薩 (saṃnikṛṭabodhisattva) を除く』と。また有る人が言ふ。『天地の劫が尽き一切衆生が福德を共にするので、三千大千世界が報いとして (成) 立した。これを一福 (徳) といふ』と。また有る人が言ふ。『この福は量ることができるないし、譬喻で知ることもできない。三千大千世界の一切衆生が皆な盲で目がなくても、有る一人が能く治し差すようなものである。』これを一福 (徳) とする。一切の人が皆な毒薬を被むつても、一人が能く治し差すのである。一切の人が死すべきものであつても、一人が能く之を抹い脱れさせることができる。一切の人が破戒し正見 (samyakdṛṣṭi) を破つても一人が能く淨戒 (viśuddhaśila) と正見を得させることがである。このようなことを一福 (徳) とするのである」と。復た有る人がいう。『この福は、量ることができないし、譬喻えることもできない。この菩薩は、第三阿僧祇に入り、心思が大いに行ひて、この三十二相の因縁を種えるのである。このような理由で、この福 (徳) は能く量れない。唯だ仏のみが能く知りたもうのである』と。

問曰。菩薩幾時能種三十二相。答曰。極遲百劫。極疾九十一劫。釋迦牟尼菩薩。九十一大劫行辨三十二相。如經中言。過去久遠有佛名弗沙。時有二菩薩。一名釋迦牟尼。一名彌勒。弗沙佛。欲觀釋迦牟尼菩薩心純淑未。卽觀見之。知其心未純淑。而諸弟子心皆純淑。又彌勒菩薩心已純淑。而弟子未純淑。是時弗沙佛。如是思惟。一人之心易可速化。衆人之心難可疾治。如是思惟竟。弗沙佛。欲使釋迦牟尼菩薩疾得成佛。上雪山上。於寶窟中入火定。是時釋迦牟尼菩薩。作外道仙人。上山採藥。見弗沙佛坐寶窟中入火定放光明。見已心歡喜。信敬翹一脚立。又手向佛一心而觀。目未曾睜七日七夜。以一偈讚佛。

天上天下無如佛

十方世界亦無比

世界所有我盡見

一切無有如佛者

七日七夜諦觀世尊目未曾睜。超越九劫於九十一劫中。得阿耨多羅三藐三菩提。問曰。若釋迦牟尼菩薩。聰明多識能作種種好偈。何以故。七日七夜一偈讚佛。答曰。釋迦牟尼菩薩。貴其心思

87c

問うていう。「菩薩は、幾時、能く三十二相を種えるのか」と。答えていう。「極めて遅い（時）は百劫かかり、極めて疾い（時）は九十一劫かかる。釈迦牟尼菩薩は、九十一大劫の（間）に行じて三十二相を辦え<sup>(43)</sup>る。『經』中に言うように、久遠の過去に仏がいて弗沙と名つた。（その）時に二（人の）菩薩がいて、一（人）は釈迦牟尼といい、（他の）一（人）は彌勒といつた。弗沙仏は、釈迦牟尼菩薩の心が純淑かどうかを觀ようとした。そこですぐに之を觀見て、その心がまだ純淑でないのに諸の弟子の心が皆な純淑であることを、また、彌勒菩薩の心が已に純淑で弟子（の心）がまだ純淑でないことを知つた。この時、弗沙仏（Pusya）は、次のように思惟した。「一人の心は、速ぐ（教）化し易い。（しかし）衆人の心は、疾ぐには治し難い」と。このように思惟し竟り、弗沙仏は、釈迦牟尼菩薩を疾ぐ成仏させようとして、雪山の上に上り、宝窟<sup>(45)</sup>の中で火定に入られた。この時、釈迦牟尼菩薩は、外道の仙人となり、山に上り薬を採つて、弗沙仏が宝窟の中に坐り火定に入つて光明を放つているのを見た。<sup>(46)</sup>（それを）見已つて心に歡喜・信敬して、一脚を翹<sup>(47)</sup>て立ち、又手して仏に向かい一心に觀つめ、目は少しも睜かず、七日七夜（を経た）。（そこで）一偈を以て仏を讚えた。

天上天下に、仏に如くはなく、

十方世界にも、また比ぶるものなし。

世界の所有、我尽く見しも、

不貴多言。若更以餘偈讚佛心或散亂。是故七日

七夜以一偈讚佛。問曰。釋迦牟尼菩薩。何以心未純淑。而弟子純淑。彌勒菩薩自身純淑。而弟子未純淑。答曰。釋迦牟尼菩薩。饒益衆生心多。自爲身少故。彌勒菩薩。多爲己身少爲衆生故。從韃婆尸佛。至迦葉佛。於其中間九十一劫。種三十二相業因緣集竟。六波羅蜜滿。何等六。檀波羅蜜。尸羅波羅蜜。羼提波羅蜜。毘梨耶波羅蜜。禪波羅蜜。般若波羅蜜。

一切、仏に如くはなし。

七日七夜、つまびらか諦に世尊を觀て、日は少しも晦かず、九劫を超越こえて九十一劫の中において阿耨多羅三藐三菩提を得たのである。

問うていう。「釈迦牟尼菩薩が、聰明・多識で能く種々の好い偈を作られるのであれば、どういう理由で七日七夜に一偈で仏を讃えるのか」と。答えていう。「釈迦牟尼菩薩は、その(仏の)心思を貴んで多言を貴ばなかつたのである。若し更に余(分)の偈で仏を讃えると心が或いは散乱してしまうからである。このような理由で七日七夜に一偈で仏を讃えるのである」と。問うていう。「釈迦牟尼菩薩は、どうして心がまだ純淑でなく弟子(の心)が純淑であり、弥勒菩薩の自らの心が純淑で弟子(の心)がまだ純淑でないのか」と。答えていう。「釈迦牟尼菩薩は、衆生を饒衣しようとする心が多く、自(分自)身のためにすることが少ないからである。弥勒菩薩は、己の身のためにすることが多く、衆生のためにすることが少ないからである。韃婆尸佛(47)より迦葉佛に至るその中間の九一大劫において、(仏は)三十二相の業因縁を種え集竟り、六波羅蜜を満たすのである。何等を六とするかといえど、檀波羅蜜(dāna-pāramitā)・尸羅波羅蜜(sīla-p°)・羼提波羅蜜(kṣānti-p°)・毘梨耶波羅蜜(virya-p°)・禪波羅蜜(dhyāna-p°)・般若波羅蜜(prajñā-p°)である」と。

問曰。檀波羅蜜云何滿。答曰。一切能施無所遮

問うていう。「檀波羅蜜は、どうして満するか」と。答えていう。「

礙。乃至以身施時。心無所惜。譬如尸毘王以身施鵠。釋迦牟尼佛本身作王。名尸毘。是王得歸命救護陀羅尼。大精進有慈悲心。視一切衆生如母愛子。時世無佛。釋提桓因命盡欲墮。自念言。何處有佛一切智人。處處問難不能斷疑。知盡非佛。卽還天上愁憂而坐。巧變化師毘首羯磨天。問曰。天主何以愁憂。答曰。我求一切智人不可得。以是故愁憂。毘首羯磨言。有大菩薩。布施持戒禪定智慧具足。不久當作佛。帝釋以偈答曰。

菩薩發大心 魚子菴樹華  
三事因時多 成果時甚少  
毘首羯磨。答曰。是優尸那種尸毘王。持戒精進大慈大悲禪定智慧不久作佛。釋提桓因。語毘首羯磨。當往試之。知有菩薩相不。汝作鵠我作鷹。汝便佯怖入王腋下。我當逐汝。毘首羯磨言。此大菩薩云何以此事惱。釋提桓因說偈言。我亦非惡心

以此試菩薩

知其心定不

說此偈竟。毘首羯磨。卽自變身作一赤眼赤足

大智度論和訳 (1) (中祖・諫訪・大野・吉田)

88a 切に能く施し、遮礙せがいとわざわざがなく、ないし身を以て施す時、心に惜むところがない。(それは)譬如ばば、尸毘王(Sibi)が身を以て鵠(kapota)に施したようなものである。釈迦牟尼佛の本身は王であつて、尸毘(49)とわざわざう。

この王は、帰命救護陀羅尼(50)を得て大いに精進し、慈悲心を有ち一切衆生を視るわざわざことが、母の子を愛するようであつた。時に世に仏がなく、釈提桓因(Sakradavendra)の命が尽き墮おちらようとした時、自ら念じていう。「どうに、仏の一切智(sarvajña)である人がいるのか」と。処々に問難して、「(その)疑いを断つ」とができるず、尽て仏でないことを知り、すぐに天上へ還り、愁憂(ながら)え坐した。巧変化の師である毘首羯磨(52)天(Visvakarman)が問うていう。「天主(Devendra)は、どういう理由で愁憂(ながら)えるのか」と。答えていう。「私は、一切智の人を求めているが、見つからない。このような理由で愁憂(ながら)えている」と。毘首羯磨がいう。「大菩薩がいて、布施・持戒・禪定・智慧を具足している。間もなく、仏となるはずである」と。(また)帝釈(天)が偈で答えて言う。

菩薩、大心(53)を發し、

魚子、菴樹華あり。

三時の因は時に多く、  
果を成する時甚だ少し。

毘首羯磨が答えていう。「そもそも優尸那種の尸毘王は、持戒・精進・大慈・大悲・禪定・智慧によつてあゝと間もなく仏となる」と。釈提桓因

鴿。釋提桓因。自殺身作一鷹。急飛逐鴿。鴿直來入王掖底。舉身戰怖動眼促聲。

是時衆多人

相與而語曰

是王大慈仁

一切宜保信

如是鴿小鳥

歸之如入舍

菩薩相如是

作佛必不久

是時鷹在近樹上。語尸毘王。還與我鴿。此我所受。

王時語鷹。我前受此非是汝受。我初發意

時。受此一切衆生皆欲度之。鷹言。王欲度一切衆生。我非一切耶。何以獨不見愍。而奪我今日食。王答言。汝須何食。我作誓願其有衆生。來歸我者必救護之。汝須何食亦當相給。鷹言。我須新殺熟肉。王念言。如此難得。自非殺生無由得也。我當云何殺一與一。思惟心定卽自說偈。

是我此身肉

恒屬老病死

不久當臭爛

彼須我當與

如是思惟已。呼人持刀自割股肉與鷹。鷹語王言。王雖以熟肉與我。當用道理令肉輕重得與鴿等勿見欺也。王言持稱來。以肉對鴿。鴿身轉重王肉轉輕。王令人割二股亦輕不足。次割兩蹲兩

が、毘首羯磨に語る。「往つてそれを試し、菩薩相があるかどうかを知らなければならぬ。<sup>あなたは</sup>汝は鴿(kapota)となり、<sup>わたしは</sup>我は鷹(syena)となる。汝はそこで併<sup>おそれたありを</sup>怖して、王の腋(waki)の下に入り、我は汝を逐いかけるよう」と。毘首羯磨がいう。「この大菩薩は、どういう理由で惱むのか」と。釋提桓因が偈に説いて言う。

我もまた恶心に非ず、

真金を応に試すが如し。

これを以て菩薩を試み、

その心の定なるか不<sup>いなや</sup>を知らんとす。

この偈を説き竟り、毘首羯磨はすぐに自らの身を変えて一(羽)の赤眼・赤足の鴿となつた。釋提桓因も自らの身を変えて一(羽)の鷹となり、急いで飛び鴿を逐いかけた。鴿は直ぐに(飛)来て王の腋(waki)の底に入り、身を(もち)挙げ戦<sup>おのの</sup>き怖れ、眼を動かし声を促<sup>せきた</sup>てた。

この時、衆多の人、

相与に語りて曰はく、

この王の大きいなる慈仁<sup>(55)</sup>、

一切の宜しく保信するところなり。

是の如く、鴿・小鳥、

之に帰し舍に入るが如し。

菩薩の相は、是の如し。

臍兩乳項脊。舉身肉盡。鵠身猶重。王肉故輕。

是時近臣內戚。安施帳幔。却諸看人。王今如此無可觀也。尸毘王言。勿遮諸人聽令入看。而說

偈言。

天人阿修羅

一切來觀我

大心無上志

以求成佛道

若有求佛道

當忍此大苦

不能堅固心

則當息其意

是時菩薩。以血塗手攀稱欲上。定心以身盡以對鵠。鷹言。大王此事難辨。何用如此以鵠還我。王言鵠來歸我終不與汝。我喪身無量於物無益。今欲以身求易佛道。以手攀稱。爾時菩薩。肉盡筋斷不能自制。欲上而墮自責心言。汝當自堅勿得迷悶。一切衆生墮憂苦大海。汝一人立誓欲度一切。何以怠悶。此苦甚少地獄苦多。以此相比於十六分猶不及一。我今有智慧精進持戒禪定。猶患此苦。何況地獄中人無智慧者。是時菩薩。一心欲上復更攀稱語人扶我。是時菩薩。心定無悔。諸天龍王阿修羅鬼神人民皆大讚言。爲一小鳥乃爾。是事希有。卽時大地爲六種振動。大海

作仏は、必ず久しうからず。

この時、鷹は、近くの樹上にいて、尸毘王に語つた。「我に鵠を還めぐりあたえ与よられよ、これは我が受けるものである」と。王は（その）時、鷹に語る。「我が前にこれを受けたのであり、これは汝が受けたのではない。我が初めて意を発した時、この一切衆生を受けたのではない。我が初めて意を発した時、この一切衆生を受けて、皆なそれらを度そうとしたのである」と。鷹がいう。「王が一切衆生を度そうとしたのであれば、我も一切（衆生を度そうとした中の一）ではないか。どういう理由で独りだけ愍あわれみをされず、我的今日の食を奪うのか」と。王が答えていう。「汝はどのような食を須めるのか。我が誓願したのはまさしくが衆生である。（参）來して我に帰（入）する者は、必らずこれを救護まもろう。汝はどのような食を須め、また相給あてがつたらよいのか」と。鷹がいう。「我は新（鮮）な殺（傷）した熱肉を須めている」と。王は（心に）念じていう。「そのような（肉）は、（容易）得られない。自ら殺生せずに得られる（理）由はない。我がどうして（他者の）一を殺し、（他者の）一に与えられようか」と。

思惟し心を定めてすぐに偈を説いて（言う）。

是れ我が此の身肉は、

恒に老病死に属し、

久しうからずして當に臭爛す。

彼、我を須めば當に与うべし。

このように思惟し已り、人を呼び刀を持って（こさせ）、自ら股肉を割

波揚枯樹生華。天降香雨及散名華。天女歌讚必  
得成佛。是時念我四方神仙皆來讚言。是眞菩薩  
必早成佛。鷹語鵠言。終試如此不惜身命。是眞  
菩薩。卽說偈言

慈悲地中生

一切智樹牙

我曹當供養

不應施憂惱

毘首羯磨。語釋提桓因言。天主汝有神力。可令

此王身得平復。釋提桓因言。不須我也。此王自  
作誓願大心歡喜。不惜身命感發一切令求佛道。

帝釋語人王言。汝割肉辛苦心不惱沒耶。王言。

我心歡喜不惱不沒。帝釋言。誰當信汝心不沒  
者。是時菩薩作實誓願。我割肉血流不瞋不惱。

一心不悶以求佛道者。我身當卽平復如故。卽出  
語時身復如本。人天見之皆大悲喜歎未曾有。此

大菩薩必當作佛。我曹應當盡心供養。願令早成  
佛道。當念我等。是時釋提桓因毘首羯磨各還天  
上。如是等種種相。是檀波羅蜜滿。

き、鷹に与えた。鷹は王に語つていう。「王は、熱肉を我に与えるといつ  
ても、道理を用つて肉の軽重によつて鵠と等じくして、欺かれないようす  
べきである」と。王がいう。「<sup>はか</sup>(tula)を持つべきなさい」と。(その)  
肉で鵠に対<sup>(比)</sup>すると鵠の身は<sup>ますます</sup>転<sup>ますます</sup>重く、王の肉は<sup>ますます</sup>転<sup>ますます</sup>軽くなつた。王  
は人に二股を割かせ、また軽くなり不足した。次に両蹲<sup>(= 踏)</sup>・両臍<sup>(= 腹)</sup>・両  
乳・項<sup>(= 頸)</sup>と脊を割き、身肉の尽くを挙げた。鵠の身は猶<sup>お</sup>重く、王の肉  
は故<sup>ことき</sup>ら軽くなつた。この時、近臣内戚<sup>(みうち)</sup>は、帳幔を安施し、諸の看人を却けた。  
王は今、このような(状態で)ある。見てはならない。尸毘王<sup>(みるひと)</sup>がいう。「諸人  
を遮ぎつてはならない。入つて看させなさい」と。そして偈に説いていう。  
天人・阿修羅、一切来たりて我を觀よ。

大心の無上なる志をもて

仏道を成せんことを求む。

若し仏道を求むること有らば

當に此の大苦を忍ぶべし。

心を堅固にすること能わざれば

則ちその意を息むべし。

この時、菩薩は、血を手に塗り、称に攀じのぼろうとした。心を定め、  
身を尽くして鵠に對えようとしたのである。鷹がいう。「大王よ。この事  
は辦り難い。何を用つてこのようにされるのか。鵠を我に還されよ」と。  
王がいう。「鵠が来て我に歸したので、終<sup>(どうしても)</sup>汝には与えない。我是身を喪

うこと量りしれないが、物〔衆生〕に（何ら）益する」とはない。今、身でもつて仏道を求める易くしようと思う」と。手で称に攀じのぼつた。

その時、菩薩は、肉が尽き（果て）筋が断ち（切れ）、自制する」とができなかつた。上ろうとして墮ち、自ら心に責めていう。「汝は自ら堅く（誓う）べし。迷闇もだえを抱いてはならない。一切衆生は憂苦の大海上に墮ちている。汝一人が、誓いを立て一切（衆生）を（済）度しようとしている。どうして怠り悶えているのか。」の苦は甚だ少なく、地獄の苦は多い。この相に比べると十六分の一にも及ばない。我は今、智慧・精進・持戒・禪定を有つてゐるが、猶おこの苦に患つてゐる。まして地獄中の人で智慧の無い者は、（なおさらである）」と。

この時、菩薩は、一心にのぼらうとして、また更に称に攀がつた。人が扶うことを語つた。この時、菩薩は心に定めて悔い無く、諸天 (De-oa)・竜王 (Nāga)・阿修羅 (Asura)・鬼神 (Piśāca)・人民 (manuṣya)は皆な大いに讀えていう。「一 (羽) の小鳥の為に、」の通りである。」の事は希有である」と。すぐに大地が六種に振動(56)し、大海の波が揚がり、枯樹に華を生じた。天より香雨が降り名華が散じた。天女は歌つて「必ず成仏する」とができる」と讀えた。この時、我を念い、四方の神仙が皆な來たり讀じていう。「これは眞の菩薩である。必ず早に成仏する」と。鷹は鴿に語つていう。「終う試してみるとこのように身命を惜しまなかつた。これは眞の菩薩である」と。そこで偈を説いて言つた。

88c

慈悲の地中に、

一切智の樹牙<sup>(59)</sup>を生ず。

我曹、當に供養すべし、

憂惱を施すべからず。

毘首羯磨が、釈提桓因に語つていう。「天主よ。汝は神力を有つ。この王の身を平復<sup>(60)</sup>りにすべきである」と。釈提桓因がいう。「我に須めてはならない。この王は自ら誓願を作し、大いに心より歡喜し、身命を惜しまず、一切を感発し仏道を求められたのである」と。帝釈が人王に語つてい。う。「汝は肉を割き辛苦した。心は惱み没まないのか」と。王がいう。「我の心は歡喜し、惱みもしないし、没みもしない」と。帝釈がいう。「誰が汝の心が没まないと信する者がいよう」と。この時、菩薩は、実の誓願を作した。「我は肉を割き、血が流れても瞋らないし惱まない。一心に悶えず仏道を求める者である。我が身は、すぐに平復して故のようになる筈である」と。そう語り出すと、身は復た本のようになつた。人天は、これを見て皆な大いに悲喜して、「未曾有のことである。この大菩薩は、必ず作仏する。我曹は、全く心から供養すべきである。願わくは早く仏道を成せられ、當に我等を念わんことを」と。この時、釈提桓因と毘首羯磨は各々天上に還つた。このような種々の相を檀波羅蜜（円）満（といふ）。

問曰。尸羅波羅蜜云何満。答曰。不惜身命護持

問うていう。「尸羅波羅蜜はどのようにして満するのか」と。答えてい

淨戒。如須陀須摩王。以劫磨沙波陀大王故。乃至捨命不犯禁戒。昔有須陀須摩王。是王精進持戒常依實語。晨朝乘車將諸妓女入園遊戲。出城門時有一婆羅門來乞語王言。王是大福德人我身貧窮。當見愍念賜匈少多。王言諾。敬如來告當相布施須我出還。作此語已入園澡浴嬉戲。時有兩翅王名曰鹿足空中飛來。於妓女中捉王將去。譬如金翅鳥海中取龍。諸女啼哭號慟。一園驚城內外搔擾悲惶。鹿足負王騰躍虛空至所住止。置九十九諸王中。須陀須摩王涕零如雨。鹿足王語言。大刹利王汝何以啼如小兒。人生有死合會有離。須陀須摩王答言。我不畏死甚畏失信。我從生已來初不妄語。今日晨朝出門時有一婆羅門來從我乞。我時許言還當布施。不慮無常辜負彼心自招欺罪。是故啼耳鹿足王言。汝意欲爾畏此妄語。聽汝還去七日布施婆羅門訖便來還。若過七日不還我有兩翅力取汝不難。須陀須摩王得還本國恣意布施。立太子爲王。大會人民饌謝之言。我智不周物治不如法當見忠恕。如我今日身非已有正爾還去。舉國人民及諸親戚叩頭留之。願王

89 a

う。「身命を惜しまず、（清）淨戒（visuddhaśila）を護持した須陀須摩王（Sutasoma）のよう、劫磨沙波陀大王（Ka'māśapāda）のために（なす）のであり、ないし命を捨てても禁戒を犯さなかつた」と。

昔、須陀須摩王がいた。この王は、精進・持戒し、いつも（眞）実の語（satyavāda）に依っていた。早朝、車に乗り、諸くの妓女（gaṇikā）を将いて園（ārāma）に入り遊戯しようとした。城門を出る時、一人の婆羅門がいて近づき、王に語つていう。「王は、大福德（mahāprabhāva）の人であり、我が身は貧窮（人の）です。（どうか）愍みの念をもたれ、少多ばかりを（あた）え賜え」と。王がいふ。「よろしい。如来（Tathāgata）の告を敬い、相に布施しよう。私は、出還ることを須とう」と。この語を言い已つて園に入り、澡浴し嬉び戯れた。時に兩翅王（<sup>63</sup>）がいて名は鹿足（<sup>64</sup>）といふ。空中より飛来して、妓女の中から王を捉えて連れ去つた。譬えば、金翅鳥（garuḍa）が海中で竜（nāga）を取らえるようであつた。諸くの女は、啼哭号慟んで、一園（中）は驚き、城の内外は搔擾悲惶（<sup>65</sup>）た。鹿足は王を（背）負いて虚空を騰躍り、住止に至つて、九十九の諸王中の前に置いた。須陀須摩王の涕が零ち、雨のようであった。鹿足王が語つて言う。「大刹利王よ、汝はどうして小兒のように啼くのか。人は生まれたならば死があり、合会ば（いつか）離れるのである」と。須陀須摩王が答えていう。「私は死を畏れないが、信（用）が失くなることを畏れる。私は生まれてこのかた、初めから妄語（mṛṣāvāda）をついたことが

留意慈蔭此國。勿以鹿足鬼王爲慮也。當設鐵舍奇兵。鹿足雖神不畏之也。王言不得爾也。而說偈言

實語第一戒

實語昇天梯

實語小而大

妄語入地獄

我今守實語

寧棄身壽命

心無有悔恨

如是思惟已。王卽發去到鹿足王所。鹿足遙見歡喜而言。汝是實語人不失信要。一切人皆惜身命。汝從死得說還來赴信汝是大人。爾時須陀須摩王讚實語。實語是爲人非實語非人。如是種種讚實語呵妄語。龜足聞之信心清淨。語須陀須摩王言。汝好說此今相放捨汝旣得脫。九十九王亦布施汝。隨意各還本國。如是語已百王各得還去。如是等種種本生中相是爲尸羅波羅蜜滿。

ない。今日早朝、門を出る時、一(人)の婆羅門が、我につき従い乞うた。私は、その時に(乞いを)許してまた布施しようと言つた。無常(anitya)を慮えず、彼の心に辜負き、自ら(詐)欺の罪(apatti)を招いた。この理由で啼いているだけだ」と。鹿足王がいう。「汝の意はそのように妄語をつくことを畏れている。汝が還去していくことを聽す。七日して婆羅門に布施し訖つて、そこで還つて来い。若し七日を過ぎても還らなければ、我には両翅の力があるので汝を取らえることはたやすい」と。須陀須摩王は、本国に還ることができ、意の恣くまま布施した。太子を立て王となし、大いに人民と会い、このことを饑謝つていう。「我的智(慧)は物〔衆生〕に周らなかつた。治(政)は如法にならなかつた。ただしく(我が)忠と恕を見よ。我的今日の身は已にあるのではない。まさしくきつぱりと還つて去ろう」と。国を挙げて人民や諸くの親戚たちは、叩頭いて引き留めた。「願わくは王よ。意を留めて慈をもつてこの国を蔭け、鹿足鬼王(Rākṣasa)の慮いどうりになつてはいけない。鉄舎と奇兵を設けるべきである。鹿足は神でさえも畏れない」と。王は言う。「そういうことはできない」と。そして偈に説いて言う。

實語は第一の戒、

實語は天に昇る梯、

實語は小にして大、  
妄語は地獄に入る、

我れ今、実語を守り、  
寧ろ身の寿命を棄つるも、  
心に悔恨有ること無し。

このように思惟しあわつた。(須陀須摩) 王はすぐ發出け鹿足王のもと  
に到えつた。鹿足(王)は遙かに(須陀須摩王を)見て歓喜して、「汝は  
真(実)の語(を語る)人で、信の要めを失つていない。一切の人は皆、  
身命を惜むのに、汝は死から脱れることが得て、還つてきて信に赴いた。汝  
は大人(mahāpuruṣa)である」といつた。その時須陀須摩王は真(実)  
の語(satyavāda)を讀えて、「真(実)の語は人を為り、真(実)にあら  
ざる語(mṛṣāvāda)は人を為らない」といつた。」のうちに(王は)種々に  
真(実)の語を讀えて妄語を呵(けな)した。鹿足(王)はそのことを聞き信  
心清浄(sraddhāvśuddhi)となつた。須陀須摩王に語つて、「汝はよく  
このことをがたつた。今やわたしは放捨(ほうしゃ)そう。汝はもう脱することができ  
たのだ。九十九人の王もまた汝に布施するであろう。意のまゝにそれぞれ  
の本国に還れ」といつた。このように語りおえると、百人の王は各々還り  
去くことが出来た。」のような種々の本生(Jātaka)の中の相が尸羅(sila)  
波羅蜜を満させたというのだ。

問曰。羼提波羅蜜云何満。答曰。若人來罵撻捶  
割剝支解奪命心不起瞋。如羼提比丘。爲迦梨王

問うていう。「羼提(kṣāntipāramitā) 波羅密はどのように満(まつ)れるの  
か」と。答えていう。「若し人が來りて罵(のの)しり撻(たた)か、割剝(ひつせき)、支解(さげき)に

截其手足耳鼻心堅不動。問曰。毘梨耶波羅蜜云何滿。答曰。若有大心動力。如大施菩薩。爲一切故以此一身。誓抒大海令其乾盡定心不懈。亦如讚弗沙佛七日七夜翹一脚目不睂。問曰。禪波羅蜜云何滿。答曰。如一切外道禪定中得自在。

又如尚闍梨仙人坐禪時無出入息。鳥於螺髻中生子不動不搖。乃至鳥子飛去。問曰。般若波羅蜜云何滿。答曰。菩薩大心思惟分別。如劬嬪陀婆羅門大臣。分闍浮提大地作七分。若干大城小城聚落村民盡作七分。般若波羅蜜如是。是菩薩六波羅蜜滿。在迦葉佛所。作弟子。持淨戒行功德。生兜率天上。

し、命を奪つても心中に瞋ぶがりをおこれないとある。羼提比丘(66)が迦梨王(kali)によつてその手足耳鼻を截られて心が堅固(ācala)で動じなかつたようなものである。

問うていう。「毘梨耶(viryapāramitā)波羅密はどのようにして満れるやるのか」と。答えていう。「若し大心と勤力をもつて、大海を抒みそれを乾し尽せん(67)vat)菩薩が一切のためにこの一身をもつて、大海を抒みそれを乾し尽せん誓つて、心に定めて懈たらなかつたよう(にする)ことである。また、弗沙弗を讚えて七日七夜、一脚を翹げて目を睂かせなかつたようなものである」と。

問うていう。「禪波羅密(dhyānapāramitā)はどうのうにして満れるのか」と。答えていう。「一切の外道が禪定(dhyāna)のうちに自在(vasitā)をえて、又尚闍梨仙人(Śāṅkhyācārya)が坐禪の時に出入の息がなく、鳥が螺髻(sankha-sikhā)の中で子を生んでも動かさず搖さずして、鳥の子が(成長して)飛び去るようなものである。

問うていう。「般若波羅密(prajñāpāramitā)はどうして満れるのか」と。答えていう。「菩薩は大心で思惟し分別して、劬嬪陀(Govinda)波羅門の大臣(mahāmātya)が闍浮提の大地を分けて七分とし、若干の大城、小城、聚落、村民をすつかり七分した如くである。般若波羅密もこのようである。この菩薩は六波羅密を満し、迦葉仏の所にあって弟子となり淨戒を持し、功德を行じ、兜率天のもとに生まれたのである。

問曰。菩薩何以生兜率天上。而不在上生不在下生。是大有福德應自在生。答曰。有人言。因緣業熟應在是中生。復次下地中結使厚濁。上地中結使利。兜率天上結使不厚不利。智慧安隱故。復次不欲過佛出世時故。若於下地生命短壽終。時佛未出世。若於上地生命長壽未盡。復遇佛出時。兜率天壽與佛出時會故。復次佛常居中道故。兜率天於六天及梵之中。上三下三。於彼天下必生中國。中夜降神。中夜出迦毘羅婆國行中道。得阿耨多羅三藐三菩提。中道爲人說法。中夜入無餘涅槃。好中法故中天上生。如是菩薩兜率天上生竟。以四種觀人間。一者觀時二者觀土地三者觀種姓四者觀生處。云何觀時。時有八種佛出其中。第一人長壽八萬四千歲時。第二人壽七萬歲。第三人壽六萬歲。第四人壽五萬歲。第五人壽四萬歲。第六人壽三萬歲。第七人壽二萬歲。第八人壽一百餘歲。菩薩如是念。人壽百歲佛出時到。是名觀時。云何觀土地。諸佛常在中國生。多金銀寶物飲食豐美其土清淨。云何觀種

89c

問う。「菩薩はどうして生まれ、兜率天 (*Tuṣita*) に生まれ、(それより) 上に生まれるのでもなく、下に生まれるのでないのか。大いに福德があるのだから、きっと自在に生まれられる筈であるのに」と。答えていう。「ある人がいうのに、『因縁の業が(成)熟し、きっとそのうちに生まれるのだ』と。またつぎに、下の地では結使 (*samyojana*) がふかく濁つており、上の地では結使が利い。兜率天では結使がふかく利くもない。智慧もあり、安隱 (*yogakṣema*) やもあるからである。またつぎに、仏の出世の時 (*buddhaprādurbhāvaka*) を過ぎないとを望まないからである。若し下の地に生まれたならば、命が短かく寿命 (*ayus*) がつきようとするとき、仏はまだ出世されていない。若し上の地に生まれたならば、命は長く寿命がまだつきていないのに、も早や仏の出世の時が過ぎている。兜率天の寿命は仏の出 (世) の時と一致するからである。

またつぎに、仏は常に中道 (*madhyagati*) じゅねすから (兜率天にいるの) である。兜率天は六 (欲) 天 [因王天・二十三天・夜摩天・兜率天・樂變化天・他化自在天] *Kāmadhātu* 及び梵 (天) のなかで、上に三つ、下に三つある。かの天より下へ必ず中国 (*Madhyadeśa*) に生じ、中夜に神を降し、中夜に迦毘羅婆國を出て中道を行じ、阿耨多羅三藐三菩提 (*anuttarasamyaksambodhi*) を得て、中道で人に説法し、中夜に無余涅槃 (*mirupadhiśeṣanirvāṇa*) に入り、中法を好むから中天に上生ま

姓。佛生二種姓中。若刹利。若婆羅門。刹利種勢力大故。婆羅門種姓智慧大故。隨時所貴者。佛於中生。云何觀生處。何等母人能懷那羅延力菩薩。亦能自護淨戒。如是觀竟。唯中國迦毘羅婆淨飯王后。能懷菩薩。如是思惟已。於兜率天下。不失正慧入於母胎。

れるのだ。このようにして菩薩は兜率天に生まれおえて、四種に人間を觀る。一つには時 (kāla) を觀、二つには土地 (desa) を觀、三つには種姓 (kula) を觀、四つには(出) 生の処 (upapattisthāna) を觀るのである。どのようにして時を觀るのか。時には八種あり、仏はそれぞれに出世されるのだ。第一は人の長い寿が八万四千歳の時、第二は人の寿が七万歳、第三は人の寿が五万歳、第四は人の寿が五万歳、第五は人の寿が四万歳、第六は人の寿が三万歳、第七は人の寿が二万歳、第八が人の寿が一百余歳 (の時) である。菩薩はこのように念つた。「人の寿が百歳のときに、仏の出世の時が到るのだ」と。これが時を觀るというのである。どのようにして土地を觀るのか。諸仏は常に中国に生まれられる。金銀宝物が多く飲食が豊かでうまく、その土は清浄である。どのようにして種姓を觀るのか。仏は二つの種姓、若しくは婆羅門、若しくは刹利種に生まれられる。刹利 (帝) 利種の勢力は大きいからであり、婆羅門の種姓は知慧が大きいからである。時々の貴ばれるものに隨って、仏はそこに生まれられるのだ。どのようにして(出) 生の処を觀るのか。「何等な母人が那羅延 (Nārāyaṇa) のような力のある菩薩を懷 (妊) することができ、またよく自ら淨戒 (viśuddhasila) を護持することができるのか」と。このように觀じおわべ、「たゞ中國の迦毘羅婆〔城〕 (Kapilavastu) の淨飯王 (Suddhodana) の后だけがよく菩薩を懷妊することができるのだ」と。このように思惟しおわり、兜率天より下り、正慧を失わず、「后の」母の胎に入られた。

問曰。何以故。一切菩薩末後身從天上来。不從人中來。答曰。乘上道故。六道之中天道最上。復次天上下時種種瑞應未曾所有。若從人道。人道不能有此。復次人敬重天故。問曰。一切人以垢心有相續入母胎。一切邪慧相應。云何名菩薩正慧入母胎。答曰。有人言。有相續時一切衆生邪慧心入母胎。菩薩憶念不失故。名正慧入母胎。中陰中住則知中陰住。入胎時知入胎。歌羅羅時知住歌羅羅。受胎七日赤白  
精和合時也額浮陀<sub>(二)</sub>七日時如蟹胞狀也時知住額浮陀。伽那時知住伽那。三七日時如癡醉也五胞時知住五胞。出生時知出生。是中憶念不失。是名正慧入母胎。復次餘人在中陰住時。若男於母生欲染心。此女人與我從事。於父生瞋恚。若女於父生染欲心。此男子與我從事。於母生瞋恚。如是瞋恚心染欲心菩薩無此。菩薩先已了知是父是母。是父是母能長養我身。我依父母生身得阿耨多羅三藐三菩提。是淨心念父母。相續入胎。是名正慧入母胎。是菩薩滿十月正慧不失念。出胎行七步。發口言。是我末後身。乃至將示相師。汝觀

問うていう。「どうじやうわけで一切の菩薩の末後の身 (paścima-punar-bhava) は天上からおりて来て人中から来ないのか」と。答へていう。「(菩薩は) 上の道 (agragati) に乗つてくる。六道のうちで天道が最上である。また次に、天上から下る時は未だ種々の瑞應がともなつたことはない。若し人道に従えば、人道にはそのようないとはない。また次に人は天 (道) を敬重ぶからである。

問うていう。「一切の人は垢心 (samalacitta) があり、相続 (pratisam-dhi) して母の胎 (mātrkukṣi) に入るのだから、一切の邪慧が相応している。(それなのに) どうして菩薩が正慧をもつて母の胎に入るといふのか」と。答えていう。「ある人は、相続した時に一切の衆生は邪慧の心 (viparyastamati) をもつて母の胎に入るのだが、菩薩は憶念して失う」と (muśitā smṛtih) がないから正慧をもつて母の胎に入ると。中陰 (antarābhava) のうわに住まるならば中陰に住まる」とを知り、胎に入れる時は胎に入る」とを知り、歌羅羅<sub>(68)</sub> (kalala) のうわに住まる」とを知り、額浮陀<sub>(69)</sub> (arbuda) の精が和合する時<sub>(70)</sub>の時は歌羅羅に住まる」とを知り、額浮陀 (arbuda)<sub>(受胎して七日、赤白)</sub>の時は額浮陀に住まることを知り、伽那<sub>(71)</sub> (ghana) 受胎して七日の時、蟹の如き胞の状。の時に伽那に住まることを知り、五胞<sub>(71)</sub> (peśin) の時は五胞に住まる」とを知り、出生の時は出生する」とを知り、それぞれのときに憶念して失わない。これを正慧をもつて母

我子實有三十二大人相不。若有三十二相具足者。是應有二法。若在家當爲轉輪聖王。若出家當成佛。諸相師言。地天太子實有三十二大人相。若在家者當作轉輪王。若出家者當成佛。

の胎に入るというのである。また次に、余人は中陰にあって住まる時、もし(それが)男(pumām)ならば母(mātr)は欲染の心(rāgacitta)を生じて、この女人はわれと從事するとして、父(pitr)は瞋恚(pratigha)を生ずる。もし(それが)女(stri)ならば父に染欲(anunaya)の心を生じて、この男子はわれと從事するとして、母に瞋恚を生ずる。このような瞋恚の心、染欲の心は菩薩にはない。菩薩はれりにすでに了知しているのである。これは父これは母であり、この父母がよくわが身を長養だて、われは父母に依つて身体を生じ阿耨多羅三藐三菩提を得たのだ」と。この淨い心をもつて父母を念い、相続して胎に入るのである。これを正慧をもつて母の胎に入るというのである。

この菩薩は十ヶ月が満ち、正慧を失念わず、胎を出てて七歩あるき、口に発して、「これがわが末後の身である」といわれた。そこで乃至は、「父は」持れて、相師(lakṣaṇapratigrāhaka)と示せ、「汝はわが子を觀よ。ま」と三十二の大(mahāpuruṣa)の相(laksana)があるのか。若し三十二の相が具足しているならば、これは一つの法がある筈である。もし在家(grhasthā)にあるならば轉輪聖王となるだらうし、もし出家(pravrajita)するならば仏となるであらう」と。諸の相師は「地の天太子(kumāra)はまゝいふ三十二の大(大人)の相がある。もし在家にあるならば轉輪王となるであらうし、もし出家するならば仏となるであらう」と唱ひた。

王言。何等三十二相。相師答言。一者足下安平立相。足下一切著地間無所受。不容一針。二者足下二輪相千幅輶轂三事具足。自然成就不待人。諸天工師毘首羯磨不能化作如是妙相。問曰。何以故不能。答曰。是毘首羯磨。諸天工師不隱沒智慧。是輪相善業報。是天工師生報得智慧。是輪相行善根智慧得。是毘首羯磨一世得。是智慧。是輪相從無量劫智慧生。以是故毘首羯磨不能化作。何況餘工師。三者長指相。指纖長端直。次第庸好指節參差。四者足跟廣平相。五者手足指縵網相。如鷹王張指則現不張則不現。六者手足柔軟相。如細劫波毳勝身分。七者足趺高滿相。以足蹈地不廣不狹。足下色如赤蓮華。足指間網及足邊色如眞珊瑚。指爪如淨赤銅。足趺上眞金色。足趺上毛青毘琉璃色。其足嚴好。譬如雜寶展種種莊飾。八者伊泥延脣相。如伊泥延鹿脣隨次臍織。九者正立手摩膝相。不俯不仰以掌摩膝。十者陰藏相。譬如調善象寶馬寶。問曰。若菩薩得阿耨多羅三藐三菩提。時諸弟子何因緣見陰藏相。答曰。爲度衆人決衆疑故。

王は「何等が三十二相なのか」といった。相師は答え、「一つには足下安平(supratiṣṭhitapādatalah)で立っている相である。足下の全面が地に著いて間をいれる余地がない。一針もはいらぬ。一一には足下の一輪の相である千幅と輶と轂である。(ハ)の三つの事が具足して自然に成就していく人工を待たない。諸天の工師である毘首羯磨(Viśvakarman)もハのような妙な相を作り出す」とができない」と言った。

問うていった。「どうゆうわけでできないのか」と。答えていう。「ハの毘首羯磨という諸天の工師は隠没なる」とのない智慧をもつてゐるが、この(菩薩の)輪相は善業の報い(kuśalakarmavipāka)によるものである。ハの(諸)天の工師は生報で得る智慧であるが、この輪相は善根(kuśalamūla)を行じた智慧で得たものである。この毘首羯磨は一世のうちでの智慧をうるのであるが、この輪相は無量劫からの智慧より生じたものである。そのようなわけで毘首羯磨も化作すことが出来ない。いわんやほかの工師には出来ない。三つには長い指の相(dirghāṅguli)である。指が纖くて長く端直で、次第に膚好になつて、指の節に參差がある。四つには足の跟が広く平らな相(āyatapādapārṣṇi)である。鷹王が指を張げるとすぐ現われ、わめめるとすぐみえなくなるものである。六つには手足の指に縵網がある相(jālāṅgulihastapāda)である。鷹王が指を張げるとすぐ現われ、わめめるとすぐみえなくなるものである。六つには手足が柔軟な相(mṛḍutaruṇapāṇipāda)である。細い劫波毳(=兜羅綿)のようで、ほかの身分(anga)より勝れてゐる。七つには足の趺(=跗)が

示陰藏相。復有人言。佛化作馬寶象寶示諸弟子言。我陰藏相亦如是。十一者身廣長等相。如尼拘盧陀樹。菩薩身齊爲中西邊量等。十二者毛上向相。身有諸毛生。皆上向而釋。十三者一孔一毛生相。毛不亂青瑠璃色。毛右靡上向。十四者金色相。問曰。何等金色。答曰。若鐵在金邊則不現。今現在金比佛在時金則不現。佛在時金比闍浮那金則不現。闍浮那金比大海中轉輪聖王道中金沙則不現。金沙比金山則不現。金山比須彌山則不現。須彌山金比三十三諸天瓔珞金則不現。焰摩天金比兜率陀天金則不現。兜率陀天金比化自在天金則不現。化自在天金比他化自在天金則不現。他化自在天金比菩薩身色則不現。如是色是名金色相。十五者丈光相。四邊皆有一丈光佛在是光中端嚴第一。如諸天諸王寶光明淨。

十六者經薄皮相。塵土不著身。如蓮華葉不受壓水。若菩薩在乾土山中經行。土不著足。隨藍風來吹破土山。令散爲塵乃至一塵不著佛身。

高くて充滿して<sup>じゅうじゅう</sup>いる相 (utsaṅgacarana) である。足で大地を踏んで広か<sup>ひろ</sup>いす狭まからず、足のうしの色は赤い蓮華 (padma) のようで、足の指の間の網と足の辺りの色は眞の珊瑚のようであり、指の爪は淨い赤銅であり、足の趺のあたりは眞の金色 (suvarṇavarpa) であり、足の趺のあたりの毛は青で、毘琉璃 (vaiḍūrya) の色のようである。その足は嚴好で、ちょうど雜宝のついた履が種々に莊飾であるようである。八つには伊泥延<sup>(=鹿)</sup>の膊 (aineyajaṅgha) の相である。伊泥延鹿のよくな膊が隨次に膚<sup>なめらかにほそ</sup>纖<sup>くま</sup>くなつてこねようなぬのである。九つには正しく立て手が膝に摩わる相 (sthitānavanatājānupralam-babāhu) である。俯<sup>ふく</sup>れば仰かずして掌のひらで膝が摩<sup>む</sup>れる<sup>ほ</sup>のである。十には陰藏の相 (koṣagatavasti-guhyā) である。ちゅうじゅく調教された象宝 (hatthi-ratana) や馬宝のようである。

問うていう。「もし菩薩が阿耨多羅三藐三菩提を得た時、諸の弟子はどうんな因縁で陰藏の相を見たのか。」答えていた。「衆の人を度い衆の疑いをはらすために陰藏の相を示した」と。またある人がいた。仏は馬宝、象宝を作化して諸の弟子に示して、「わが陰藏の相もまたこの通りである」と。十一には、身の広、長が等しい相 (parimandalā) である。尼拘盧陀の樹のようで、菩薩の身が（たて、よし）齊<sup>そなへ</sup>て、中の四辺の量が等じなのである。十二には毛が上を向いて<sup>やが</sup>る相 (urdhvāgrama) である。身に諸の毛が生えて、みな上を向いて釋らかである。十三には一一の

孔には一本の毛が生えてゐる相 (ekaikaroma) である。毛は乱れておらず、青く琉璃色である。毛は右に塵びいて上を向いてゐる。十四は金色の相 (suvarnavarṇa) である。語りていう。「何等な金色なのか」と。答えていた。「もし鐵 (ayas) が金 (suvarṇa) の辺りに在ると現えない。今現在の金も仏のおしゃ時<sup>c</sup>の金に比べると現えない。仏のおします時の金も闇浮那 (jambūnada) の金に比べると現えない。闇浮那の金も大海中の転輪聖王 (Cakravartin) の (おもむ) 道の中の金沙に比べると現えない。(やの) 金沙も金山と比べると現えない。金山も須弥 (Sumeru) 山と比べると現えない。須弥山の金も十二の諸天の瓔珞 (keyūra) の金に比べると現えない。三十二の諸天の瓔珞の金も焰摩天の金と比べると現えない。焰摩天 (Yama) の金も兜率天 (Tuṣita) の金と比べると現えない。兜率天の金も化自在天 (Nirmāṇarati) の金と比べると現えない。化自在天の金も他化自在天 (Paranirmitavaśavartin) の天と比べると現えない。他化自在天の金も菩薩の身の色と比べると現えない。」のような色が金色の相というのである。

十五には丈光の相 (vyāmaprabha) である。四邊<sup>a</sup>はみな一丈の光につゝまれ仏がその光の中にましまして<sup>b</sup>端嚴<sup>c</sup>である」とが第一である。諸天・諸王の光が明かで淨いがであるよくなものである。

十六には細薄皮<sup>a</sup>の相 (stūkṣmacchavi) である。塵や土が身体に附着せず、蓮華 (utpalā) の葉が塵や水を受けていたいようなものである。菩薩

が乾いた土の山の中を經行 (cañhramañ) して、土が足に附著せず、藍風 (balāvān) <sup>(73)</sup> がふいて来るまゝに土の山を吹かへばしれ、塵 (dūrī) などなり、乃至には一塵も仏の身体に附著しないようなものである。

十七者七處隆満相。兩手兩足兩肩項中七處。皆隆滿端正色淨勝餘身體。十八者兩腋下隆満相。不高不深。十九者上身如師子相。二十者大直身相。於一切人中身最大而直。二十一者肩圓好相。一切治肩無如是者。二十二者四十齒相。不多不少餘人三十二齒。身三百餘骨。頭骨有九。菩薩四十齒。頭有一骨。菩薩齒骨多頭骨少。餘人齒骨少頭骨多。以是故異於餘人身。二十三者齒齊相。諸齒等無龜無細不出不入。齒密相人不知者謂爲一齒。齒間不容一毫。二十四者牙白相。乃至勝雪山王光。二十五者師子頰相。如師子獸中王平廣頰。二十六者味中得上味相。有人言。佛以食著口中。是一切食皆作最上味。何以故。是一切食中有最上味因故。無是相人不能發其因故。不得最上味。復有人言。若菩薩舉食著口中。是時咽喉邊兩處。流注甘露和合諸味。是

十七には七カ処の肉 (flesh) <sup>(74)</sup> が隆満している相 (sapotsada) である。両手、両足、両肩、項のまん中の七カ処はみな隆満して端正しており、色つやがほかの人の身体にまさつて清浄なのである。

十八には両腋下が隆満している相 (cintāntarāmsa) である。ですぎめせず、ひつこみすぎめしていない。

十九には上半身が師子のような相 (śinphapūrvārdhakāya) である。

二十には大きく直 (staight) とした身体の相 (brhadṛjukāya) である。一切の人の中で身体が最も大きく直 (staight) としている。

二十一には肩が圓 (round) くて好 (good) な相 (susamvṛttaskandha) であり、一切の治 (treatment) した肩でそのようなものはない。

二十二には四十枚の齒がある相 (catvārimśaddanta) である。それ以上でもなければそれ以下でもない。ほかの人は二十一枚の齒、身体には三百余個の骨、頭には九個の骨がある。菩薩は四十枚の齒、頭には一個の骨がある。菩薩は齒の骨が多く、頭の骨が少い。ほかの人は齒の骨が少く、頭の骨が多い。そのようなことからほかの人の身体と異なるのである。

二十三には齒が齊 (齐) つてゐる相 (aviraladanta) である。諸の等が等間か

味清淨故。名味中得上味。二十七者大舌相。是菩薩大舌從口中出覆一切面分。乃至髮際。若還入口口亦不滿。二十八者梵聲相。如梵天王五種聲從口出。其一深如雷。二清徹遠聞聞者悅樂。三入心敬愛。四諦了易解五聽者無厭。菩薩音聲亦如是。五種聲從口中出。迦陵毘迦聲相。如迦陵毘迦鳥聲可愛。鼓聲相。如大鼓音深遠。二十九者眞青眼相。如好青蓮華。三十者牛眼睫相。如牛王眼睫長好不亂。三十一者頂髻相。菩薩有骨髻如拳等在頂上。三十二者白毛相。白毛眉間生不高不下。白淨右旋舒長五尺。相師言。地天太子三十二大人相如是。菩薩具有此相。

菩薩大舌從口中出覆一切面分。乃至髮際。若還入口口亦不滿。二十八者梵聲相。如梵天王五種聲從口出。其一深如雷。二清徹遠聞聞者悅樂。三入心敬愛。四諦了易解五聽者無厭。菩薩音聲亦如是。五種聲從口中出。迦陵毘迦聲相。如迦

くで、龜くもなく細かくもなく、ぐりもせすらえもせす、歯がびっしりとつまっている相である。(普通の)人は知らないから、一枚の歯でてきておるとおもう。歯の間に一毫もはいらない。

二十四には牙が白い相 (kukladanta) であり、乃至には雪山王の光にもまれていて。

二十五には師子の頬の相 (simhahanu) である。獸の中の王である師子の平らで広い頬と同じである。

二十六には(仏の口)味の中でも上味を得る相 (rasarasāgraprāpta) である。ある人は「仏は食べ物 (āhāra) も口 (mukha) の中に入れられると、その一切の食べ物はみな最上の味 (rasāgra) となる。どうゆうわけかといえば、その一切の食べ物の中に最上の味となる因があるからである。このような相のない人はその因を発することが出来ないから、最上の味が得られない」などとある人がいる。「菩薩が食べ物を挙って口の中にいれると、その時に咽喉の辺りの両邊から甘露 (amṛta) を流し注ぎ、諸の味を和合する。この味が清淨だから、味の中でも上味を得る」というのである。

二十七には大舌の相 (prabhūtajihva) である。この菩薩の大舌は口の中から出て、一切の面分を覆つて、乃至には髪のはえ際にとどく。もしまた口に入れてお口もまたいじぱしゃといふとしない。

二十八には梵声の相 (brahmaśvara) である。梵天王が五つの声を口か

91 a

ら出すようなものである。その第一は雷鳴のように基大である、第二は清く透徹して遠くまで聞いえ、聞くものが悦び楽しむ。第三には心に入みて敬愛する、第四には諦了して理解し易い、第五に聽くものは厭うことがない。菩薩の音声もまたこの通りである。五種の声が口の中から出ると、迦陵毘迦 (kalavinka) の鼓の相があつて、迦陵毘迦鳥の声の愛らしいようである。(また) 鼓の音相があり、それは大鼓の音の深遠であるようである。

二十九には真青の眼の相 (abhinilanetra) であり、好い青蓮華 (nilotpala) のようである。

三〇には牛の眼の睫の相 (gopakṣmanetra) であり、牛王の眼の睫が長く好で乱れることがないようだとのである。

三十一には頂髻の相 (uṣṇiśaśirṣa) である。菩薩は骨い髪髷があつて、拳などが頂の上にあるようである。

三十二には白毛の相 (ūrṇā) である。白い毛が眉間に生え高くもなく低くもなくて、白く清浄で右まわりに長く五尺舒てている。相師はいう。「地区的天太子の三十二大人の相は」の通りである。菩薩は具毛にはこれらのがある。

問曰。轉輪聖王有三十二相。菩薩亦有三十二相。有何差別。答曰。菩薩相者有七事勝轉輪聖

問うていう。「轉輪聖王 (Cakravartin) には三十二相があり、菩薩にもまた三十二相がある。どんな差別があるのか」と。答えていう。「菩薩の

王相。菩薩相者。一淨好。二分明。三不失處。四具足。五深入。六隨智慧行不隨世間。七隨遠離。轉輪聖王相不爾。問曰。云何名相。答曰。易知故名相。如水異火以相故知。問曰。菩薩何以故三十二相不多不少。答曰。有人言。佛以三十二相莊嚴身者。端正不亂故。若少者身不端正。若多者佛身相亂。是三十二相端正不亂不可益不可減。猶如佛法不可增不可減。身相亦如是。問曰。菩薩何以故以相嚴身。答曰。有人見佛身相心得信淨。以是故以相嚴身。復次諸佛以一切事勝故。身色威力種姓家屬智慧禪定解脫衆事皆勝。若佛不莊嚴身相是事便少。復次有人言。阿耨多羅三藐三菩提住是身中若身相不嚴。阿耨多羅三藐三菩提不住此身中。譬如人欲娶豪貴家女。其女遣使語彼人言。若欲娶我者。當先莊嚴房室除却污穢塗治香熏安施床榻被褥綻幃帳幄慢幡蓋華香必令嚴飾然後我當到汝舍。阿耨多羅三藐三菩提亦復如是。遣智慧使未來世中到菩薩所言。若欲得我修相好以自莊嚴。然後我當住汝身中。若不莊嚴身者我不住也。以是故菩薩

相は七つの事があつて、轉輪聖王の相より勝れている。菩薩の相には、一つには清淨で立派なこと、二つには分明<sup>はつきり</sup>していること、三つには処を失わないこと、四つには具足していること、五つには深いこと、六には智慧に随つて行じ世間に隨わないこと、七つには遠離に随つていること、である。轉輪聖王の相(lakṣaṇa)は「そうでない」と。問うていう。「どういうわけでも相というのか」と。答えていう。「容易に知られるから相といったのである。ちょうど水が火とちがうのは、その相から知られるようなものである」と。問うていう。「菩薩はどういうわけで三十二相であり、それよりも多くも少くもないのか」と。答えていう。「ある人がいた。『仏は三十二相で身体を莊嚴しているのは端正って乱れることがないからである。もし(それより)少くなければ身体は端正でない。もし多ければ仏の身体はあい乱れる。』」の三十二相は端正で乱れず、(それより)益しも減りもしれない。あたかも仏法(buddhadharma)が増しも減りもしないのと同じである。(仏の)身体の相もまたその通りである」と。

問うていう。「菩薩はどういうわけで、相をもつて身体を莊嚴されるのか」と。答えていう。「ある人が仏の身体の相を見て、心のなかで信清淨(sraddhāviśuddhi)を得た。そのようなわけで相をもつて身体を莊嚴しているのだ」と。

またついで諸仏は一切の事が勝れているので、身色(kāyarūpa)・威力(prabhava)・種姓(gotra)・家屬(jāti)・智慧(prajñā)・禪定(dhyāna)。

修三十二相。自莊嚴身爲得阿耨多羅三藐三菩提。故。是時菩薩漸漸長大。見老病死苦厭患心生。夜半出家六年苦行。食難陀婆羅門女益身十六功德石蜜乳糜。食竟。菩提樹下破萬八千億鬼兵魔衆已。得阿耨多羅三藐三菩提。

解脱(vimukti)の衆の事がみな勝れているのである。もし仏が身相を莊嚴されなかつたならば、それらのことはつまり少るのである。またついでいる人がいう、「阿耨多羅三藐三菩提はこの身体のうちに住するものである。もし身相を嚴かでなかつたならば阿耨多羅三藐三菩提はこの身体のうちに住しない。たとえば、人が豪貴の家の女を聚ろうするようなものである。その女が使いをつかわして、その人に語つていう、「もしわたくしを聚ろうとするならば、まず房室<sup>へや</sup>を莊嚴して汚穢なものを除却<sup>のぞ</sup>き、香熏を塗治けて床榻<sup>とこ</sup>を安施え、被褥<sup>しふら</sup>・綻<sup>ふとん</sup>・帷帳<sup>ぶんぢよ</sup>・幄慢<sup>てんまく</sup>・幡蓋<sup>はたとんがい</sup>・華香<sup>はなこう</sup>できつと嚴飾りつけねばなりません。その後でわたくしはあなたの舍に到りましょう」と。阿耨多羅三藐三菩提もまた又これと同じである。智慧の使いをつかわして、未来世の菩薩の所にいかせていう。「もしわたくしを得たいならば、まず相好(lakṣaṇa-anuvyañjana)（三十二相と八十種好）を修え、自らを莊嚴せよ。その後でわたしはあなたの身体の中に住するであろう。もし（汝が）身体を莊嚴しなかつたならば、わたしは（汝の身体に）住しないであろう」と。このようなわけで菩薩は三十二相を修めて自ら身体を莊嚴するのである。阿耨多羅三藐三菩提を得るためである。

この時、菩薩はだんだん長大して老病死の苦を見て厭患心(nirveda)が生じ、夜半に家を出て六年間苦行(duskaracaryā)して、難陀(Nanda)という婆羅門の女の身体に益だつ十六の功德がある石蜜<sup>(76)</sup>と乳糜(rāyasa)を食べおわって、菩提樹(bodhvirkṣa)の下で一万八千億の鬼兵と魔衆と

を破りおわって、阿耨多羅三藐三菩提を得た。

問曰。得何功德故名爲佛。答曰。得盡智無生智故。名爲佛。復次有人言。得佛十力四無所畏十八不共法三達無礙三意止。一者受教敬重佛無喜。二者不受教不敬重佛無憂。三者敬重不敬重心無異。大慈大悲三十七道品一切諸法總相別相悉知故故名爲佛。問曰。何以故。未得佛道名爲菩薩。得佛道不名爲菩薩。答曰。未得佛道心愛著。求欲取阿耨多羅三藐三菩提。以是故名爲菩薩。已成佛道更得佛種種異大功德故。更有異名名爲佛。譬如王子未作王名爲王子。已作王不復名王子。旣爲王雖是王子不名王子。菩薩亦如是。未得佛道名爲菩薩。已得佛道名爲佛。聲聞法中摩訶迦旃延尼子弟輩。說菩薩相義如是。

摩訶衍人言。是迦旃延尼子弟輩。是生死人。不誦不讀摩訶衍經。非大菩薩。不知諸法實相。自以利根智慧。於佛法中作論議。諸結使智定根等於中作義。尙處處有失。何況欲作菩薩論議。譬如少力人跳小渠尙不能過。何況大河。於大河

91c 問うていう。「どこのよろんな功德 (guna) を得て、いるから仏といふのが」と。答えていう。「尽智 (kṣayajñāna) と無生智 (anutpādajñāna) とを  
得て、いるから仏である」と。また、ある人はいう。「仏は十力 (daśabala-  
ni) と四無所畏 (catvāriivaiśaradīyāni) と十八不共法 (aṣṭādaśāvenīka-  
buddhadharmāḥ) を得て、こゝで、三達無礙 (tisro vidyāḥ) だあって三意  
が止まっている。(三意止 (smṛtyupasthāna) とせ) 一には(弟子が) 教  
えを受けて敬い重んじる」とがなくとも仏が喜び給う」とがない。二には  
教えを受けないで敬い重んじる」とがなくとも仏が憂い給うことがない。  
三には敬い重んじても敬い重んじなくても心に異なることがない。」大慈  
大悲であつて、三十七道品 (saptatriṁśadkaruṇā) と一切諸法の總相と  
別相 (sarvadharmasvasāmānya-lakṣaṇajñāna) とを悉く知つておられ  
るから仏といふ」と。

問うていう。「どこのよろくなわけでも未だ仏道を得て、いないのを菩薩といい、  
仏道を得て、いるのを菩薩といわぬのか」と。答えていう。「未だ仏道を得  
ていなければ、心が愛着して阿耨多羅三藐三菩提を取らうとする。」  
うわけで菩薩というのである。すでに仏道を成(就)しておれば、さらに  
仏の種々の異なつた大功德を得て、いるから、さらに異名として仏といふの  
である。譬えば、王子が未だ王と作らなかつたら王子といふ、すでに王と

中則知沒失。

作つたときはもはや王子といわない。すでに王であるのだから、これは王子であつても王子といわぬようなものである。菩薩もこれと同様である。まだ仏道を得ていないから菩薩といい、すでに仏道を得てあるから仏というのである。声聞 (śrāvaka) の法の中の迦旃延尼尼子 (Mahākātyāyaniputra) の弟子たちの菩薩の相を説く「義は」れと同様である。摩訶衍の人はいう。「」の迦旃延尼子の弟子たちは生死 (saṃsāra) の人である。摩訶衍經を誦える」ともなく、読む」とではないから大菩薩ではない。諸法の実相 (satyalakṣaṇa) を知らず、自らの利根 (tikṣṇendriya) の智でもつて仏法の論議 (upadeśa) を作し、諸の結使 (saṃyojana) に結びついた智 (恵) と定 (禪) と根などによつての仏法の中で「義をつける。やはり處々に「過」失がある。どうして菩薩についての論議をしよう」というのか。譬えば力少ない人などは小さな渠ですら跳えることはできない。どうして大河を「過える」とができないか。大河の中でだらまや没失む」とを知るだけである。

問曰。云何失。答曰。如上三阿僧祇劫過名爲菩薩。三阿僧祇中頭目髓腦布施心無有悔。是阿羅漢辟支佛所不能及。如昔菩薩爲大薩陀婆。渡大海水惡風壞船。語衆賈人捉我頭髮手足。當渡汝等。衆人捉已以刀自殺。大海水法不停死屍。卽

問うていう。「どうして「過」失があるのか」と。答えていう。「上に三阿僧祇 (asamkhyeya) の劫を過ぎるのを菩薩と名づける」といった。三阿僧祇の中には頭や目・髓脳を布施しても心に悔いることがない。これは阿羅漢や辟支仏ができる」とではない。昔の菩薩が、大薩陀婆であった時、大海を渡るときに悪風が船を壊した。多くの賈人たちに語つていつた。

時疾風吹至岸邊。大慈如是。而言非者誰。是菩薩第二阿僧祇劫行滿。未入第三阿僧祇。時於燃燈佛所受記爲佛。卽時上昇虛空見十方佛。於虛空中立讚然燈佛。然燈佛言。汝過一阿僧祇劫。當得作佛名釋迦牟尼。得記如是。而言爾時未是菩薩豈非大失。迦旃延尼子弟子輩言。三阿僧祇劫中未有佛相。亦無種佛相因緣。云何當知。是菩薩一切法先有相。然後可知其實。若無相則不知。摩訶衍人言。受記爲佛。上昇虛空見十方佛。此非大相耶。爲佛所記當得作佛。得作佛者此是大相。捨此大相而取三十二相。三十二相轉輪聖王亦有。諸天魔王亦能化作此相。難陀提婆達等皆有三十相。婆跋隸婆羅門有三相。摩訶迦葉婦有金色相。乃至今世人亦各各有一相二相。若青眼長臂上身如師子。如是等種種或多或少。汝何以重此相。何經中言三阿僧祇劫中菩薩不種相因緣。如難陀澡浴婢婆戶佛願得清淨端正。於一辟支佛塔青黛塗壁。作辟支佛像因而作願。願我恒得金色身相。又作迦葉佛塔中級。以此三福因緣。世世受樂處處所生恒得端嚴。是福之餘。

「我が頭髪や手足を捉えよ。汝たちを渡してやろう」と。かれらが皆捉え終ると自分は刀で殺んだ。大海の水の法として死屍(kunapa)を停めるところなく、おりしもただちに疾風が吹いてきて岸の辺りに(大薩陀婆と賈人とを)至せた。(菩薩の)大慈(mahākāruṇika)とはこのようなものである。これに非を言えるものは誰か。」の菩薩は第二阿僧祇の劫における行が満ちて、未だ第三阿僧祇<sup>(79)</sup>に入つていなかつた時、然燈仏の所で仏となる記(vyākaraṇa)を受けた。ただちに虚空に上昇して十方の仏(dasadigbuddha)を見て虚空(ākāśa)に立つて然燈仏(Dipamīkara)を讃えた。然燈仏はいった。「汝は一阿僧祇の劫を過ぎてきつと釈迦牟尼といふ仏となる」と。記を得るといふことはこのようなものである。にもかかわらず、「その時はまだ菩薩ではない」などという。(これは)大きな(過)失そのものである。迦旃延尼子の弟子の輩はいう。「三阿僧祇の劫を経ない中にはまだ仏の相はない。また仏の相となる因縁の種もない。どうしてこれが菩薩であると知ることができようか。菩薩は、一切の法は先ず相を有つていて、その後でその実体を知ることができるのだ。もし相が無かつたならば知ることがない」と。摩訶衍の人はいう。「記を受けて仏となり、虚空に上昇して十方の仏を見る。これは大相でないのか。仏に記せられてはじめて仏となることができるのです。仏となることができたならばこれは大相である。この大相を捨てて三十二相を取る。三十二相は転輪聖王にもある。諸天(deva)や魔王(Mahārāja)もまたよくこの相を化作す。

生迦毘羅婆釋種中。爲佛弟子得三十大人相。清淨端正。出家得阿羅漢道。佛說於五百弟子中。難陀比丘端正第一。此相易得。云何言於九十一劫中種餘一生中得。是爲大失。汝言初阿僧祇劫中。不知當作佛不作佛。二阿僧祇劫中知當作佛。不自稱說。三阿僧祇劫中知得作佛能爲人說。佛何處說是語。何經中有是語。若聲聞法三藏中說。若摩訶衍中說。迦旃延尼子弟輩言。雖佛口三藏中不說。義理應爾。阿毘曇鞞婆沙菩薩品中。如是說。答曰。摩訶衍中說初發心。是時知我當作佛。如阿遮羅菩薩。於長手佛邊。初發心時乃至金剛座處成佛道。於其中間顛倒不淨心不生。如首楞嚴三昧中四種菩薩。四種受記。有未發心而授記。有適發心而授記。有於前授記他人盡知己身不知。有於前授記他人已身盡知。汝云何言於二阿僧祇劫知受記而不自稱說。復次佛言無量阿僧祇劫作功德欲度衆生何以故言三阿僧祇劫。三阿僧祇劫有量有限。

難陀 (Nanda) や提婆達 (Devadatta) (多) などもみな三十一相がある。婆跋隸 (Bāvāri) 婆羅門は三相がある。摩訶迦葉 (Mahākāśyapa) の婦は金色の相がある。ついには、今の世の人の人もまたそれぞれ一相あるいは二相がある。もしくは青い眼のものや長い臂のものや上身の師子などの種々のものがあつて、あるいは多くあるいは少ない。汝はどうしてこの相を重んずるのか。何という經に『三阿僧祇の劫の中に菩薩は相の因縁の種がない』といつているのか。たとえば、難陀が鞞婆尸仏 (Vipasyin) を澡浴したことなどは清淨・端正になることを願つたものである。辟支仏塔において、青黛 (gāndhārī) を壁に塗り辟支仏の像を作いて、それによつて、『願わくは我れつねに金色の身相を得よう』という願をなしえ。また迦葉仏塔の中の級を作つた。この三つの福 (徳) の因縁によつて世々に樂を受けて、处处に生まれてつねに端嚴 (dānṣe) であることを得たのである。この福の余 (徳) によって迦毗羅婆 (Kapilavastu) の釈迦 (Sakya) 族に生まれて仏弟子となり、三十の大人の相を得て、清淨・端正であつて、出家して阿羅漢道を得たのである。仏はいつておられる。『五百の弟子の中で難陀比丘は端正第一である』と。この相は得易い。どうして九十一大劫の中で植えて、(その) 余の一生 (jaman) の中で相を得るというのか。これを大きい (過) 失というのである。汝はいう。『初めの阿僧祇の劫の中では仏となるはずが仏とならないかも知らない。二阿僧祇の劫の中では仏となるはずだと知るけれども自ら称 (と) 説えることはしない。三阿僧祇の劫の中で仏となり得る

と知つて、よく人のために説くのである』と。仏はどこの語を説かれているのか。何の經の中にこの語があるのか。あるいは聲聞法の三藏の中に説かれているのか。あるいは摩訶衍の中に説かれているのか。迦旃延尼子の弟子の輩はいつている。「仏は口から三藏の中で説かれてなくとも、義理はまつたくこの通りである。阿毘曇毘婆沙（體）（Abhidharma-vibha-ṣā）の菩薩品の中にも「やうに説いておられる」と。答えてこう。「摩訶衍の中に初發心（prathamacittotpāda）を説いていん。」の時に我はきっと仏となると知る。阿遮羅（Acalā）菩薩が長手仏（Dirghapāṇi）の辺りにおいて初めて發心した時、金剛座處（vajrāśana）にて仏道を成（就）するまでの中間に顛倒（viparyāsa）と不淨心（avīsuddhacitta）が生まれる」とがなかつたよくなむのである。首楞嚴三昧（Śūraṅgamasa-mādhi）（總）の中の四種の菩薩が四種に記を受けているとおりである。（いまづ）まだ發心していらないのに記を授かることがある。適（あたま）に發心したときに記を授ける」とがある。前に記を受けたのを他人はすべて知つて自分は知らないことがある。前に授記したのを他人も自分もすべて知つていることがある。汝はどうして「一阿僧祇劫において記を受けたのを知つてゐるが自ら称説かないといふのが」と。またつぎに、仏は「無量阿僧祇劫の中で功德を作して衆生を度おうとする」といつておられる。どういうわけで三阿僧祇劫というのか。三阿僧祇劫には（分）量があり限（度）がある。

問曰。摩訶衍中雖有此語我亦不能都信。答曰。是爲大失。是佛真法佛口所說。汝無反。復汝從摩訶衍中出生。云何言我不能都信。復次摩訶衍論議此中應廣說。復次說是三十二相業因緣。欲界中種非色無色界中種。無色界中以無身無色。是三十二相是身榮嚴故。於中不得種可爾。色界中何以不得種。色界中大有諸梵王。常請佛初轉法輪。是智慧清淨能求佛道。何以言不得種三十二相因緣。又言人中得種非餘道。如娑伽度龍王十住菩薩。阿那婆達多龍王七住菩薩。羅睺阿修羅王亦是大菩薩。復何以言餘道不得種三十二相因緣。汝言人中閻浮提種。欝怛羅曰不可種。有義彼中人無吾我。著樂不利根故。劬陀尼弗婆提二處。福德智慧壽命勝閻浮提。何以不得種。復次汝言一思種一相是心禪指頃六十生滅。一心中不住不能分別。云何能種大人相。此大人相不應了心得種。以是故多思和合能種一相。如重物一人不能擔。必須多人力。如是種相。要得大心多思和合爾乃得種。以是故名百福相。百大心思種

問うていう。「摩訶衍（經）の中にこの語があるといつても、我れはすべてを信ずる」とはできない」と。

答えていう。「これが大きな（過）失である。これは仏の眞の法であつて、仏の口から説かれたところである。汝は反<sup>そむ</sup>いてはいけない。また、汝は摩訶衍の中より出生<sup>うま</sup>されたものである。どうして我はすべてを信ずる」とができないなどというのか。」またつぎに、摩訶衍の論議は「の中「摩訶衍経」に広く説いている。またつぎに、「この三十二相の業の因縁は欲界（kāmadhātu）の中に種えるのであって、色（界）（rūpadhātu）と無色界（ārupyadhātu）の中に種えるのではない」と説いている。無色界には身（kāya）もなく色（rūpa）もないのであるから、「この三十二相はまれしく身の莊嚴である理由がない（無色界）の中に種える」とができない」とは当然である。（では）色界の中にはどうして種えることができないのか。色界の中には大く諸の梵（天）王がいて、常に仏が初めに法輪（dharma-cakra）を輪する請つた。これらは智慧が清浄であつて仏道を求めている。じつとして三十二相の因縁を種えることができないとこうのか。まだ、「人（道）の中には種える」とができるが余道には種える」とができないといふ。うけれども、娑伽度龍王は十住（daśamābhūmi）の菩薩である。阿那婆達龍王（Anavataptanāgarāja）は七住（saptamābhūmi）の菩薩である。羅睺阿脩羅王（Rāhu asurarāja）もまたじつに大菩薩である。またじつ

福德是名百福相。不應一思種一相。餘事尙不得一思種一事。何況百福相。何以故言釋迦文尼菩薩心未純淑。弟子心純淑。彌勒菩薩心純淑弟子心未純淑。是語何處說。三藏中摩訶衍中無是事。此言出自汝心。汝但見釋迦文尼菩薩。於寶窟中見弗沙佛七日七夜以一偈讚。彌勒菩薩。亦種種讚弗沙佛。但阿波陀那經中不說。汝所不知無因緣故。汝便謂彌勒弟子心未純淑。如是皆爲違失。汝言菩薩一切物能施無所愛惜。如尸毘王爲鵠故。割肉與鵠心不悔恨如以財寶布施。是名下布施。以身布施是名中布施。種種施中心不著。是爲上布施。汝何以讚中布施。爲檀波羅蜜滿。此施心雖大多慈悲。有知智慧。有不知智慧。如人爲父母親屬不惜身。或爲主不惜身。以是故知爲鵠不惜身是中布施。

92c して余道には因縁を種えることができないというのか。汝は人中の闇浮提 (Jambudvipa) には種える (ハシがである) といつて鬱怛羅 (Uttarakuru) には種える) とができるな」といっている。ある義によるも、ハシの人々 (々) は吾我というがなくて樂に著して利い (機) 根 (tikṣṇendriya) をもつていいながらだが、劬陀尼 (Godāniya) と弗婆提 (Pūrvavideha) の二処は福德 (punya) も智慧 (prajñā) も寿命 (āyus) も闇浮提に勝つていい。どうして種える) ことができないのか。またハシに、汝は一つの思 (cetanā) と一つの相を種える) いうが、その (拋りどころである) 心 (citta) は彈指の頃に六十の生滅がある。一心のうちで住まる) と (sthiti) はなく、よく分別すること (vibhāga) ができない。どうして大人の相を種えるのか。この大人の相はとうてい (一) 心のうちに種えることはできない。こういうわけで、多くの思が和合してはじめて一相を種えられる。重い物は一人で担うことができないので、多くの人の力を順いるようにものである。このように相を種えることと、要す大心と多思との和合することをえて、それから種えることができるのである。こういうわけで百福相 (śatapunyalakṣaṇa) という。百の大心と思とが (相を) 種えるのである。これを百福相と。一思に一相を種える) ではない。余の事であつてもやはり一思に一事を種えることはできない。いわんや百福相はなおさらである。どうして釈迦文尼菩薩の心は純淑していないのに弟子の心が純淑し、弥勒菩薩の心は純淑しているのに弟子の心が純淑しないといふか。

この語はどこの説かれているのか。三蔵の中にも、摩訶衍の中にむのこのとはなし。この言は汝みずから心からしたものである。汝はただ、釈迦文尼菩薩が宝窟の中で弗沙仏 (Buddha Puṣya) を見られて、七日七夜（のあした）一〇の偈をもって讃えられるのを見ただけである。弥勒菩薩もまた種々な仕方で弗沙仏を讃えておられる。しかし、阿波陀耶經 (Avadānasūtra) の中には説かれていない。汝が知らないのは因縁がないからである。汝は弥勒の弟子は心が純淑していないというが、このようないつはみな違失である。汝は菩薩は一切の物をすすんで施して愛惜するといふがなしといふ。且毘王 (Śivi) が鵠のために肉を暫いて鷹に与えても、心に悔恨しないようなものである。財宝を布施するいし (āniśadāna) などは下の布施 (hinadāna) やり、身を布施するいし (kāyadāna) は世の布施 (madhyadāna) であり、種々の施しの中で心が著れない (niḥsaṅga) のを上の布施 (agradāna) とするのである。汝は心もしく中の布施を讀えて、檀波羅蜜を満た (dānapāramitāparipūri) とするのか。この施は心 (citta) が大慈 (maitri)・悲 (karuṇā) が多いといつて、智慧を知るゝとゆあり、智慧 (prajñā) を知らんといふとある。人の父母、親族のために身を惜しまないとか、あるいは王のために身を惜しまんとの同じである。これで鵠のために身を惜しまないのは中の布施であることがわかる。

問曰。菩薩爲一切衆生爲父母爲主者。爲一切人故。以是故。非直不惜身爲檀波羅蜜滿。答曰。雖爲一切衆生。是心不清淨。不知己身無吾我。不知取者無人無主。不知所施物實性不可說一不可說異。於是三事心著是爲不清淨。於世界中得福德報。不能直至佛道。如說般若波羅蜜中。三事不可得亦不著。是爲具足檀波羅蜜滿。如是乃至般若波羅蜜能分別大地城郭聚落作七分。是爲般若波羅蜜滿。是般若波羅蜜無量無邊如大海水。諸天聖人阿羅漢辟支佛乃至初行菩薩。尙不能知其邊涯。十地住菩薩乃能知。云何汝言能分大地城郭聚落作七分。是名般若波羅蜜滿。是事是算數法能分地。是世俗般若波羅蜜。中少許分。譬如大海水中一滴兩滴。實般若波羅蜜名三世諸佛母。能示一切法實相。是般若波羅蜜無來處無去處。一切處求不可得。如幻如響如水中月見便失。諸聖人憐愍故。雖一相以種種名字說是般若波羅蜜諸佛智慧寶藏。汝言大失。汝言四種觀。觀時觀土地觀種族觀生處。人壽八萬歲佛出世。七六五四三二萬歲中佛出世。人壽百歲是佛

問うていう。「菩薩は一切衆生のために、父母となり、<sup>主者となるのは</sup>故。以是故。非直不惜身爲檀波羅蜜満。答曰。」

だけでは、檀那 (dāna) 波羅蜜の満 (pariūri) にならな」と。

答えていう。「一切衆生のために（布施する）といつても、その心が清淨なのではない。わが身には吾我がない (anātmaka) とも知らない、取者 (pratigrāhaka) は人をなれば主もなしとを知らない、施される物 (deyadrvaya) には實性としては一 (eka) とも説えぬし、異 (anya) とも説えない、といふことを知らない。」の三つの事に心が著らわれているから、清淨でないとするのである。世界 (lokadhātu) で福德の報い (punyavipāka) を得ても、たゞやに仏道にいたるには出来ない。般若波羅蜜〔経〕のなかで、三つの事を得てもいけないし、また著われてもいけない、それを檀波羅蜜の満を具足したのだ、と説いているとおりである。」のようにして、乃至、般若波羅蜜はよく大地や城郭や聚落を分別けて七分し、これを般若波羅蜜の満とするのである。」の般若波羅蜜は無量 (apramāṇa)・無辺 (ananta) で大海の水のようである。諸天 (Deva)、聖人 (Ārya)、阿羅漢 (Arhat)、辟支仏 (Pratyekabuddha)、乃至は、初行菩薩 (Ādikārmikabodhisattva) もなおその辯達を知るといふが出来る。十地 (dasabhūmi) に住する菩薩であつてはじめて知るといふが出来るのである。

ふうして汝は大地の十城郭、十聚落を七つに分たるといふことができて、それ

93 a

出世時。若諸佛常憐愍衆生。何以正八種時中出世。餘時不出。佛法不待時。如好藥服時便差病。佛法亦如是不待時。問曰。雖菩薩憐愍衆生諸佛不待時。過八萬歲人長壽多樂。染愛等結使厚。根鈍非可化時。若百歲後時人短壽苦多瞋恚等諸結使更厚。此樂時苦。時非得道時以是故佛不出世。答曰。諸天壽出千萬歲。有先世因緣。雖多樂染愛厚能得道。何況人中不大樂。三十六種不淨易可教化。以是故人壽過八萬歲佛應出世。是中人無病心樂故。人皆利根福德。福德利根故應易得道。復次師子鼓音王佛時。人壽十萬歲。明王佛時。人壽七百阿僧祇劫。阿彌陀佛時人壽無量阿僧祇劫。汝云何言過八萬歲佛不出世。問曰。摩訶衍經有此事。我法中無十方佛。唯過去釋迦文尼拘陳若等一百佛。未來彌勒等五百佛。答曰。摩訶衍論中種種因緣。說三世十方佛。何以故。十方世界有老病死姪怒癡等諸苦惱。以是故佛應出其國。如經中說。無老病死煩惱者諸佛則不出世。復次多病人應有多藥師。汝等聲聞法。長阿含中。毘沙門王以偈白佛。稽首

が般若波羅蜜の満成<sup>かんせい</sup>と言ふのが。いのうな算数 (ganānā) の法で大地を分けるといふのは、世俗 (samvṛti) の般若波羅蜜のしめわざかな部分 (hinabhbāga) である。譬えれば大海の水の一滴か二滴なのである。眞実の般若波羅蜜は三世にわたる諸仏の母 (buddharuātr) いはべよく一切法 (sarvadharma) の実<sup>あつ</sup>相 (satyalakṣaṇa) を示すのである。いの般若波羅蜜は来たるいへぬだく、おもむりぬだく、一切の處に求めても得ぬといふが出来ず、幻 (māya) の如く、響 (pratiśructā) の如く、水中の月 (83) の如く、般若波羅蜜は諸の聖人は常に憐<sup>あわれみ</sup>愍<sup>愍</sup> (anukampa) があたがひ、(般若は) 一相 (ekalakṣaṇa) である。種々の名字 (nāmasaamketa) や、いの般若波羅蜜は諸仏の智慧の宝藏 (buddhaprajñāratnakosa) である、といふのである。(だから) 汝のいへじま大いに間違つてゐる。

汝はさう。「四種の觀 (vilokana) 」<sup>ア</sup>時の觀 (kālavilokana)、十塊の觀 (deśavilkana)、種族の觀 (kulavilokana)、生處の觀 (upapattisthānavilokana) がある。人壽 (āyus) 八万歳のとき、仏は世に出ひれ、人壽百歳のとき仏は世に出ひれる、といふ時である」と。もし諸仏がいつも衆生を憐愍 (anukampa) いひねるなら、どうしてかくらぶ八種の時にだけ世に出ひれ、ほかの時には出ひれないのか。仏法が時を待たない (kālānaprekṣa) のは、好い薬 (oṣadhi) を服んだ時、やぐに病 (vyādhī) を癒すよつたのである。

去來現在諸佛。亦復歸命釋迦文佛汝經說過去未來現在諸佛言稽首。釋迦文尼佛言歸命。以此故知。現在有餘佛。若無餘國佛。何以故。前稽首三世佛。後別歸命釋迦文尼佛。此王未離欲在釋迦文尼所得道敬愛心重故歸命。於餘佛所直稽首。

仏法もまたそれと同じて時を待たないのである。  
問う。「菩薩は衆生を憐愍むといひても、諸仏は時を待つ」とはない。八万歳をやると人は長寿 (dirghāyus) で楽しみ (sukha) が多く、染愛 (rāgatṛṣṇā) 等の結使 (saṃyojana) が厚 (sthūla) く、根氣は鈍 (mrḍvindriya) く、(教) 化が出来る時ではない。もし百歳以下の時だと人は短寿 (alpāyus) で苦 (duḥkha) 多く瞋恚 (dveṣa) 等の諸の結使が一層厚い。この樂の時も苦の時も、道 (mārga) を得る時ではない。そうゆうわけで仏は世に出られないのだ」と。

答へ。「諸天の寿命は千万歳を「えて」いて、先王 (pūrvajanna) の因縁があるので、楽しみが多く染愛が厚いけれども道を得ることが出来る。況んや人には大きな楽しみがなく、三十六種の不淨があるからた易く教化出来るのだ。そのようなわけで、人寿八万歳をすぎても仏は世に出られる筈である。この時は人は病なく心楽しいから人々はみな利根で福徳がある。福徳と利根 (tikṣṇendriya) があるから道を得やすい筈である。

またいえば、師子鼓音王仏 (Siṃhadundubhisvararāja) の時は人寿は十万歳であり、明王仏 (Ālokarāja) の時は人寿は七百阿僧祇劫 (asamkhyeyakalpa) であり、阿弥陀仏 (Amitābha) の時は人寿は無量・阿僧祇劫である。汝はどうして、「八万歳を過ぎても仏は出世されない」というのか。言えはしない。

問うていう。「摩訶衍經にはこのことがあるが、『わが（声聞の）法では

十方仏 (Daśadigbuddha) はなべ、たゞ過去に釈迦文尼 (Śākyamuni) や拘陳若 (Kaundinya) など百の仏、未来には弥勒 (Maitreya) 等の五百の仏だけがまします」ふ。

答えていふ。「摩訶衍論のうやの種々の因縁によつて三世十方の仏を説いてる。心してかといえど十方世界には老・病・死・婬 (rāga)・怒 (dvesa)・癡 (moha) 等の諸の苦惱があるからである。」のようなわけで、仏はそれぞれの国に出生されたのである。経に説いていぬじめりである。老・病・死・煩惱 (kleśa)・がなければ諸仏はずなわち出生されなかつたのである」と。また、「病人 (vyādhita) 多ければ薬師 (vaidya) は多い筈である。汝らの声聞法である長阿含 (Dirghāgama) の中で毘沙門王 (Vaisravana) は偈で仏に白うしている。「過去・未来・現在の諸仏に稽首し、またまた釈迦文仏に帰命す」と。汝の経には説いて、過去・未來・現在の諸仏を説いて稽首といへ、釈迦文尼仏に帰命といつている。このことから現在にはほかの仏があるのだ。もしほかの国に仏がなければ、どうゆうわけで前には三世の仏に稽首し、後に別に釈迦文尼仏に帰命するのか。」の (毘沙門) 王はまだ欲を離れておらず、釈迦文尼の所で道を得て敬愛の心が重かつたから帰命し、ほかの仏の所で直ちに稽首したのである。

問曰。佛口說。一世間無一時一佛出。亦不得一

聞うて。いふ。「仏は口説して一時の世間 (boka-dhātu) には一時の一仏

時二轉輪王出。以是故。不應現在有餘佛。答曰。雖有此言汝不解其義。佛說一三千大千世界中。無一時二佛出。非謂十方世界無現在佛也。

如四天下世界中。無一時二轉輪聖王出。此大福德人無怨敵共世故。以是故。四天下一轉輪聖王。佛亦如是。於三千大千世界中亦無二佛出。

佛及轉輪聖王經說一種。汝何以信餘四天下。更有轉輪聖王。而不信餘三千大千世界中更有佛。

復次一佛不能得度一切衆生。若一佛能度一切衆生者。可不須餘佛。但一佛出。如諸佛法度可度衆生已而滅。如燭盡火滅。有爲法無常性空故。

以是故。現在應更有餘佛。復次衆生無量苦亦無量。是故應有大心菩薩出。亦應有無量佛。出世度諸衆生。問曰。如經中說無量歲中佛時時出。譬如溫曇婆羅樹華時時一出。若十方佛充滿。佛便易出易得不名爲難值。答曰。不爾。爲一大千世界中佛無量歲時時出。不言一切十方世界中難。亦爲罪人不知恭敬不勤精進求道。以是故語言佛無量歲時時一出。又此衆生衆罪報故。墮惡道中無量劫尙不聞佛名。何況見佛。以是人故言

が世に出るゝとがなく、また一時に一人の轉輪王 (Cakravartin) が世に出るゝともない」と。そうだから現在にはかの仏がおられる筈はない。

答えていう。「これは（ゆうともな）<sup>語</sup>であるが、汝はその義<sup>わむけ</sup>がわかつてない。仏の説では、一の三<sup>三</sup>千大千世界 (trisāhasramahāsāhasrālokadhatu) のうちで一時に二<sup>二</sup>人<sup>二</sup>が世に出ることはない。十方世界に現在仏はない、というのではない。四天下の世界のうちに一時に二人の轉輪聖王が世に出ることはない。」の大福徳 (puṇya) の人は怨敵 (dviṣ) と世を共にすることがないと同じようなものである。」のようなわけで四天下には一人の轉輪聖王があり、仏もまた同じように三千大千世界のうちでまた二仏が世に出ることもないのである。仏と轉輪聖王は經説ではおなじ一種である。汝はどうゆうわけでほかの四天下に更に轉輪聖王がいると信じながら、ほかの三千大千世界の中でもうに仏があると信じないのか。

またつぎに、一仏は一切の衆生を度<sup>すく</sup>うことは出来ない。もし一仏が一切の衆生を度<sup>すく</sup>えるならば、ほかの仏を必要とせず、たゞ一仏だけが出世するのである。諸仏の法<sup>しき</sup>のように、度<sup>すく</sup>うべき衆生を度<sup>すく</sup>いおわって入滅するのである。(それは) 燭<sup>燭</sup>が尽きて火が滅<sup>き</sup>えるようなものである。有為法 (saṃ-skṛtadharma) は無常 (anitya) であり (自) 性空 (svabhāvāśūnya) だからである。そのようなわけで現在に更にほかの仏がある筈である。

またつぎに、衆生は無量であり、若もまた無量である。それ故に大心の

佛出世難。問曰。若現在十方多有諸佛菩薩。今

一切衆生罪惡苦惱。何以不來度之。答曰。衆生

無量阿僧祇劫罪垢深厚。雖有種種餘福。無見佛

功德故不見佛。如偈說

好福報未近  
現在不能見

大德諸聖人  
慈悲一切人

衆生福德熟  
若爲現度緣

譬如大龍王  
罪福隨本行

衰罪未除却  
大德有力人  
心亦無分別  
一時令欲度

智慧根亦利  
卽時得解脫

隨願雨衆雨

各各如所受

問曰。若自有福德自有智慧。如是人佛能度。若

無福德智慧佛不度。若爾者自有福德智慧不待佛

度。答曰。此福德智慧從佛因緣出。若佛不出

世。諸菩薩以十善因緣四無量意。後世罪福報種

種因緣教道。若無菩薩。有種種經中說。人得此

法行福德因緣。復次人雖有福德智慧。若佛不出

世。是世界中受報不能得道。若佛出世乃能得

道。是爲大益。譬如人雖有目日不出時不能有所

菩薩が出世することになる。また無量の仏が出世して諸の衆生を度<sup>す</sup>うことになる。

問うていう。「經に説いているように、無量の歳の間に、仏は入滅の時<sup>(85)</sup>々に出世される。ちょうど、溫曇婆羅<sup>(86)</sup> (udunbara) の樹が（枯れた）その時に一どにさくように、無量の歳のうちに仏が（入滅した）その時その時に出世するのである。もし十方世界に仏が充満したならば、仏はすぐ出世しやすくすくいやすくて、高い難いとは言えないのではないか」と。

答えていう。「そうではない。一大千世界に仏が無量の歳に（入滅した）その時その時に出世するのであって、一切の十方（世界）で難かしいと言<sup>(85)</sup>うのではない。また罪ある人が恭敬することを知らず、道を求めて勤めて精進することもしない。このようなわけで仏は無量の歳に（入滅した）その時その時に一ど出世する」と畠うのである。

またこの衆生は衆<sup>おお</sup>くの罪報<sup>つみ</sup> (āpattivipāka) があるから、惡道 (durgati) に墮ち無量劫の間にもなお仏の名を聞くこともなく、いわんや仏を見<sup>(87)</sup>ることもないのである。そのようなわけで、仏が出世するのは難かしいのである。

問うていう。「もし現在、十方世界に多くの諸仏菩薩がいるならば、今、一切の衆生は罪惡 (āpatti) と苦惱 (duhkha) があるのだから、どうして来てこれを度<sup>す</sup>おうとしないのか」と。

答えていう。「衆生は無量阿僧祇劫のあいだの罪 (āpatti)・垢 (mala) が

見。要須日明得有所見。不得言我有眼何用日爲。如佛說二因二緣能生正見。一從他聞法。二內自如法思惟。能如法思惟。以是故知從佛得度。能生善心利根智慧故。能如法思惟。以是故知從佛得度。如是等種種多有違錯。欲作般若波羅蜜論議故。不能復廣論餘事。

#### 大智度論卷第四

う功德 (guna) はないがい仏を見ないのである。偈に説いていふ。

好福の報い (punyavipaka) 、「まだ近いや、  
衰る罪 (āpatti)」、「まだ除却わされば、  
現在し、大德 (Bhadanta) にして有力の人々に見ゆ能わず、

大德の諸の聖人 (Ārya)、もまた分別なく、  
慈 (maitri)・悲 (anukampa) もて一切の人を、

一時に度わしめんとす。

衆生の福德熟れて、

智慧と (氣) 根また利ければ、

もしくは (濟) 度の縁を現わし、  
即時に解脱を得しむ。

譬うれば大龍王 (Mahānāga) の願に隨いて、衆や雨や火等 (88)、  
罪と福德とは本の行に隨いて、おのおの受くるところの如し。

問うていう。「もし自ら福德あるものと自ら智慧があるものは、そのようない人は、仏がよく度われ、もし福德も智慧もないものは仏は度われない」と。もしそうならば自ら福德も智慧もあるものは仏の度いを侍しない (ハ) となる。

答えていう。「ハの福德と智慧とは仏による因縁から生じたものだ。もし仏が出世しなかつたならば、諸の菩薩は十善 (daśakuśala) の因縁

(nidāna) と四無量の意 (catvāryaprāmāṇāni) と後世の罪福の報と種々の因縁をもつて教え導くのである。もし菩薩がいなければ、種々の經に説かれているように、人はその法を得て福德の因縁を行ずるのである。

また次いで人に福德と智慧とがあつても、まし仏が出世しなかつたら、この世界で (よい) 報いを受けても道を得ることは出来ない。もし仏が出世されたならば、そこではじめて道を得られるのであり、それが大益<sup>(91)</sup>なのである。やうど、人に目があつても日が出ぬと、見るものがないことになり、もし日が (出て) 明るくなると、見るものがあることにある。「我に眼があるから、どうして日が用ゐるのだ。」とは言えないのである。仏が説いている通りである。一つの因と一つの縁とがあつて、よく正しく見るといふことができるるのである。一つには他人から法を聞くとであり、二つには内に自ら如法に思惟することである。福德の事から、よく善い心と利い(機)根と智慧を生むことから、よく如法に思惟するのである。それ故に仏によつて度いが得られることが知られる。このように種々の多くの違錯がある。

般若波羅蜜の論議 (upadeśa) をしようとするから、これ以上、広くほかの事を論ずるゝとは出来ない。

〔注〕

(1) 上数 上位のすぐれた順のあげ方。用例は見出せない。

(2) 秘密 仏法の教説のしかたの一。現示と対比している。秘密教・秘密法ともいう。秘奥幽妙に説かれ表面からは測り知れない教え。〔智度論・卷七六〕復次諸仏秘密法、菩薩夢中得見。(T二一五・五九七b)

(3) 現示 前記の「秘密」と対比される。顯露に説かれた教え。

現示教。なお「智度論・卷六五」諸仏事有二種、一者密、二者現。(T二一五・五一七a)とあるように、「密」と「現」の

一字でも使われる。智顕の『法華經玄義』卷十上・下には、頓漸不定の教判中、その不定教に顯露不定と秘密不定の二教を開いている。所謂、「顯密二教」として説かれる典拠。「現示」の字句は、馬鳴菩薩造・真諦三藏訳「大宗地玄文本論・卷二〇」現示本因決定証成除疑生信大決択分(T三三・六九二b)に見える。普通には秘密に対しては顯示が用いられる。

(4) 福田 福徳を生ずる田の如き存在。「阿毘曇甘露味・卷上・布施持戒品」云何田好、有三種田、有大德、有貧苦、有大德貧苦。云何大德、仏菩薩辟子仏阿羅漢阿那含斯陀含須陀洹。云何貧苦(略)。云何大德貧苦、有仏菩薩辟支仏阿羅漢阿那含斯陀含須陀洹、老病聾盲瘡瘻貧苦。大德田者(略)、大德貧苦田者、恭敬憐愍心得大報、是為福田好。(T二八・九六六a)『智度論』では、本文のこの箇所に仏・辟子仏・

阿羅漢の三種を挙げている。この中、仏に関して「不退転法

輪經・卷三・重釈二乘相品四」於億福田中、仏福田最勝(T九・二四六a)とある。阿羅漢に関しては、尊婆須蜜造・僧伽跋澄等訳「尊婆須蜜菩薩所集論・卷八・菩薩所集行捷度首」以何等故、阿羅漢謂之福田耶。或作是說、心無垢著能供事彼者便獲大福、如田除去惡草穀好滋茂。(中略)或作是說、心修行根力覺意、便緣善心生諸福業、是故阿羅漢謂之福田也。(T二一八・七七九c~七八〇a)とある。

(5) 無生法忍 anutpattikadharmaśānti 法空の智。有・空亦有亦空・非有非空を越えたさとり。菩薩は、次の三種の行位にあるという。(1)七・八・九地の菩薩。(2)初地不退の菩薩。(3)初住不退の菩薩。ここでは、その行位は不明である。

(6) 五道 五趣・五惡趣とも pañcagatayah 地獄・餓鬼・畜生・人間・天上。〔智度論・卷三〇〕問曰、阿修羅即為五道所攝。是阿修羅非天非人、地獄苦多畜生形異。如是應鬼道所攝。答曰、不然。阿修羅力與三十三天等。何以故。或為諸天所破、或時能破諸天、如經中說。釈提桓因為阿修羅所破。

(T二一五・二八〇a)

(7) 五欲 前記。

(8) 律儀 等護・擁護・防護・護・禁戒とも。律法・儀式の意味で戒律を指す。〔摩訶僧祇律・卷一〕是時舍利弗、偏袒而合

大智度論和訳 (11) (中祖・諏訪・大野・吉田)

掌、隨順転法輪、請求最勝説、勸請於世尊、今正是其時、願為弟子衆、広制戒律儀、能令仏正法、長夜得久住、顯示甘露門、開化天人衆。(T二二一・二二七c)「薩婆多部毘尼摩得勒伽・卷七」謂律儀、有犯一事得大罪(T二二一・六〇七a)

(9) 儀法 礼儀法度のこと。「弥沙塞部和醯五分律・卷一四」此諸比丘尼如王夫人貴家婦女、乘乘行來無有儀法、諸長老比丘尼聞種種罰責。(T二二一・九四b)

(10) 声聞經 智度論卷二・百には、四阿含(増一・中・長・相應)の語があり、摩訶衍經と対比している。(T二五・三四c、同七五六b)「摩訶般若波羅蜜經・卷四」復次須菩提、惡魔復作仏形像到菩薩所、為說聲聞經、若修妬路乃至優波提舍、教詔分別演說如是經、不為說魔事魔罪。當知是菩薩摩訶薩惡知識。(T八・二四一-a-b)「声聞契經」ともい

(11) 在家菩薩 (12) 出家菩薩

四衆の範疇に菩薩は扱るが、菩薩の範疇に四衆は扱らない、との説である。出家菩薩と在家菩薩とを並べた史料として「摩訶般若波羅蜜經・卷一」爾時普明菩薩從寶積仏受千葉金色光明蓮華与無數出家無數出家在家菩薩及諸童男童女俱共發引皆供養恭敬尊重讚歎東方諸仏。(T八・二二八b)と「大般若波羅蜜多經・卷一・初分縁起品第一之二」時普光菩薩受花奉勅、与無量百千俱胝那庾多出家在家菩薩摩訶薩、及無數

(13) 百千童男童女、頂礼仏足、右繞奉辭。(T五・三b)がある。なお、本論の卷八一には、菩薩の二種(出家・在家)を説き、波羅蜜行の修法に相違のあることを示している。

(14) 求生天人 天上界に生ずることを求める人。釈尊の次第説法で四諦説の前に(1)施論、(2)戒論、(3)生天論を説いたとされ、その生天論は一般人の常識であった。

(15) 楽求自活人 自活を樂い求める人。邪命外道のこと。出家でありながら自活のために物を売り、吉凶を占い、呪術を修している人。「長阿含經・卷一四・梵動經第二」如余沙門婆羅門食他信施。行遮道法邪命自活。瞻相男女吉凶好醜及相畜生以求利養。沙門瞿曇無如是事。(T一・八九b)本論卷一九には、邪命の五種を説示している。

(16) 波羅延優波尸難 不明。  
「波羅延經」(四分律中)、「波羅衍拏見諦經」(大毘婆沙論中)、「波羅延衆義經」(阿毘曇毘婆沙論中)等がある。なお、仏弟子に「優波尸那」*cpacana*の名が見える。

(17) 名相名 *nāma* と相 *lakṣaṇa* 名は名称や呼称、相は相状特質をいう。「大般若波羅蜜多經・卷三八四」仏告善現、所化有情住在名相虛妄分別。諸菩薩摩訶薩行深般若波羅蜜多、從彼名相虛妄分別拔濟令出。(T六・九八三c)

(18) 衆生空と法空 衆生空は、我空の異名、人空、性空ともいいう。五蘊無我、常一の我体なきこと。法空は、色心の諸法に

実体なき」と。諸法の空無・皆空なこと。「大方広三戒經・卷中」汝之空者即是言說、又汝空者、為是我空為我所空、為衆生空故。又復問言、此丘汝意如何、汝喜一切法空不也。

(T十一・六九二a)

(18) 摩訶衍經 *Mahāyāna-Sūtra* 大乘經典の通名。「虛空藏菩薩神呪經」復次若所行菩薩說衆人言、汝何為堅持波羅提木叉戒。應速發阿耨多羅三藐三菩提心、讀誦摩訶衍經。(T十三・六五九c) 大乘經典中に声聞衆と菩薩を説いているものには枚挙に遑がない。

(19) 讀摩訶衍の偈 大乗の教法を讀える偈。該當する偈は所在不明。

(20) 実法 永遠に変わらない実体的な存在。仮法に対する世間の凡夫は、存在の構成要素として、これを実体視する。〔阿毘曇毘婆沙論・卷二七〕復次仏以制法隨順世間、世間以実法不隨順仏。(T二八・一九九a)

(21) 頭目布施 本生譚に仏の前生である菩薩が、身命を惜しまず、頭目脳髄等を施与すること。〔菩薩本行經・卷上〕便作願言。今我以身施与一切。若有須肉頭目脳。我悉与之。持是功德用求仏道度一切。(T三・一〇九a～b) 同様の話は「六度集經・卷一」(T三・一b)にもある。また「大方等大集經・卷三五」に若行檀波羅蜜時。十方諸仏一切菩薩辟支佛大阿羅、皆以神力加護。是人得聖加故多饒財寶。以用布

施不可窮尽。乃至能捨頭目脳。遠離嫉妬得平等心。於一切田心無優劣。(T一三・二四三a) とある。

(22)

清淨戒 *suddhaśīla* 清淨尸羅・清淨聖戒ともいう。煩惱の垢染を離れた清らかな戒。ここは、大乘戒であるので「三輪清淨」の布施の如く、戒者・戒体・戒相が清らかな戒といふことになろう。

〔大方等大集經・卷二七〕又舍利弗。菩薩無尽清淨戒中無有倚著。(中略) 是清淨戒捨離欲塵除瞋恚滅滅無明障。是清淨戒不斷不常不逆因縁。是清淨戒無有我相捨我所相不住身見(後略)。(T一三・一九〇b)

(23) 肇牛 麋牛とも。からうし。ヤク。体側下部と尾に長く柔かで厚い綿毛がある。〔大寶積經・卷三七〕奉持於淨戒、如肇牛護尾。(T一一・一〇九a)

(24) 第九無礙 菩薩五十二位の十地に含まれる。十地中の第九に相当する。新旧両訳の『華嚴經』では「善慧地」と称す。その「善慧地」を「無礙」地というのは、菩薩がこの地に住すと、常に「四無礙智」に隨い、それを捨離することがないからである。その四無碍智とは、法無礙・義無碍・辭無碍・樂說無碍の四種である〔T九・五六八c、T十・一〇二c〕といふ。なお、本文において、「菩薩地」を説く同様の語が本論の卷七五に示されている。「菩薩地者、(中略)有人言、從一發心來、乃至金剛三昧、名菩薩地」(T二五・五八

六 a)

(25) 韶跋致 (26) 阿韶跋致 退法と不退法の菩薩のこと。

既に前回の註 (一七七頁下段 (53)) において触れた。

(27) 四道 煩惱を断じ真理を証する四種の過程。『俱舍論』卷二五には、加行道・無間道・解脱道・勝進道を説く。「俱舍論・分別賢聖品第六之四」加行道者、謂從此後無間道生、無間道者、謂此能斷所應斷障、解脱道者、謂已解脫所應斷障最初所生、勝進道者、謂三余道 (T二九・一三二a)。『瑜伽論』卷六九および『大乘阿毘達磨雜集論』卷九には、方便道・無間道・解脱道・勝進道の四種を説く。(T三〇・六八三a、T三一・七三八b)

(28) 般若波羅蜜阿韶跋致品中……如是相不退転 『大般若波羅蜜多經』卷三三五の中ほどの「初分不退転品第四十九之一」か

ら同卷三二七の「同上第四十九之三」までに廣く説示されていいる (T六・六六二b・六七七b)。この中、特に冒頭部に具寿善現は仏に対し「不退転菩薩摩訶薩、有何行有何狀有何相、我等云何知是不退転菩薩摩訶薩」と質問を發している。

(29) 般舟三昧 prayutpanna-samādhi 常行道三昧・常行三昧・現在仏悉在前立三昧・仏立三昧とも。七日ないし九十日間、行道をすると現前に仏を見る事ができるという。後漢支那譯『般舟三昧經』三卷は、この三昧によつて阿弥陀仏を見る法を明かした經典。

(30)

阿毘曇 恐らく『阿毘曇八犍度論』の注釈、『阿毘曇毘婆沙論』を指すものと思われるが、本文と一致する該当記事は不明。しかし、「阿毘曇毘婆沙論卷三七・使犍度十門品第四之二」復次若於一切種、以縁自覺、是名為仏。辟支仏雖以縁自覺、不於一切種、声聞不於一切種以縁自覺。復次若智遍所知、覓遍所覓、行遍所縁、根遍根義所、境界遍境界、是名為仏。声聞辟支仏不爾 (T二八・二七七a) の記事は、文意が相似する。

(31)

迦旃延尼子 Katyāyaniputra 迦多衍尼子・迦底耶夜那子・迦陀耶那子・迦毗延尼子・迦多衍那子・迦旃延とも。『大智度論』卷二には、迦旃延の「發智經八犍度 (II 阿毘達磨發智論)」と「六分阿毘曇 (II 六足論)」に関し触れている (T二五・七〇a)。

(32)

五法 以下の本文は、菩薩の資格条件に関する五項目を列挙したもの。ただし、単純な該数で言えば五ではなく七であり、恐らく広略が不明確なままでしたものと思われる。各種の菩薩を擧げる中の一説。その依拠は不明。

(33)

離非男法 非男の法を離れる。いわゆる「転女成男成仏」の説話である。有名な『法華經』提婆達多品の「童女成仏」はその經を信奉することの結果としてその威神力を示すものであり、それ以前における小乗經典では童女ないし女人の成仏は許されていない。大乗仏教になると「仮性」思想と関係

し、次第に女身を転じて成仏の授記といわれるよう展開していく。ここでは根底に女身のままでは無条件で「菩薩」になつたり、「成仏」する」とはないと暗に示しているといえる。

(34) 道法 bodhidharma；菩提（覚・智・道）と達磨（法・真理・教理）

(35) 摂取 おもむどる」と、えらびどる」と。「大般若波羅蜜多經卷三〇〇・初分真如品第四〇七之三】諸天子、若菩薩為攝取色故行、為棄捨色故行、為攝取受想行識故行。(T六・六三一 a)『觀無量壽經』には、弥陀の光明が十方世界を照らし念佛者を「攝取不捨」すると説かれ、これを「攝取照護」「攝護」ともいふ。

(36) 三十二相業因縁 三十二相の業因縁。三十二相の形成される業の善因縁。三十二相の名称や順位は経論によって相違するが、『大般若波羅蜜多經』卷三八一には「三十二大土相」として、(1)足下有平滿相、(2)足下千輻輪文網嚴衆相、(3)手足皆悉柔軟、(4)手足一一指間猶如鷹王咸有鷹網、(5)手足所有諸指甲満纖長、(6)足跟広長滿、(7)足趺脩高充滿、(8)双臍漸次纖円、(9)双臂脩直膚円、(10)陰相勢峰藏蜜、(11)毛孔各一毛生、(12)髮毛端皆上靡、(13)身皮細薄潤滑、(14)身皮皆真金色、(15)兩足二手掌中頸及双肩七處平滿、(16)肩項円滿殊妙、(17)髀腋悉皆充実、(18)容儀円滿端正、(19)身相脩廣端嚴、(20)体相縱廣量等周匝

し、次第に女身を転じて成仏の授記といわれるよう展開していく。ここでは根底に女身のままでは無条件で「菩薩」になつたり、「成仏」する」とはないと暗に示しているといえる。

(34) 道法 bodhidharma；菩提（覚・智・道）と達磨（法・真理・教理）

円満、(21)領臆并身上半威容廣大、(22)常光面各一尋、(23)齒相四十齊平、(24)四牙鮮白鋒利、(25)常得味中上味、(26)舌相薄淨廣長、(27)梵音詞韻弘雅、(28)眼睫猶若牛王、(29)眼睛紺青鮮白、(30)面輪其猶滿月、眉相咬淨如天帝子、(31)眉間有白毫相、(32)頂上烏瑟賦沙高顯周円の各相を列挙する(T六・九六七b～九六八a)。

(37) 算數 かぞえる。かぞえかた。数学。インド數日では五十一數ないし六十數をいう。

(38) 那由他 nayuta 那庚多・那述とも。兆・溝の意。阿由多の百億、千億に当る。

(39) 頻婆 bimbara 頻婆羅・頻跋羅。十兆。

(40) 迦他 gati 揭底か。

(41) 祈迦文佛 Śākyamuni-buddha 祈迦文・祈迦文尼とも。[六度集經卷七] 仏坐<sub>二</sub>樹下<sub>一</sub>曰、昔者錠光仏授吾尊決、當為

(42) 刺那尸棄仏 Ratnaśikhin-buddha 「俱舍論卷一三・中分別業品」三阿僧祇後出、毘婆尸燃灯宝光。祈曰、於刺那尸棄仏世尊、第一阿僧祇究竟。於燃灯仏世尊、第二阿僧祇究竟。於

毘婆尸仏世尊、第三阿僧祇究竟。於一切仏。(T二九・二四九b～c) 単に「尸棄仏」とも。『大智度論』卷九には「第三十一劫中有三<sub>二</sub>仏、一名<sub>二</sub>尸棄<sub>一</sub>火<sub>二</sub>轉<sub>一</sub>憲言附<sub>一</sub>一切勝<sub>一</sub>」(T二五・一五一五a)とあって、前記とは異なる。なお時代

大智度論和訳 (11) (中祖・諫訪・大野・吉田)

は下るが、『翻訳名義集』卷一には、右の『俱舍論』と『大智度論』に所載する「刺那」「棄仏」に関し、まとめて論じてある。(T五四・一〇五八a)

(43) 経 『俱舍論』卷十八に「若時菩薩勇猛精進因行、遇見底沙如來坐宝龕中入火界定威光赫奕特異於常。專誠瞻仰忘下一足。經七昼夜無怠。淨心以妙伽他讚彼仏曰、天地此界多聞室、逝宮天處十方無、丈夫牛王大沙門、尋地山林遍無等。如是讀已便超九劫。齊此精進波羅蜜多修習円滿」(T二九・九五b)とある。また同論の前には三十二大丈夫相が九十一劫の間に具有することを説き、本論と相応する。

(44) 弗沙 Pusya 補砂とも。ここでは釈尊の三阿僧祇劫の修行成滿後、百劫に三十二相業を修行した時に值遇した仏ともいう。これに釈尊が前生、転輪王の時に値遇した仏ともいふ。

なお、底沙 Tiṣya (帝沙・提沙とも) と同一と見做される前記 (43) の『俱舍論』の説とは別に、弗沙と底沙とを別人とする経論、すなわち『大毘婆沙論』卷一七七もある。

(45) 宝窟 宝玉で莊嚴に飾られた洞窟の意。前記 (43) の『俱舍論』では「宝龕」という。

(46) 火定 火燄三昧・火光三昧・火生三昧と類。(43) には「火界定」とあった。

(47) 韶婆尸仏 Vipaśyin-buddha 毘婆尸仏・毘鉢尸仏・毘婆沙仏とも。勝觀・浮見・広見・種々観と訳す。過去七仏の第

一。前記の『長阿含經』卷一「大本經」や『七仏經』、『雜阿含經』卷十五、『增一阿含』卷一・四四・五十等々に出で。蜜の一つ。完全な忍耐の意。『優婆塞戒經』卷七に「羼提波羅蜜品」があり、そこに世忍と出世忍、および忍辱と忍辱波羅蜜との各二種の相違などを説示している。(T二四・一〇七二c~一〇七三a)

(48) 翳提波羅蜜 Kṣānti-paramitā 忍辱波羅蜜のひとつ。六波羅蜜の一。羼提波羅蜜 Kṣānti-paramitā 忍辱波羅蜜品」があり、そこに世忍と出世忍、および忍辱と忍辱波羅蜜との各二種の相違などを説示している。(T二四・一〇七二c~一〇七三a)

(49) 戸毘 Śivi 渥轉・「毘迦とも。安穩の意。「割肉貿鵠」の逸話に登場する王の名。本生譚中の有名な話の一。『菩薩本行經』卷下や『大寶積經』卷八十等に説示。「菩薩本行經、卷下」仏言、我為戶毘王時、為一鵠故割其身肉、興立誓願除去一切衆生危嶮。(T三・一一九a)

(50) 帰命救護陀羅尼 一切衆生を救濟護持するに全身心を献ずる信念を確認するための呪文。同種と思われるものに「救苦陀羅尼」の用例がある。「千手千眼觀世音菩薩廣大円滿無礙大悲心陀羅尼經」阿難白仏言、世尊此呪名何云何受持。仏告阿難、如是神呪有種種名、一名廣大圓滿、一名無礙大悲、一名救苦陀羅尼、一名延壽陀羅尼(中略)、一名速超上地陀羅尼、如是受持。(T一〇・一一〇a)

(51) 釈提桓因 帝釈天のこと。前回の註へ二三四頁の(5)▽を参照のこと。

(52) 毘首羯磨天 Viśvakarman 毘首羯磨・毘濕縛羯磨とも。

妙匠・工匠・種々工芸の意。帝釈天の輩下にあり、工芸や建築を司る。「阿毘曇毘婆沙論卷四七・智鍵度八道品上」問曰、如報慧微劣可爾。威儀工巧者、亦有勢用、如世尊威儀毘首羯磨天工巧。乃似願智所作。答曰、雖極工巧、為邪命所覆。

(T二一八・三六〇c～三六一a)

(53)

魚子菴樹華 魚子と菴樹華。因の多く、果の熟することの少ない譬喻例。魚卵は多いが成魚に育つのは少數である。菴樹

(菴摩羅樹 *āmra*) の華も多いが果実は少ない。「一切經音義卷十一」又云菴羅樹花多果少。(T五五四・三七一b)

(54)

優戸那種 *Usinara* 中天竺の一民族名、また國名。「經律異相卷二五・戸毘王割肉代鵠四」帝釈問誰、是優戸那種戸毘王、釈提桓因語毘首羯摩、今當試之言。(T五五三・一三七c)

(55)

慈仁 慈悲と仁愛。「經律異相卷二五・戸毘王割肉代鵠四」是時衆多人相与而語、是王慈仁一切宜保護、如鵠小鳥帰之如人入舍。(T五五三・一三七c)

(56)

大地為六種振動 前回の註△二三五頁の(23)△に「六種動」として既述。以下の叙述は一種の「瑞相」である。

(57)

枯樹生華 「普曜經卷二・三十二瑞品」陸地枯樹皆生華葉。(T三・四九三a) これは仏誕の「瑞相」の一として記す。

(58)

降香雨 同右。「普曜經卷二・三十二瑞品」(九者)天為四面細雨沢香。(T三・四九三a)「散華」に関しては、『大般若波羅蜜多經』卷五五四の第四分「散華品」第二八(T七・八

大智度論和訳(1) (中祖・諷訪・大野・吉田)

五四c～八五九c)がある。『大智度論』卷九には、仏身上に散華する理由(T二五・一二三b)などを論じ、同卷五五には散華が三宝を供養する意義(T二五・四五一c)などを述べている。なお「名華」に関しては、『仏本行集經』卷二の発心供養品に「八功德水、湛然盈滿、種種名華。所謂優鉢羅花、波頭摩花、拘勿頭花、分陀利花、弥覆水上」(T三・六六〇a)や『大智度論』卷九の「如是諸天見<sub>ニ</sub>仏身清淨大光明、淨<sub>ニ</sub>持諸供具水陸諸華。陸地生華須漫提為第一、水中生華青蓮華為第二。若樹生華若蔓生華、是諸名華種種異色種種香熏、各持天華來<sub>ニ</sub>詣仏所、以<sub>ニ</sub>此諸華色好香柔軟細滑。此故以<sub>ニ</sub>此為<sub>ニ</sub>供養具」(T二五・一二三a)が参考になる。

「天華」については、前述に続き論述されている。  
一切智樹牙 一切智の樹牙。樹牙の「牙」は「芽」か。  
(59)

(60) 須陀須摩王 *Sutasoma* 修陀素弥・須陀摩とも。普明の意。

(61) 劫磨沙波陀大王 *kalmāṣapāda* 迦摩沙麁王・迦摩沙波陀とも。駁足・駁足・班足・鹿足・兩翅の意。

この(60)と(61)に関し、『菩薩本行經』卷下に「須陀素弥王」が「迦摩沙麁王」を正見に入らしめる話(T三・一九b)。『仁王般若波羅蜜經』卷下護國品第五に「普明王」が「斑足王」を偈によつて歎喜させた話(T八・八三〇a)～c)。『賢愚經』卷十一無惱指鬘品に「迦摩沙波陀(駁足)

大智度論和訳(二) (中祖・諏訪・大野・吉田)

が「須陀須弥王」を把え殺歟しようとしたが、偈によつて悔悟したという話(四四・四二五a～四二七c)などがある。この中、本論の話は『賢愚經』の筋に近い。

(62) 嫔女 采女とも。女官を指す。『道行般若經卷九・薩陀波倫菩薩品第二八』時長者与諸伎人媔女五百人、相隨來至薩陀波倫菩薩所。(四四・四七二c)

(63) 兩翅王 劫磨沙波陀大王に同じ。前記(61)参照。

(64) 鹿足 同右。

(65) 九十九諸王 各諸王の名は不明。經典によつてその数が相違する。『六度集經』卷四「普明王經」では九十九王(T三・二二c)、『賢愚經』卷十一「無惱指鬘品」と『仁王般若波羅蜜經』卷下「護國品」では九百九十九王(T四・四二六c、T八・八三〇b)、失訳『雜譬喻經』卷上では四百九十九王(T四・五〇三c～五〇四a)となつてゐる。

(66) 麟提比丘 Khaṇtipāla 麟提波梨、迦梨王の時に仙人としてあり、迦梨王から媔女をめぐつて両手両足を断たれて忍辱を行じた。

〔賢愚經、第二〕有一大國。名波羅捺。當時國王。名為迦梨。爾時國中。有一大仙士。名麟提波梨。與五百弟子。處於山林。修行忍辱。于時國王與諸群臣夫人媔女。入山遊觀。：(諸媔女輩)見麟提波梨端坐思惟。敬心內生。即以衆花。而散其上。因坐其前。聽所說法。……王即拔劍。而語之言。

若當忍辱。我欲試汝。知能忍不。即割其兩手。……

(67) 大施菩薩 摩訶闍迦樊か、「翻梵語2」摩訶闍迦檀、應云摩訶檀那、經日大施。(五四・九九九b)「賢愚經、卷八」歌羅羅 胎兒の二百六十六日間の生長の次第を五段階に分けて胎内の五位をいうが、歌羅羅はその第一で受胎後の七日間をいう。凝滑と訳す。

〔真評、俱舍論、卷十二〕釈曰。若欲界中陰。能引二十二葉。此云何。胎位有五。謂椅羅邏・額浮陀・俾尸・伽訶那。

波羅捨法。(二九・二三八b)「一切經音義、卷四十七」羯羅藍(梵語旧言。歌邏邏。此云凝滑。受生七月。凝滑如酪上凝。受合如蜜和酪。琅然成一。父母漸結。有肥滑也。)(五四・六二二a)

〔一切經音義、卷二十六〕歌羅羅(受胎七日不浮)和合之時也。(五四・四七三c)

(69) 額浮陀 額浮陀即ち安浮陀時、額部陀とみる(胎内の五位の第二。胞・胞結と訳す。前註参照)。

〔一切經音義(林五一ノ一四才参照)未詳〕

〔一切經音義、卷二十六〕安浮陀時亦云。阿浮陀即二七(T五四・四七三c)

〔一切經音義、卷四十七〕額部陀(梵語亦言。過部疊。或作額浮陀。皆泡。謂至第二七日。於疑酪中生。)(五四・六二六a)

(70) 伽那 伽那即ち伽那時とみる。

〔一切經音義、卷二十六〕伽那時(云亦健男。即三七日時。狀似凝酪也。)(五四・四

七三c) (これによれば (68) 歌羅羅にみる「俱舍論」の伽訶

那を第四とするものと矛盾)

「一切經音義、卷四十七」伽那即ち閉戸、卑戸とみる。

閉戸亦名卑戸。此云肉團至三七日。結聚成肉團。若男則上  
闕下狹若女則上狹下闕。雖成害團。猶未至苦堅也 (T五四・六二  
二a)

(71) 五胞 本文の割注なし。

「一切經音義、卷四十七」鉢羅奢法? (T五四・六二二b)

その他 (T五四・七九三c) (T五四・卷四十六)

(72) 経行 一定の個處を往復歩行することをいう。〔十誦律、卷

五七〕経行法者。比丘應真経行不遲不疾。若不能直、当画地作相、隨相直行。是名経行法。(T一二一・四二二c)

(73) 「法華經、方便品」我始坐道場。觀樹亦經行。(T九・九〇)

藍風→毘嵐風。吠濫婆。劫初や劫末に起る迅速猛烈な大風を

いう。〔智度論、卷十一〕大迦葉言。……譬如須弥山、四辺

風起。不能令動。至大劫尽時。毘藍風起如吹爛草。(T二五・

一三九b-c) 「一切經音義卷二十」毘嵐カ含反。或作毘藍。或  
之楚夏耳。此訛云。迅猛風也。梵 (T五四・四三一b)

(74) 隆満 [沈約、致仕表] 若蒙天地大恩。造物洪施。拯其隆満。

之切。救其害盈之災。

(75) 難陀 [仏所行讚・卷三] 有一收中長。長女名難陀。淨居天來告。……汝應往供養。難陀婆羅闍歎喜到其所。……敬奉

香・乳糜。(T四・三四c)

(76) 石蜜 [本草綱目、果部、三三卷] 稹名、白沙糖。

(77) 尽智・無生智 十智中の第九智・第十智をいう。『俱舍論』

では、智を大別して有漏智(世俗智)と無漏智とし、それには法・類・苦・集・滅道・他心の八智を前段階の智として挙げる。尽智は「我れ己に四諦を体现し尽した」と知る智で、無

生智は「我れ己に四諦を体现し終えた」と知る智をいう。ともに無学の阿羅漢にのみ具わる智とされる。『俱舍論』第二

六」(T二九・一三四c以下)

(78) 三意止 [中阿含五十二・分別觀法經] 三意止謂聖人所習。

已衆可教者。此何因説。若如來為弟子說法。憐念愍傷。求義及饒益。求安隱快樂。若彼弟子而不恭敬。亦不順行。不立於智。其心不趣向法次法。不受正法違世尊敬。不能得定者。世尊不以此為慕感也。但世尊捨無為。常念常智。是謂第一意止。……(T一・六九三c~六九四b)

また「仁王□□經卷上」では四意止(身不淨・受苦・心無常・法無我)と並記して三意止を説く。三意止。三善根。慈施慧也。(T八・八二六c)

(79) 燃灯仏 諸經中に釈尊以前に毘婆尸仏等の諸仏の出現を説く

(長阿含大本經・雜阿含第十五・同十七等)。また太子瑞應本起經卷上・四分律第三十一等には、釈尊の因位における授記の師として燃灯仏(錠光仏)を挙げる。釈迦因位の第二阿僧祇劫の満時に錠光仏の出世に逢い、名を儒童という。五華の

大智度論和訳(二) (中祖・諫訪・大野・吉田)

- (80) 蓮を仏に供養して地の泥汚をみて自らの髪を解いて地に敷いて仏に歩ましめたという。
- (81) 〔竺法護、光讚経、卷九〕彼合三事而有布施。何謂為三事。〔竺法護、光讚経、卷九〕彼合三事而有布施。何謂為三事。自想。吾我想。計他人有施報想。是為三。(T八・二〇九c)
- (82) 〔摩訶般若波羅蜜經、卷十法施品〕仏吉枳提桓因。言。菩薩摩訶薩布施時。不得与者、不得受者、不得所施物。是人得具足檀那波羅蜜。……(T八・二九四a)
- (83) 初行菩薩 前記の法施品では初發意菩薩摩訶薩と見える。
- (84) 水中月 〔智度論、卷六〕(T二五・一〇二b) 和訳二三七頁註(52) 頭目髓脳布施→七三a-L3
- (85) 大心 よい心 〔玄奘訳、俱舍論、二六〕大心者謂善心。(T二九・一三六a) 〔智度論、卷四〕答曰。菩提名諸仏道。薩埵名或衆生或大心。(T二五・八六a)
- (86) 如經中說……〔羅什訳、法華經卷一、譬喻品〕諸仏興出世。懸遠值遇難。正使出于世。說是法復。無量無數劫。聞是法亦難。……譬如優曇花。一切皆愛樂。天人所希有。時時乃一出生。(T九・一〇a)
- (87) 溫曇婆羅樹→優曇波羅樹 〔大智度論、卷九〕説言、仏世難值。如優曇波羅樹華。時時一有(T二五・一二五c)
- (88) 譬如大龍王。隨願雨衆雨 〔大智度論、卷三〕復次如大龍王。從大海出。起於大雲。遍覆虛空。……澍大洪雨。潤沢万物。
- (89) 本行 仏の智慧をうるためのもととなる行い。〔羅什訳、法華經、卷五〕我本行菩薩道。所成寿命。(T九・四二c)(T二五・八一b)
- (90) 福德智慧 〔玄奘訳、俱舍論二七〕福德智慧二種資糧修無遺故……(T二九・一四一b)
- (91) 大益→大利益 〔羅什訳、般若經、卷九〕聞般若波羅蜜有大利益故。(T八・二八六b)